

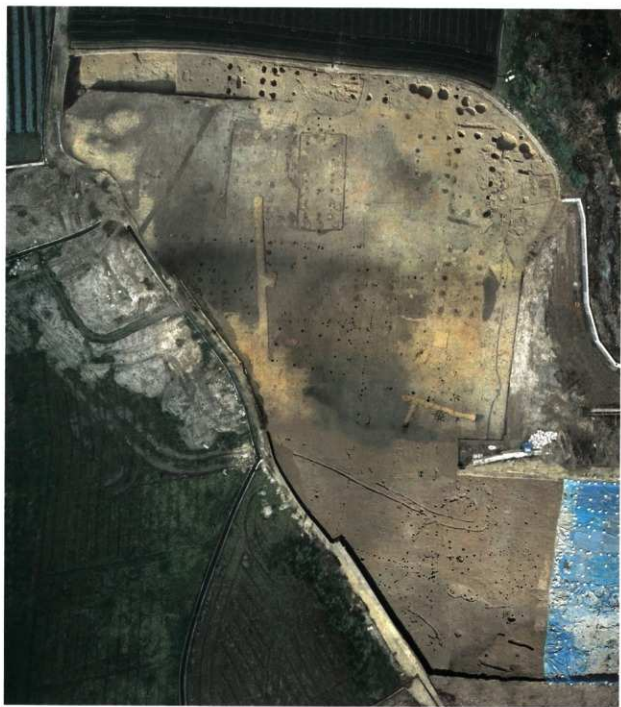
南あわじ市文化財調査報告書 第1集

南あわじ市埋蔵文化財発掘調査年報Ⅰ

2000～2004年度 埋蔵文化財発掘調査

2008年3月

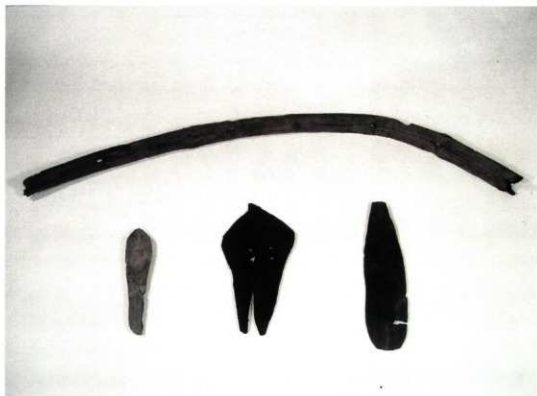
南あわじ市教育委員会



嫁ヶ淵遺跡 2次調査 (上が北)



嫁ヶ淵遺跡 4次調査（上が東）



嫁ヶ淵遺跡4次調査 出土木製品



汁谷窯跡2次調査 遺構106 出土遺物



西山北古墳 石室（南東より）



国分遺跡7・9次調査 1号瓦窯（左）・2号瓦窯（右）（南より）

はじめに

早いもので三原郡4町が合併し、南あわじ市が誕生して3年が経ちました。

合併後も圃場整備事業など大規模開発の波は留まることなく、むしろ増加傾向にあり、埋蔵文化財を含めた文化財行政にとって、非常に厳しい状況が取り巻いております。しかしその一方で、発掘調査から得られた新たな知見の増加により、古代において淡路国の国府が置かれた南あわじ市の重要性、また他の時代においても非常に興味深い地域であることが益々明らかになりつつあることは、当市の文化財行政にとって非常に喜ばしいことと言えます。

この開発事業に伴う発掘調査から得られた資料は、我々の祖先の営みを探ると同時にふるさと淡路を知る資料になり、今後後世に継承していくことが、現代社会に生きる我々の重要な責務と認識しております。

今年年報という形で不十分さもあるとは思いますが、今後もさらなる努力により本市の文化財保護と理解に努めていく所存ですので、ご支援賜りますようよろしくお願いします。

最後になりましたが、本書を作成するにあたり、ご指導ご協力いただいた方々に対し、心よりお礼申し上げます。

南あわじ市教育委員会

教育長 塚本圭右

例言

1. 本書は、緑町・西淡町・三原町・南淡町の旧三原郡4町において、2000（平成12）～2004（平成16）年度に実施した、埋蔵文化財発掘調査の記録である。三原郡4町は平成17年1月11日に合併し南あわじ市となったが、便宜上本書では旧町名を用いる。
2. 発掘調査は、三原郡4町の各町教育委員会を調査主体として実施した。調査は三原郡広域事務組合教育委員会の坂口弘貴・山崎裕司・定松佳重・的崎薫・谷口梢（現丸亀市教育委員会）が担当した。
3. 出土遺物の整理作業は、宇治田力・垣脇美奈子・新崎都・豊田亜希子・初田典代・濱本善美・細川光代・樹本早苗・山田いずみが行った。
4. 本書の編集は、南あわじ市教育委員会の山崎・坂口が行った。執筆・レイアウトは文末に記している。調査担当者については、調査一覧表に記す。
5. 各遺跡の発掘調査および本書作成にあたっては、多くの方々のご協力とご指導をいただいた。ここに記して深く感謝の意を表する（敬称略）。

青木美香・伊藤宏幸・浦上雅史・柏原正民・篠宮正・芝香寿人・嶋谷和彦・中村俊夫・中村弘・西口和彦・菱田哲郎・深井明比古・藤田淳・藤原学・三辻利一・村本豊・森森夫・森内秀造・森岡秀人・森下大輔・森永速男・山中敏史・山本誠・渡辺昇・京都府立大学考古学研究室・富山大学考古学研究室・上田健太郎

目 次

巻頭写真図版

はじめに

例 言

第1章 三原郡内埋蔵文化財事業の動向

第1節 発掘調査の動向	1
第2節 整理・普及活動の動向	2

第2章 発掘調査の成果

第1節 発掘調査一覧表および調査位置図	3
第2節 主な発掘調査の成果	9
1) 2000(平成12)年度	9
2) 2001(平成13)年度	32
3) 2002(平成14)年度	47
4) 2003(平成15)年度	69
5) 2004(平成16)年度	88

第3章 資料紹介

1) 神代浦壁出土勾玉	100
2) 戸川池窯跡	101

第1章 三原郡内埋蔵文化財事業の動向

第1節 発掘調査の動向

ここでは、平成12(2000)年度から平成16(2004)年度にかけての発掘調査の状況を見てみる。

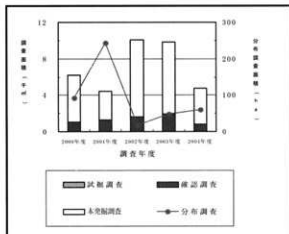
詳細は第2章に譲るとして、試掘・確認・本発掘調査を合わせた各年度の発掘調査量は、平成12年度が6,182.7㎡、平成13年度が4,444.6㎡、平成14年度が10,052.3㎡、平成15年度が9,821.9㎡、平成16年度が4,716.3㎡となり、4,000㎡～10,000㎡の発掘調査を行ってきたことがわかる。発掘調査量が減少した平成16年度は三原郡4町が合併した年度で、一時的に開発量が減少したものと想定される。発掘調査量が増加した平成14・15年度には臨時の調査員及び補助員など、臨時職員の増員により事業に対応してきた。

各調査は、これまで同様に圃場整備事業が主たる原因である。県営圃場整備事業では、三原町でこれまでの継続事業である榎列幡多地区や平成12年度より神代南地区、団体営圃場整備事業では八木の実原・野原地区などでも新たに事業が始まった。これらの地区では、これまでほとんど遺跡の状況が把握できていなかったが、調査の進行とともに新たな知見を得ることになり、今後の資料整理が課題となろう。また新たに始まった下水道事業に伴う塚ヶ瀬遺跡や淡路国分尼寺の調査では、淡路を代表する官衙遺跡の確認や寺域が推測できる資料など、それぞれ大きな成果を得た。

なお平成17年1月11日の緑・西淡・三原・南淡4町の合併に伴い、三原郡広域事務組合で行ってきた埋蔵文化財調査は、南あわじ市教育委員会管轄のもと南あわじ市埋蔵文化財事務所が行うようになった。

	分布調査 (ha)	試掘調査 (㎡)	確認調査 (㎡)	本発掘調査 (㎡)	合計 (㎡) (分布調査除く)
2000(平成12)年度	91.91	0	1,042.0	5,140.7	6,182.7
2001(平成13)年度	243.6	0	1,252.0	3,192.6	4,444.6
2002(平成14)年度	18.4	8.0	1,620.9	8,423.4	10,052.3
2003(平成15)年度	49.3	12.0	1,943.4	7,866.5	9,821.9
2004(平成16)年度	60.8	0	833.0	3,883.3	4,716.3

発掘調査量の推移 1



発掘調査量の推移 2

年 度	発掘面積 (㎡)	職 員 数			
		正規 調査員	臨 時		
			補 助 員 外 業	内 業	
2000年度	6,182.7	4	0	4	3
2001年度	4,444.6	4	0	3	2
2002年度	10,052.3	4	1	5	2
2003年度	9,821.9	4	1	6~3	2~3
2004年度	4,716.3	4	1	3~2	3

職員数の推移

第2節 整理・普及活動の動向

平成7年7月から阪神淡路大震災を契機に仮設事務所で業務を行っていたが、平成15年10月より三原町神代国衛にあった旧三原町・南淡町学校給食センターの建物を改築し、業務を行うようになった。それまで各町教育委員会で保管していた出土遺物も一括保管するようになり、作業スペースの両や遺物の把握に関して作業が円滑に進むようになった。

これまで課題であった啓蒙・普及活動については、平成14・15年度には宮衛遺跡である嫁ヶ淵遺跡や淡路国分寺の瓦窯である国分遺跡の現地説明会を実施した。また平成13～15年度には、郡内の図書館や資料館を利用してテーマを決め、継続的に展示会を行うことができた。

さらには、平成10年より兵庫県下で実施されているトライやる・ウィークの受け入れをし、毎年生徒たちが現場や内業作業を行った。

三原町教育委員会ではゆとり教育の一環として「100円塾」を開き、その1つとして広域事務組合と協力して勾玉作りや蛸鐸作りを実施した。

以上、本5ケ年はこれまでにない活動も織り交ぜつつ、業務に取り組んできた結果、わずかずつつであるが、埋蔵文化財に対する理解は高まりつつあるように感じられる。 (坂口)

年 月 日	町 名	名 称	内 容
平成13年9月11日～11月4日	南淡町	古墳時代のみはら	展 示 会
平成14年9月21日～10月19日	南淡町	中世のみはら	展 示 会
平成15年2月11日	南淡町	嫁ヶ淵遺跡・A～C地区	現地説明会
平成15年4月20日	南淡町	嫁ヶ淵遺跡・D～E地区	現地説明会
平成15年9月6日	三原町	国分遺跡	現地説明会
平成16年2月3日～22日 3月2日～14日	南淡町 三原町	古代のみはら	展 示 会
平成17年1月10日	三原町	国分遺跡発掘調査報告書	報告書刊行

埋蔵文化財調査成果公開一覧

年 月 日	学 校 名	人 数
平成12年5月29日～6月2日	三原中学校	3
平成13年5月21日～25日	三原中学校	2
平成14年5月20日～24日	三原中学校	3
平成15年5月12日～16日	三原中学校	3
平成16年5月31日～6月4日	南淡中学校	6

トライやるウィーク受け入れ一覧

第2章 発掘調査の成果

第1節 発掘調査一覧表及び調査位置図

2000(平成12)年度

No.	事業名	町名	所在1	所在2	内容	担当者	遺跡名	調査期間	成果概要
	基礎整備促進事業(木佐佐野地区)	南淡町	阿万	上町	本発掘	的確	下中原	H12.5.8 ~12	中世と思われる柱穴・溝確認。
	堂ノ向企業誘致敷地造成事業	緑町	広田	中筋	分布	坂口・定松		H12.6.2 ~14	1階層上壁・須臾器採集、しかし地形的に埋蔵の可能性は低い。
	汚水処理施設(志知地区)建設事業	二原町	志知	松木	確認	定松		H12.6.5	遺構・遺物未確認。
	農営土地改良総合整備事業(神代南地区)	二原町	神代	浦壁	確認	的確	馬場ノ北	H12.6.12 ~29/8.3	2時期の遺構を確認、中世と思われる。
1	農営土地改良総合整備事業(緒多地区)	三原町	榎列	下幡多	確認	坂口	おのころ島	H12.6.12 ~7.27	縄文時代~中世の遺構・遺物確認。
	団体育土地改良総合整備事業(牛子地区)	南淡町	賀集	牛子	確認	山崎		H12.7.3 ~4	遺構・遺物未確認。
2	町道幡多山線道路改良事業	二原町	榎列	下幡多	本発掘	定松・的確	緒多	H12.7.3 ~21	7世紀末の大型起立柱建物の内照確認。神木駅家関連遺構の可能性高い。
3	町道入田おのころ線道路改良事業	三原町	榎列	下幡多	本発掘	山崎	緒多	H12.7.12 ~8.25	弥生時代後期の竪穴式住居・古代の柱列・土坑確認。
4	農営土地改良総合整備事業(神代南地区)	三原町	神代	浦壁	本発掘	的確・定松	馬場ノ北	H12.8.28 ~10.6	中世以降と思われる遺構や建物跡確認。
5	農営土地改良総合整備事業(緒多地区)	三原町	榎列	下幡多	本発掘	坂口	おのころ島	H12.9.4 ~11.13/1.17 ~22	縄文時代~中世の遺構・遺物確認。
6	西北古墳調査	南淡町	賀集	八幡北	湖屋	坂口	西北古墳	H12.9.15 ~26	直径15m前後。6世紀後半の築造。周辺に弥生時代の遺跡埋蔵の可能性あり。
7	基礎整備促進事業(木佐佐野地区)	南淡町	阿万	上町	確認	山崎	下中原	H12.10.10 ~11	中世の遺構・遺物確認。
8	基礎整備促進事業(笑原地区)	三原町	八木	四分	確認	定松・的確	桜ヶ地	H12.10.10 ~16/27 ~31	彌生寺南門に付随する溝と鉄倉初期の遺構・遺物確認。
	農営土地改良総合整備事業(神代南地区)	二原町	神代	浦壁	確認	的確	人池尻	H12.10.16 ~19	時代不明の柱穴・土坑など確認。
	基礎整備促進事業(野原地区)	三原町	八木	新江	確認	山崎	生ヶ坂	H12.10.19 ~24	弥生時代の遺物包含層・中世の遺構確認。
	一原町農村型体験交流施設整備事業	三原町	八木	賀宮上	確認	山崎		H12.10.26	遺物・遺構未確認。
	緑道土地改良総合整備事業(神代南地区)	三原町	神代	浦壁	本発掘	的確	人池尻	H12.11.6 ~9	時代不明の柱穴・土坑など確認。
8	基礎整備促進事業(木佐佐野地区)	南淡町	阿万	上町	本発掘	山崎	下中原	H12.11.13 ~30	中世の独立柱建物確認。
	町道榎列111号線道路改良事業	三原町	榎列	小榎列	確認	的確	山口	H12.11.20	柱穴確認。
9	基礎整備促進事業(笑原地区)	三原町	八木	四分	本発掘	定松・的確	桜ヶ地	H12.12.11 ~21 H13.2.15	平安末・室町後半の遺構・遺物確認。炭化物・焼土も確認し、寺所蔵の飛天像にも焼痕があることから、寺の火災を推察できる。
10	基礎整備促進事業(野原地区)	三原町	八木	新江	本発掘	山崎	生ヶ坂	H12.12.18 ~H13.2.9	弥生時代後~終末期の土器だまり、中世の祭祀遺構確認。
	農業集落排水(長田地区)処理施設建設事業	緑町	俊文	長田	確認	坂口		H13.1.9	遺物・遺構未確認。
	農営土地改良総合整備事業(大山川東地区)	南淡町	賀集	福井	分布	坂口		H13.2.9 ~26	全域で土師質土器・須臾器・石鏝採集。
11	町道榎列111号線道路改良事業	三原町	榎列	小榎列	本発掘	的確	山口	H13.2.13 ~3.5	古代もしくは中世の遺構確認。
	町道関分宮光寺線道路改良事業	三原町	市	小井	分布	坂口		H13.2.26 ~27	土師質土器・須臾器・凹基式石鏝採集。
	基礎整備促進事業(野原地区)	三原町	八木	徳野	分布	坂口		H13.3.2-8/13/14	土師質土器・須臾器・石鏝採集。
	農営土地改良総合整備事業(神代南地区)	二原町	神代	浦壁・浦家	分布	的確		H13.3.6 ~21	石鏝・土師器・須臾器採集。社家については周辺に同様の遺跡が隣接していることから遺跡である可能性が高い。
	基礎整備促進事業(中筋・鶴地区)	緑町	中筋	中筋	分布	坂口		H13.3.12	遺物散布希薄。
	ショッピングセンター建設事業(民間)	西淡町	志知	志知	確認	定松	辻ノ内	H13.3.26	赤土土器(中・後期)・須臾器・土師器・白磁瓶出土。小土坑確認。

2001 (平成13) 年度

No.	事業名	町名	所在1市街2	内容	調査名	調査期間	成果概要		
	町道等事業・新行原道路改良事業	緑町	山添	確認	山崎	H13. 4.16 ~17	遺物・遺構未確認。		
	分譲住宅地造成(民間)	緑町	広田	山崎	山崎	H13. 4.16	遺物散布あり。		
	基盤整備促進事業(舞原地区)	三原町	市	徳水	分布	H13. 5. 1	土師器・須恵器採集。		
	特定埋戻地保全公共下水道(広田浄化センター建設)事業	緑町	山添	確認	坂口	H13. 5.28 ~30	遺構未確認。		
	町道八丁通延伸・新行原道路改良事業	緑町	山添	確認	定松	H13. 6. 1	遺物・遺構未確認。		
	県営土地改良総合整備事業(福多地区)	三原町	櫻井	下福多	確認	定松・的崎	H13. 6.11 ~18	弥生中期の土器、中世の遺構・遺物確認。	
	(仮)南淡町診療所建設事業(民間)	南淡町	賀集	賀集	分布	坂口	H13. 6.18	須恵器・白磁・サマカイト採集。	
12	基盤整備促進事業(舞原地区)	三原町	八木	園分	確認	坂口	H13. 6.18 ~26	平安時代の遺構確認。	
	県営土地改良総合整備事業(神代南地区)	三原町	神代	酒造	確認	的崎・定松	H13. 6.19 ~7.12 7.30~8.1	室町時代の遺構確認。	
13	ショッピングセンター建設事業	西淡町	志知	志知	確認	定松	辻ノ内	H13. 7. 2	弥生土器(巾・波期)・須恵器・須恵器類土師器あり。南淡遺跡と関連あり?
	基盤整備促進事業(野原地区)	三原町	八木	新庄	確認	山崎	生ヶ坂	H13. 7. 2 ~4	弥生時代の遺物包含層確認。
	基盤整備促進事業(生子地区)	南淡町	賀集	生子	確認	坂口		H13. 7. 2 ~10	遺構・遺物未確認。
10	基盤整備促進事業(野原地区)	三原町	八木	新庄	木発掘	山崎	生ヶ坂	H13. 7.19 ~31	弥生時代後~終末期の土器だまり確認。
	(仮)南淡町診療所建設事業(民間)	南淡町	賀集	賀集	確認	坂口		H13. 7.30	明確な歴史的遺構未確認。
	町道上下・ゆづるは線道路改良事業	三原町	神代	社家	確認	的崎	店草	H13. 7.31	室町時代の遺構確認。
14	県営土地改良総合整備事業	三原町	櫻井	下福多	木発掘	定松	おのころ島	H13. 8.22 ~10.12	弥生後期の土器・鎌倉・室町の遺構・遺物確認。
15	基盤整備促進事業(舞原地区)	三原町	八木	園分	本発掘	坂口	園分	H13. 8. 2	平安時代の遺物確認。
	県営土地改良総合整備事業(神代南地区)	三原町	神代	酒造	本発掘	山崎	虎杖久保	H13. 9.11 ~21	近世の遺構確認。
16	県営土地改良総合整備事業(神代南地区)	三原町	神代	社家	本発掘	的崎・山崎	唐京	H13. 9. 3 ~11.20	中・近世の寺院関連遺跡、建物4棟確認。
	町道賀集交差部道路改良事業	南淡町	賀集	八幡東	分布	坂口		H13.10. 2	土師質土器採集。
	町道賀集交差部道路改良事業	南淡町	賀集	八幡東	確認	坂口		H13.10. 9	遺構・遺物未確認。
	基盤整備促進事業(生子地区)	南淡町	賀集	生子	確認	坂口		H13.10.11 ~12	遺構・遺物未確認。
	県営土地改良総合整備事業(神代南地区)	三原町	神代	浦築	確認	坂口		H13.10.15 ~29	遺構・遺物未確認。
	基盤整備促進事業(舞原地区)	三原町	市	徳水	確認	山崎		H13.10.24	遺構・遺物未確認。
	基盤整備促進事業(野原地区)	三原町	八木	新庄	確認	山崎	生ヶ坂	H13.10.25	弥生時代の遺物包含層確認。
	コメリHIG西成店建設事業(民間)	西淡町	津		確認	定松	平石	H13.11. 9 ~7	土坑と土師質土器片出土。
17	町道下川・ゆづるは線道路改良事業	三原町	神代	社家	木発掘	的崎・山崎	店草	H13.11. 6 ~12.5	室町時代の遺跡。寺院関連。
	県営道路開通地造成事業	緑町	広田	広田上	分布	定松		H13.11.29	遺物未採集。
	町道前田川本線道路改良事業	南淡町	山崎	山崎	確認	坂口		H13.11.26	遺物未確認。
18	基盤整備促進事業(舞原地区)	三原町	八木	園分	確認	坂口	園分	H13.12.18 ~26	平安時代~中世の遺構確認。
19	町道入田・おのころ線道路改良事業	三原町	櫻井	下福多	木発掘	山崎	おのころ島	H14. 1. 7 ~3.25	古墳時代の土器だまり、中世の柱穴等。
	県営土地改良総合整備事業(大百川東地区)	南淡町	岡井	分布	坂口・定松			H14. 1.15	全域に土師質土器・須恵器・石鏡・古銭を採集。
	県営土地改良総合整備事業(市西地区)	三原町	市	新	分布	定松	水戸原	H14. 2. 4 ~3.4	土師器・須恵器・石鏡採集。西部多く採集。
	櫻井・徳水地区公民館・櫻井地区防災公園建設事業	三原町	櫻井	下福多	確認	山崎	おのころ島	H14. 2.13	古墳時代の遺物包含層確認。
	町道渡北川西側歩道設置事業	南淡町	野井	分布	坂口			H14. 2.18	土師質土器・須恵器・石鏡採集。
	一般廃棄物処理施設整備(吉野・惣川・新行原)コミュニティプラント建設)事業	南淡町	津	吉野	分布	坂口		H14. 2.18	遺物未採集。
	特定埋戻地保全公共下水道(福原地区)終末処理場建設)事業	南淡町	福原	(向谷)	分布	坂口		H14. 2.18	遺物未採集。
	県営土地改良総合整備事業(神代南地区)	三原町	神代	酒造	分布	的崎	汁谷線跡	H14. 2.18	土師器・須恵器・石鏡採集。汁谷線跡周辺須恵器人骨。
	特定埋戻地保全公共下水道(賀集地区)終末処理場建設)事業	南淡町	賀集	立川浦	分布	坂口		H14. 2.19	土師質土器・須恵器採集。
	県営土地改良総合整備事業(市西地区)	三原町	市	新	分布	定松		H14. 2.22	遺物未採集。
	町道南本線道路改良事業	南淡町	野井	野井	確認	坂口		H14. 2.23	遺物未採集。
	町道6期延伸事業	緑町	広田	広田	分布	的崎		H14. 2.23	遺物未採集。
	特定埋戻地保全公共下水道事業(神代南地区)	三原町	神代	地頭方	分布	的崎	葉ノ上	H14. 2.23	土師器・須恵器・瓦器採集。篠高地上に多い。
	町道前田川本線道路改良事業	南淡町	山崎	山崎	坂口			H14. 2.25	遺物・遺構未確認。

2002(平成14)年度

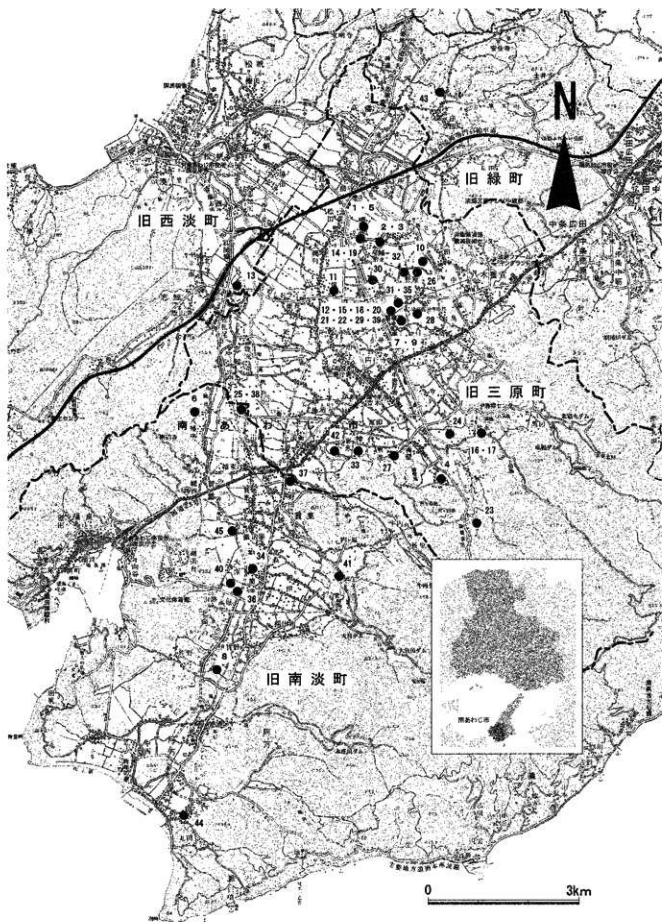
No.	事業名	町名	所在1	所在2	内容	担当者	道跡名	調査期間	成果概要
20	基礎整備促進事業(笑原地区)	三原町 八木	国分	本発掘	坂口	国分	H14. 3.15 ~4.10	平安時代~中世の建物確認。	
	店舗(衣料品物販店)建設事業(民間)	南淡町 賀集	八幡	分布	坂口		H14. 4.19	土師瓦土器・須恵器採集。	
	特定環境保全公共下水道事業(神代処理場建設工事)	三原町 神代	地頭方	確認	的崎		H14. 4.24	遺物わずかに出土したが遺構は未確認。	
	店舗(衣料品物販店)建設事業(民間)	南淡町 賀集	八幡	確認	坂口		H14. 6. 3	遺物わずかに出土したが遺構は未確認。	
	基礎整備促進事業(生子上地区)	南淡町 賀集	生子	確認	的崎		H14. 6.12 ~17	近世の瓦跡が近辺に存在する可能性あり。	
	県営土地改良総合整備事業(神代南地区)	三原町 神代	浦屋・社家	確認	定松	栗原・海菜子	H14. 6.12 ~7.11	浦屋地区は明確な歴史的遺構は検出しなかった。社家地区は中世・弥生の遺構・遺物確認。栗原地区は中世の遺物確認。	
	基礎整備促進事業(野原地区)	三原町 八木	新庄	確認	山崎	生ヶ坂	H14. 6.17 ~7.1	弥生時代後~終末期包合層、中世の遺構面確認。	
21	基礎整備促進事業(笑原地区)	三原町 八木	国分	確認	坂口	国分・波路因分寺	H14. 6.17 ~7.22	弥生・奈良・平安・中世の遺構・遺物確認。	
	特定環境保全公共下水道(賀集処理場終末処理場建設)事業	南淡町 賀集	立川瀬	確認	的崎	越ヶ洞	H14. 6.18 ~26	古代と中世の遺構・遺物確認。表土に器含む。	
	(仮)坂本整形外科病院新築事業(民間)	南淡町 賀集	八幡	立会	坂口	森ノ木	H14. 7.18	平安時代頃の遺物確認。	
	基礎整備促進事業(生子上地区)	南淡町 賀集	生子	確認	坂口		H14. 8. 7	遺構・遺物未確認。	
22	基礎整備促進事業(笑原地区)	三原町 八木	国分	本発掘・確認	坂口	国分	H14.8.9~ H15.1.21	弥生中期~中世の遺構・遺物確認。有様式平瓦検出。	
23	県営土地改良総合整備事業(神代南地区)	三原町 神代	浦屋	本発掘	定松・山崎	栗原	H14. 8.19 ~9.20	初期東京城関連遺跡。	
24	県営土地改良総合整備事業(神代南地区)	三原町 神代	社家	本発掘	定松	海菜子	H14. 9.18 ~H15.2.6	弥生中期末・鎌倉期の遺構・遺物確認。	
25	特定環境保全公共下水道(賀集処理場終末処理場建設)事業	南淡町 賀集	立川瀬	本発掘	的崎・定松・谷口	越ヶ洞	H14. 8.26 H15. 5.29	弥生時代中期前半の集落と奈良時代前半の官倉跡。瓦多数出土。	
26	基礎整備促進事業(野原地区)	三原町 八木	新庄	本発掘・確認	山崎	生ヶ坂	H14. 9.18 ~10.22	弥生時代後~終末期の土器だまり。奈良・京町時代の遺構面確認。	
	県営土地改良総合整備事業(神代南地区)	三原町 神代	風道	確認	山崎	汁谷家跡・喜菜	H14.10.10 ~10.25	灰層部分確認。弥生時代中期の包合層確認。	
	町道塩北北方線歩道改修事業	南淡町	向井	確認	坂口		H14.10.22 ~23	遺構・遺物未確認。	
	基礎整備促進事業(生子上地区)	南淡町 賀集	生子	確認	坂口		H14.10.24 ~25	遺構・遺物未確認。	
	県営土地改良総合整備事業(入川東地区)	南淡町	向井	確認	山崎		H14.10.28 ~30	遺構・遺物未確認。	
	町道野田牛内線道路改良事業	南淡町 賀集	野田	確認	山崎	上久保	H14.10.31 ~11.6	中世後半の遺構面とその下に時代不明の遺構面確認。	
	町道国分第1号寺尾道路改良事業	三原町 市	小井	確認	山崎		H14.11.11	遺構・遺物未確認。	
27	県営土地改良総合整備事業(神代南地区)	三原町 神代	風道	本発掘	山崎	汁谷家跡・喜菜	H14.12.10 ~H15.3.13	灰層厚10cm以上層多数。弥生時代中期~H15.3.13	
	町道国分第2号寺尾道路改良事業	三原町 市	市	確認	谷口・坂口		H15. 2. 4 ~5	遺物わずかに含まれるが遺構は未確認。	
	統合小学校建設事業	西淡町 津井	中央	分布	定松		H15. 2. 7	遺物未採集。	
	特定環境保全公共下水道事業	西淡町 津井	西木村	分布	定松		H15. 2. 7	遺物未採集。	
	県営土地改良総合整備事業(神代南地区)	三原町 神代	地頭方	分布	谷口		H15.3.4~ H15.3.10	土師器・須恵器・サスカイト・瓦採集。	
	(仮)新庄配水池施設事業	緑町 広田	山崎	分布	坂口		H15. 3.17	遺物未採集。	

2003(平成15)年度

No	事業名	町名	所在1	所在2	内容	担当者	遺跡名	調査期間	成果概要
28	久代氏共開住宅新築事業(民間)	三原町	八木	園分	確認・本発掘	坂口・谷口	淡路園分寺	H15. 4. 7 ～15	土坑・溝状遺構確認。
29	園分遺跡(淡路園分寺瓦葺)発掘調査(国庫補助)事業	三原町	八木	園分	確認・本発掘	坂口・山崎・谷口	園分	H15. 4.16 ～9.11	有林平塚を新たに1基確認。周辺に中世の掘立柱建物確認。
30	特定環境保全公共下水道事業	三原町	八木	新庄	本発掘	山崎	淡路園分尼寺	H15. 4.21 ～5.23	寺域西限・東限の調査。
	特定環境保全公共下水道事業(遊水池設置)	南淡町	賀集	立川瀬	確認	的崎	塚ヶ洲	H15. 5.27 ～28	溝状遺構確認。
31	基盤整備促進事業(笑原地区)	三原町	八木	園分・新庄	確認	坂口	淡路園分寺	H15. 6.13 ～30	奈良～中世の遺構、鉄鉢型須恵器や転用瓦出土。
	経営体育成基盤整備促進事業(神代南地区)	三原町	神代	喜来	確認	定松	喜来	H15. 6.16 ～7.9	弥生中期の遺物、中世の遺構・遺物確認。
	基盤整備促進事業(生子上地区)	南淡町	賀集	生子	確認	谷口		H15. 6.19 ～7.21	遺構・遺物未確認。
	県営土地改良総合整備事業(大山川東地区)	南淡町		筒井	確認	谷口・的崎	西ノ開地	H15. 6.28 ～7.25	中世の柱穴など確認。
	基盤整備促進事業(野原地区)	三原町	八木	新庄	確認	山崎	古まどう	H15. 6.30 ～7.28	平安時代・中世の遺構確認。
	海葉掬河川改修事業	三原町	神代	喜来	確認	定松		H15. 7. 7	遺構・遺物未確認。
29	基盤整備促進事業(笑原地区)	三原町	八木	園分	本発掘	坂口	園分	H15. 7. 7 ～9.11	有林平塚に伴う掘立柱建物確認。
32	基盤整備促進事業(野原地区)	三原町	八木	新庄	本発掘	山崎	古まどう	H15. 8.11 ～11.6	平安時代・中世の遺構検出。
33	経営体育成基盤整備促進事業(神代南地区)	三原町	神代	喜来	本発掘	定松	喜来	H15. 8.18 ～12.10	弥生中期の整穴住居2棟・土器、律令期の遺物、中世の遺構・遺物確認。
34	県営土地改良総合整備事業(大山川東地区)	南淡町		筒井	本発掘	谷口	西ノ開地	H15. 8.25 ～10.30	中世の掘立柱建物・遺物など確認。
35	基盤整備促進事業(笑原地区)	三原町	八木	新庄	本発掘	坂口・的崎	園分	H15.9.1 ～11.6.1.20	古代～近世(益)の遺構確認。
	経営体育成基盤整備促進事業(神代南地区)	三原町	神代	地頭方	確認	的崎		H15.10.15 ～20	遺構・遺物未確認。
	町道園分善光寺線道路改良事業	三原町	市	小井	確認	的崎		H15.10.30	遺構・遺物未確認。
	経営体育成基盤整備事業(大山川東地区)	南淡町		筒井	確認	谷口	西ノ開地	H15.11. 4 ～27	弥生時代の土器、古代・中世の遺物・遺構確認。
	優良田圃7地開発事業(民間)	三原町	八木	園分	確認	的崎	園分	H15.11.12 ～14	9世紀頃の遺構・遺物確認。
36	経営体育成基盤整備事業(大山川東地区)	南淡町		筒井	本発掘	谷口	西ノ開地	H16. 1. 6 ～2.9	掘立柱建物・溝状遺構。中世以降の遺構確認。
	コーカン窯展示施設建築工事	南淡町	賀集	八幡中	試掘	山崎		H16. 1.20	遺構・遺物未確認。
37	町道野田牛内線道路改良事業	南淡町	賀集	野田	本発掘	山崎	上久保	H16. 2. 2 ～3.16	中世の掘立柱建物確認。
	基盤整備促進事業(東沖田地区)	南淡町	阿万	東町	分布	定松・的崎	九蔵	H16. 3.11 ～19	土器・須恵器・土師器を多数に採集。平安～中世。
	基盤整備促進事業(久柄地区)	南淡町	阿万	塩屋	分布	谷口		H16. 3.19 ～29	須恵器・土師器・陶磁器を少量採集。
45	経営体育成基盤整備事業(御波地区)	南淡町	賀集	厳治屋	分布	定松	才門	H16. 3.19 ～31	土器・土師器・須恵器・中世遺物を全域で採集。

2004(平成16)年度

No.	事業名	町名	所在1	所在2	内容	担当者	遺跡名	調査期間	成果概要
	園分遺跡(園分寺瓦葺)報告書作成(国庫補助)事業	三原町	八木	園分	報告書作成		坂口・定松・山崎・的崎・谷口	H16. 4.19 ~ H17. 3.31	
	町道阿万111号線道路改良事業	南淡町	阿万	東町	分布	谷口	みのこし	H16. 5.11	土師器・須恵器を採集。
38	特定環境保全公共下水道事業(遊水池設置)	南淡町	賀集	立川瀬	本発掘	定松・谷口・坂口・山崎・的崎	塚ヶ洞	H16. 5.17 ~ 10.3	弥生前期の土器・木製品を含む河川と古代・中世の遺物を含む河川確認。
39	公共下水道事業(園分地区幹線管渠布設工事)	三原町	八木	園分	本発掘	山崎	園分	H16. 5.19 ~ 27	律令期の遺構確認。
40	経営体育成基盤整備事業(大日川東地区)	南淡町		筒井	確認	坂口	流	H16. 6.21 ~ 7.13	中世の遺構・昭和中期のタイル確認。
	基盤整備促進事業(生子上地区)	南淡町	賀集	生子	確認	谷口・山崎	弥つノ木	H16. 6.14 ~ 7.1	土師器・瓦器出土。中世の遺構確認。
	経営体育成基盤整備事業(神代南地区)	三原町	神代	地頭方	確認	山崎	経所	H16. 6.21 ~ 7.13	古代の遺構確認。
	経営体育成基盤整備事業(大日川東地区)	南淡町	賀集	福井	確認	谷口		H16. 7. 2 ~ 10.22	遺構未確認。
41	基盤整備促進事業(生子上地区)	南淡町	賀集	生子	本発掘	谷口・坂口	弥つノ木	H16. 8.12 ~ 12.24	弥生時代終末期の遺物・遺構確認。
42	経営体育成基盤整備事業(神代南地区)	三原町	神代	地頭方	本発掘	山崎	経所	H16. 8.31 ~ 10.18	弥生時代中期の堅穴住居確認。
	町道大戸埴尾線道路改良事業	緑町	中条	中筋	分布	的崎		H16.11. 4	土師質土器・サヌカイトなど遺物わずかに採集。
	町道庄田中道線道路改良事業	緑町	倭文	庄田	分布	的崎	加治館跡	H16.11. 4	石畿・弥生土器・土師質土器・須恵器・サヌカイトなど遺物多量に採集。
43	町道庄田中道線道路改良事業	緑町	倭文	庄田	確認	的崎	加治館跡	H16.11.10	旧河道。弥生後期単純包含層確認。
	阿万111号線道路改良事業	南淡町	阿万	東町	確認	山崎	みのこし	H17. 1.12	土師器・須恵器・製塩土器出土。
44	阿万111号線道路改良事業	南淡町	阿万	東町	本発掘	山崎	みのこし	H17. 1.20 ~ 2.18	古代の遺構確認。
45	経営体育成基盤整備事業(御陵地区)	南淡町	賀集	殿治屋	分布	谷口	神子曾・石田	H17. 1.24 ~ 2.3	石畿・弥生土器・土師器・須恵器・陶磁器など採集。
	基盤整備促進事業(八幡地区)	南淡町	賀集	八幡南	分布	谷口	大野	H17. 2. 4 ~ 14	石畿・須恵器・土師器・製塩土器・輸入白磁・陶磁器など多量に採集。
	基盤整備促進事業(伊賀野地区)	南淡町		伊賀野	分布	谷口	下中原	H17. 2.21 ~ 24	石畿・土師質土器・須恵器・陶磁器など採集。
	経営体育成基盤整備事業(阿万本庄地区)	南淡町	阿万	上町	分布	谷口	井手田	H17. 3.28 ~ 4.1	石畿・須恵器・土師器・製塩土器・陶磁器など採集。



調査位置図

第2節 主な発掘調査の成果

1) 2000 (平成12) 年度

1 おのころ島遺跡 - 1次調査 -

所在地	三原町榎列下幡多字村際外
事業名	県営土地改良総合整備事業
調査主体	三原町教育委員会
担当者	坂口弘宣
種別	確認調査
調査期間	平成12年6月12日～7月27日
調査面積	400㎡ (100ヶ所)



調査の位置

1 調査内容

本調査は、三原平野東部の三原川右岸域に位置する榎列下幡多地区での県営圃場整備事業に伴う調査である。調査は2×2mの調査区を81ヶ所設定し、重機・人力併用で進めていき、その後詳細なデータを把握するため16ヶ所追加し、合計100ヶ所の調査を行った。調査地周辺には出湧と呼ばれる湧水点が分布しており、その湧水点を境に東(扇状地)と西(沖積平野)では土壌が大きく異なり、調査成果と微地形復元から本体内には東から西(三原川)に向かって谷地形が広がることわかった。この谷地形内には周辺から弥生土器(中期)が流れこんだ形で出土する調査区もあった(No.77等)。

調査の結果、大きく4ヶ所において遺構・遺物を確認した(a～d地点)。調査地南東部に位置するa・b地点は南西部の扇状地上の地区で、柱穴や上坑・溝等古代末～中世を中心とする時期の遺構が分布す



調査区設定図

る。調査地中央c地点では弥生時代後期の遺構、おのころ島神社北側のd地点では、縄文土器(中期)や古墳時代の須恵器をそれぞれ確認することができた。

2 まとめ

本調査により、縄文時代～11世の遺構・遺物を確認することができた。遺跡の中

心時期は中世と考えられると同時に、三原平野では数少ない縄文土器が出土したことや遺跡立地の特異性等非常に興味深い遺跡といえる。

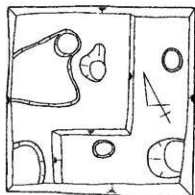
(坂口)



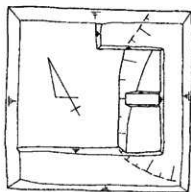
井戸



出満



No.39 調査区



No.86 調査区

調査区平面図



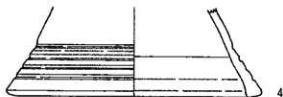
1



2



3

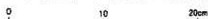


4

出土遺物実測図

1~4 (No.77) 5~7 (No.38)

8 (No.39) 9 (No.85) 10・11 (No.86)



5



6



7



8



9



10



11



12

2 幡多遺跡 野水地区 - 5次調査 -

所在地	三原町榎列下幡多字東裏外
事業名	町道幡多山線道路改良事業
調査主体	三原町教育委員会
担当者	定松佳重・的崎薫
種別	本発掘調査
調査期間	平成12年7月3日～21日
調査面積	286㎡



調査の位置

1 調査内容

上記の事業に伴い平成11年度に道路センターラインより東側を調査した結果、7世紀後半～8世紀初頭の上器を含む土坑に切られた梁行2間・桁行4間以上の大型掘立柱建物を確認した。今回その西側を調査し、建物の西限を確認した。

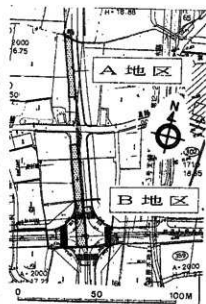
大型掘立柱建物は結果的に梁行2間・桁行4間となる。平成11年度調査では斯ち割り建て替えと思われる痕跡を認めたが本調査では確認できなかったため、建て替えては無く柱抜き取り痕であった可能性が考えられる。遺構10からは古代と思われる唐草文軒丸瓦や馬と思われる陶、棒状鉄製品が出土した。遺構24からは土師器皿（直径13cm・4枚）と小皿（直径7cm・7枚）が集中して出土した。三原郡の場合、このような出土状況では古銭を数枚伴っていることが多く、地鎮行為によるものと考えているが、遺構24からは古銭は出土していない。

2 まとめ

本遺跡の活動時期は

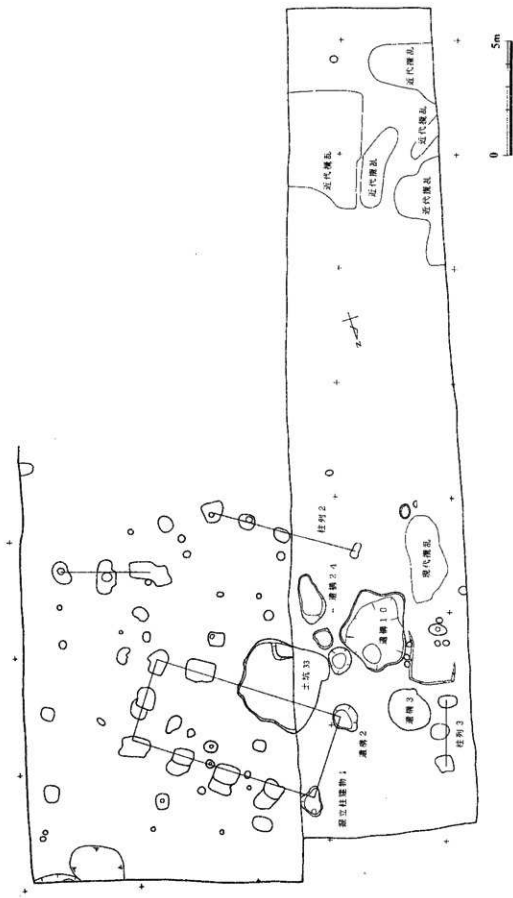
①掘立柱建物1・柱列2 ②土坑33 ③遺構10・24となり、7世紀後半～8世紀初頭の②に切られた①はあまり時間差はなく、③は13世紀初頭と思われる。柱列3は出土遺物が少なく他の遺構との先行関係の判断が困難であるが、13世紀初頭ではないと考える。遺構10出土の軒瓦は唐草文が退化しており、早くとも平安時代後期に位置付けられる。神本駅は神護景雲2（768）年に廃止されることから、この瓦は駅家ではなく約800m南に位置する淡路国分尼寺との関連が考えられる。

駅家は本来築地もしくは幡で囲まれた方形の敷地内に正殿・脇殿が建つが、野水地区ではそれらは確認されておらず神本駅家本体を示唆する遺物も出土しなかったが、政庁区域外にあった駅家関連施設であることは間違いないであろう。



調査区設定図

(定松)



B地区 遗址平面图

3 幡多遺跡 野水地区 - 6次調査 -

所在地	三原町榎列下幡多字野水外
事業名	町道入田おのころ線道路改良事業
調査主体	三原町教育委員会
担当者	山崎裕司
種別	木発掘調査
調査期間	平成12年7月12日～8月25日
調査面積	1,166㎡



調査の位置

1 調査内容

三原平野の北東部、成相川と三原川に挟まれた扇状地末端に位置し、北西方向に緩やかに傾斜する地形である。野水地区ではこれまでに古代の大型掘立柱建物の検出や刻書土器が出土するなど、官衙的な遺跡であることが明らかになっている。また弥生時代の拠点集落の一つで、野水地区では中～終末期の周溝墓群が検出されている。（『三原郡埋蔵文化財発掘調査年報1』三原郡広域事務組合 2001）

A地区では弥生時代後期の円形の竪穴住居を検出した。復元外径約6.5mの住居を約10mの住居に拡張したと推定される。拡張前の柱穴がSP12・16、拡張後がSP13～15と考えられる。中央土坑を備える。

B地区では古代の柱列と土坑を検出した。N7° EとN55° Wの柱列が検出され、前者は東西方向に8間、南北方向は調査区外へ伸びる可能性があるが、東側で3間分を検出している。後者は調査区北東側と南西側でそれぞれ2間分が検出された。北側の土坑もこの方位を意識していると思われる。土坑からは7世紀後半～8世紀初頭の遺物が出土している。

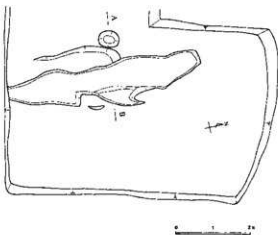
C地区では南北方向に伸びる溝を検出した。幾度か掘り直しが行われているようであるが、最初は箱掘り状で底部の幅約0.4mの溝であったようである。良好な出土遺物が無く、遺構の年代は不明である。

2 まとめ

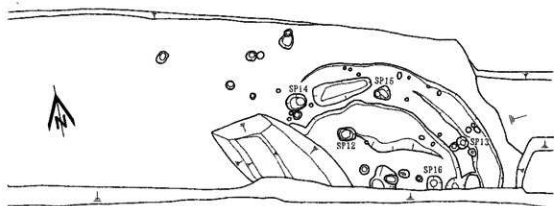
弥生時代中期には三角州上の幡多遺跡行常地・下内田地区で拠点集落が形成されていたが、後期には扇状地上に移動したと推定される。

B地区で検出されたN55° Wの柱列は4・5次調査の大型掘立柱建物とほぼ同方位で、調査区が隣接することから、官衙的な遺構の一部である可能性は高い。8世紀初頭頃までは、これらのN35～40° Eを示す遺構群が展開すると考えられる。N7° Eの柱列は良好な出土遺物は無いが、おそらくN35～40° E遺構群の後に展開した遺構の一つと思われる。

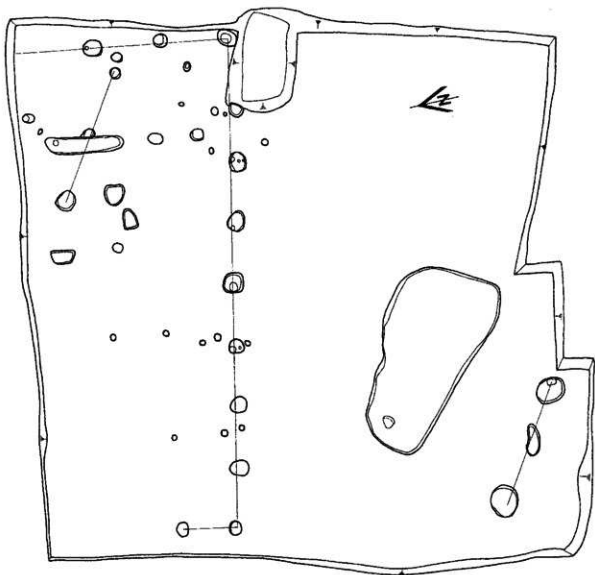
C地区溝の下層は古代埋土と思われ、方位からN7° E柱列と近い時期に掘削された可能性がある。（山崎）



C地区 遺構平面図



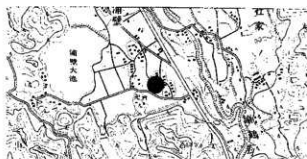
A地区 遺構平面図



B地区 遺構平面図

4 馬場ノ北遺跡 - 2次調査 -

所在地	三原町神代浦壁字馬場ノ北外
事業名	興営土地改良総合整備事業
調査主体	三原町教育委員会
担当者	的崎薫・定松住重
種別	本発掘調査
調査期間	平成12年8月28日～10月6日
調査面積	560㎡



調査の位置

1 調査内容

上記の事業に伴って遺跡範囲確認調査を行った結果、現在の集落を囲むような範囲で中世と考えられる遺構を確認した。遺跡に影響の及ぶ水路と道路部分のみ本発掘調査を行うこととなった。

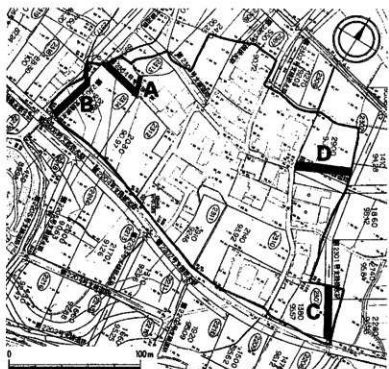
調査区はA～D地区に大別して行い、A地区とC地区で建物跡と思われる柱列を確認した。

【A地区】

水路部分の調査区である。比較的浅い地点で、地山である礫混褐色粘土を遺構面として柱穴や土坑を確認した。調査区の南壁に沿って、直線に並ぶ建物跡と考えられる柱列を検出した。庇が付く梁行2間の建物で、柱間は1.3mである。調査区南側に続くと思われる。遺物は出土していない。

【C地区】

水路部分の調査区で、柱穴・土坑・溝を確認し、南北に平行する2列の柱列を検出した。調査区の幅が狭く、おそらく東西に続くと思われるが、柱間の間隔から2棟の建物と推測する。1間の距離が東西1.3～1.5mで南北3.4mである。柱穴から遺物は出土していない。



調査区設定図

2 まとめ

今回の調査で3棟の建物跡を確認した。本調査では遺構からの出土遺物は少なく、確認調査とあわせて考えると、遺跡の時代は中世の範疇であろう。

(的崎)

5 おのころ島遺跡 — 2次調査 —

所在地	三原町榎列下幡多字丸山外
事業名	県営土地改良総合整備事業
調査主体	三原町教育委員会
担当者	坂口弘貞
種別	木発掘調査
調査期間	平成12年9月4日～11月13日 平成13年1月17日～22日
調査面積	636.6㎡



調査の位置

1 調査内容

本調査は先の確認調査成果を受けて、地下の文化財が破壊される排水路部分を中心とする調査である。調査は作業を進めたる順にA～D地区を設定し重機・人力併用で行った。(P9参考)

以下調査区の概要を述べる。

【A地区】

調査地南東部の逆L字型の調査区である。調査成果としては中世の遺構を中心に弥生時代の遺構を確認した。中世の遺構としては柱穴状の遺構や溝・土坑であるが、調査区幅の関係もあり、建物としては認識できていない。弥生時代の遺構としては、SK1・SD69・171に限られ、中期後半の土器が出土している。また包含層中からではあるが、7世紀末～8世紀前半頃の須恵器・土師器がまとめて出土した。

【B・D地区】

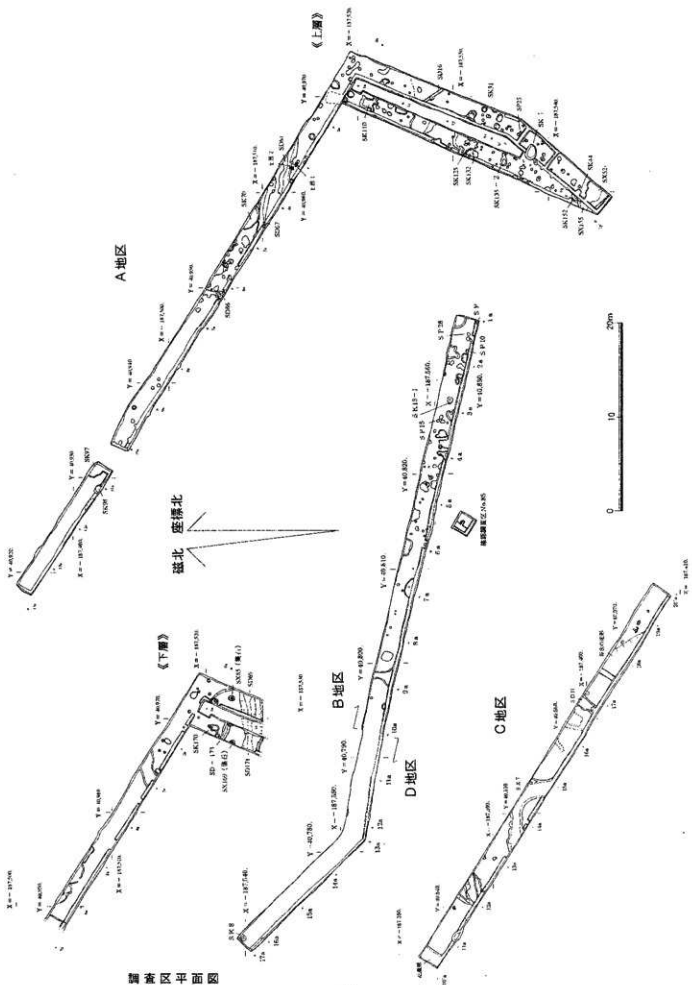
調査地中央南の調査区で、東半部(B地区)を中心に遺構が確認できた。大半が中世の遺構である。

【C地区】

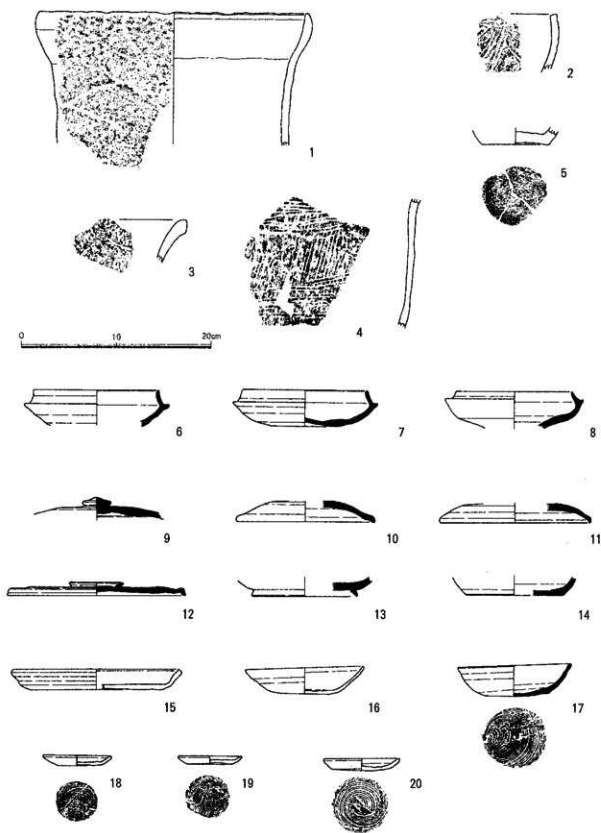
調査地南西部のおのころ島神社北側の調査区である。調査区中央で溝状の遺構(SX7)や南東部でシルト質の土壌が堆積した谷状の地形を確認した。遺物はSX7より5世紀末～6世紀前半の須恵器が、SD11からはほぼ同時期の土師器が、また谷状の地形からは縄文時代中期(船元・里木式)の深鉢などが出土している。

2 まとめ

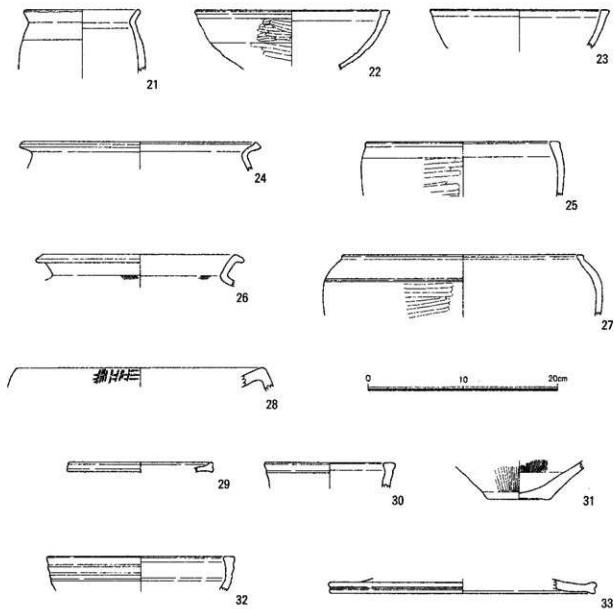
本調査により、縄文時代～中世の遺構・遺物が確認できた。調査面積の関係から、遺跡の詳細は把握しにくい。A地区からB地区にかけては遺構密度が高く、継続的に居住域として利用されたことがわかる。さらにA地区の包含層からではあるが、律令期の須恵器や土師器が出土したことは注目される。出土した須恵器杯B(蓋)にはかえりを伴う奈良時代前半までに位置づけができる資料が認められることから、調査地東に隣接する神護景雲2(768)年に廃された神木駅家推定地である幡多遺跡(野水地区)との関連性が指摘でき、今後調査が進めば神木駅家の具体像も明らかとなろう。(坂口)



圖書風中附圖



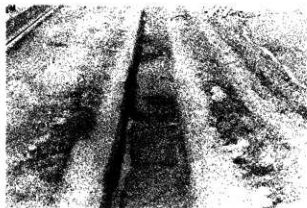
出土遺物実測図 1 1~5 (C地区・谷状の地形) 6~8 (C地区・SX7) 9~15 (A地区・包含層)
 16 (A地区・SK97) 17 (A地区・SK98) 18 (A地区・SP25)
 19 (A地区・SK135-2) 20 (B地区・SK13-1)



出土遺物実測図 2 21~25 (A地区・SK1) 26~31 (A地区・SD69)
32・33 (A地区・SD171)



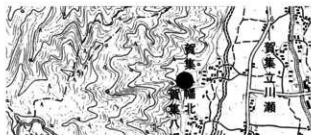
A地区全景 (南東部・南西より)



C地区全景 (南東より)

6 西山北古墳

所在地	南淡町賀集八幡北字森ノ谷
事業名	西山北古墳測量調査事業
調査主体	南淡町教育委員会
担当者	坂口弘貴・富山大学
種別	測量調査
調査期間	平成12年9月15日～26日
調査面積	約1,000㎡



調査の位置

1 調査内容

本調査は、西山北古墳の測量調査である。作業内容としては、墳丘・周辺地形・石室の測量作業と石室の写真撮影を富山大学考古学研究室と共同で行った。

本古墳は、三原平野西部の南辺寺山山裾に位置しており、標高は石室南側の基準3で22.955m、墳丘頂上付近の基準4で27.553mを測り、高低差が4.598mとなる。

調査の結果、等高線は墳形や規模を明確には示さないものの、南から山に続く農道が古墳を避けるように弧状に設置されることから、15m前後の円墳が想定される。

次に石室の測量調査が示す結果は、表の通りで、玄室の平面形が長方形で天井部縦断面が平天井で前

石室全長	8.02 m	玄室比	2.227 (2.065)
玄室長	3.82 m : 東側	玄室面積	7.604 (7.067) ㎡
	4.11 m : 最大	玄室長指数	0.512 (0.476)
玄室幅	1.85 m : 奥壁部分	玄室幅指数	0.827
	1.98 m : 最大	奥壁高指数	1.319
玄門幅	1.53 m	各計測属性については「東山古墳群1」中町教育委員会1999を参考にした。	
玄室高	2.44 m : 奥壁部分		
	2.68 m : 最大		
羨道高	1.52 m		

壁を有する。

石室内部は、玄室側壁が4ないし5段、羨道部が2ないし3段、前壁2段でそれぞれ構成され、玄室・羨道部いずれも一番下は大きめの石を据えている。また奥壁は特徴的で、幅70～80cmの2枚の石を立てて使用している。なお石の表面には加工の痕跡等は認められない。さらに石材と石材の間の目地に粘土が丁寧に詰められている。

西山北古墳石室計測表

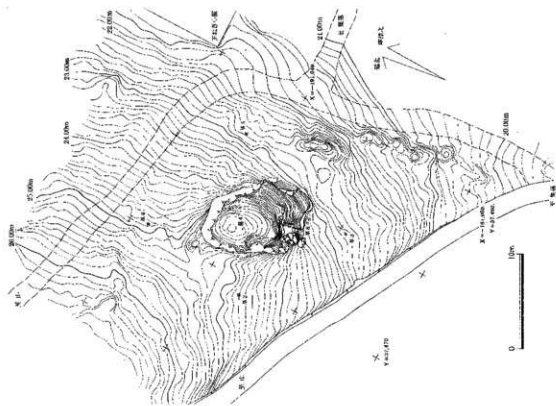


墳丘内出土遺物(1)・石室内採集遺物(2)

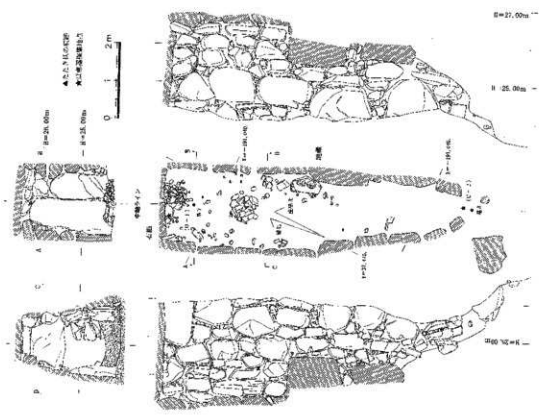
2 まとめ

本調査により、西山北古墳は直径15m前後の円墳が想定される。石室の形態から時代的には6世紀後半頃に築造されたものと考えられる。また墳丘内に弥生時代後期の土器片が含まれることから、周辺に弥生時代後期の遺跡が存在する可能性が高い。

(坂口)



古墳周辺地形測量図



石室測量図

7 桜ヶ地遺跡 - 1次調査 -

所在地	三原町八木四分子桜ヶ地外
事業名	基盤整備促進事業
調査主体	三原町教育委員会
担当者	定松佳重・的崎薫
種別	確認調査
調査期間	平成12年10月10日～16日・27日～31日
調査面積	154㎡ (32ヶ所)



調査の位置

1 調査内容

淡路国分寺はこれまでの調査によって東西171m、南北218m (1.5×2町) の寺域と、旧本堂は金堂を踏襲していることが判明している。本事業対象地には南門推定地も含まれており、それらを含めた遺跡範囲確認調査を実施した。

事業対象地全域で遺構・遺物を確認した。ほとんどが柱穴状の小土坑や土坑であるが、No.19では幅84cm・長さ1.7m以上・深さ24cmの長方形土坑を検出した。出土遺物はなく、壁面観察では不明であるが木棺墓の可能性がある。

最も多く遺構を検出したのはNo.10である。遺構4からは12世紀後半の瓦器片が出土している。遺構6は約1.7m四方・深さ60cmの隅丸方形土坑である。掘り形の中から柱痕と思われる土坑が3穴確認されている。ひとつの掘方から複数の柱が建つのは官衙などに見られるが、出土遺物から時代がそれらとは異なり性格不明である。次いでNo.17で柱穴状土坑を含む遺構を多く確認した。

No.27は淡路国分寺南門推定地にあたり、今までの南門周辺の調査でも明確な遺構は確認されていない。農作業小屋が建っているが、その前のわずかな空間にトレンチを設定した。黄色粘質土をベースに規模の大きい溝1を壁面で確認した。埋土からはこれまでの調査では確認されていない単弁蓮華文軒丸瓦(淡路国分寺軒丸瓦31型式)が出土した。この溝が国分寺関連かどうか確認するため、逆し字形に南北方向にトレンチを追加した。溝1はすべて検出できておらず、幅4m以上・最深0.8m、東南から北西に流れる。最下層から江戸期と思われる陶器やかんざしが出土し、国分寺関連ではないことがわかった。しかし、追加トレンチ



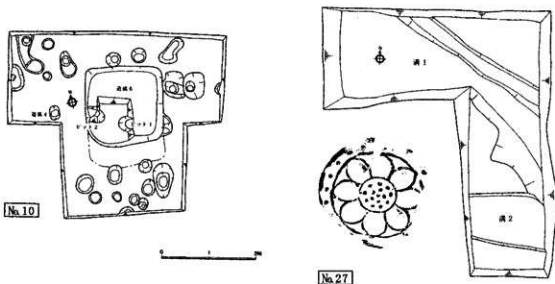
調査区設定図

の南端部で平安期の遺物を含む溝2を確認した。この溝は南門推定地であること、昭和62年度調査（IV T-7-S）で確認されている溝より約5m南にずれているが南限築地推定ラインと平行すること、溝1より多くの古代瓦や埴が出土していることから、南門に付随する溝の可能性が高い。

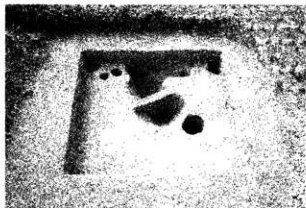
2 まとめ

本遺跡は平安・鎌倉時代初期の遺跡であることがわかった。淡路園分寺と関連のある遺構はNo.27の溝のみである。これまでの調査で築地に伴う溝からの瓦の出土は少なく、板敷だったと推定されている。しかし、本調査では瓦が多く出出し、No.27溝2と周辺で確認されている築地敷に伴う溝は方向が一致することから、今回検出した溝2は南門に付随する溝の可能性が高い。

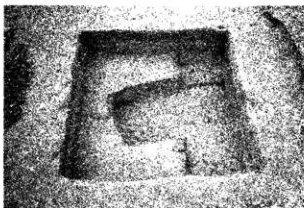
淡路園分寺は現在も法灯を守っているが、『護国寺文書』（南淡町賀集護国寺蔵）のうち室町期に書かれた文書には淡路園分寺の存在は記載されておらず、淡路園分寺は荒廃していたものと考えられる。今回確認した遺構は淡路園分寺衰退期の周辺集落と考えられるが、No.10遺構6などは一般集落の遺構とは考えにくく、沿革に不明な部分の多い淡路園分寺の空白部分を埋める遺跡である。（定松）



No.10・No.27 遺構平面図・出土瓦（瓦S=1/4）



No.17（東より）



No.19（東より）

8 ^{しもなかから} 下中原遺跡 - 4次調査 -

所在地 南淡町阿万上町字下中原外
 事業名 基盤整備促進事業
 調査主体 南淡町教育委員会
 担当者 山崎裕司
 種別 本発掘調査
 調査期間 平成12年11月13～30日
 調査面積 550㎡



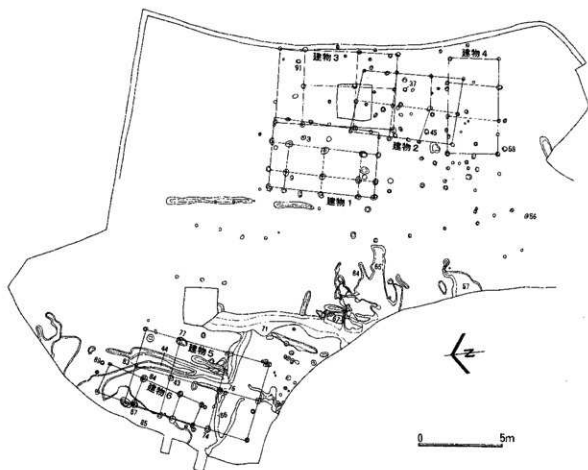
調査の位置

1 調査内容

三原平野の南端部に位置し、南西に向かって緩やかに傾斜する地形である。西約500mには中世集落跡の北佐野遺跡、南約800mには中世山城跡の郷殿城跡がある。

これまでの調査により調査区西側には谷状地形が南北に走ることがわかっており、さらにその西側にも柱穴状の遺構が確認されている。(『三原群埋蔵文化財調査年報1』2001)。

6棟以上の掘立柱建物が復元でき、東群と西群に分けられる。東群建物1～3は前後して建てられた



遺構平面図

主屋と思われる。規模の小さい建物4は、ほぼ同じ方位を示す建物3の副屋と考えられる。建物1の東側は柱穴が小さく、西側の柱穴と対応していないため、2×4間の東側に1間分の庇が付く構造と考えられる。建物3も同じ理由で2×2間の北側に庇が付く構造と考えられる。西群建物5は2×3間で、最も母屋部分の規模が大きい。桁行南側2間分および梁行の柱間寸法が、建物3の2×2間部分とほぼ一致する。また西群建物6の梁行および桁行北側2間分と、建物1の2×4間部分の東側梁行および桁行中央2間分の柱間寸法はほぼ一致する。

出土遺物は東播系須恵器鉢、土師器皿・煮沸具等、一般集落的な内容である。建物1・5・6柱穴出土遺物はおおよそ14世紀後半～15世紀前半頃と思われる。溝41出土土師器皿は、伏せた状態で2枚が重なって出土した。

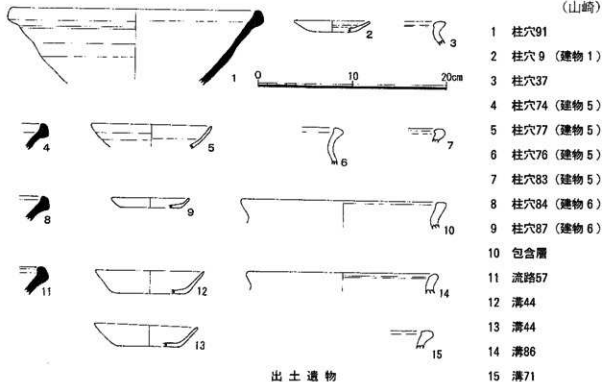
2 まとめ

出土遺物から建物群の前後関係を明らかにするのは難しいが、建物3・5、建物1・6は上述のように母屋部分に柱間寸法が等しい部分が見られ、同一規格で造られているのではないかとと思われる。したがって東群と西群で建物3・4と5、建物1と6が同時期に建っていた可能性は高いと判断している。また西群と東群は階層の差を考える程、建物規模に差は無いと思われる。

『淡路国大田文』(1223年)には、「阿万庄」の田地として「本庄」百町と「沼嶋」三町が記されている。現存する「本庄」は荘園中心部付近に「本庄」地名が残っていったものと考えられている。(『淡路島の地名研究』武田信一1996)一方、条里型地割は現在の「本庄」より南の沖積平野に分布することから、古代阿万郷の中心部は沖積平野にあり、中世あるいは古代末に中心部が内陸部へ移動したと考えられる。北佐野遺跡や下中原遺跡のように内陸部で条里型地割を伴わない耕地の開発は、沖積平野の開発より遅れると考えられ、耕地の拡大が中心部移動の原因の一つと考えられる。

建物群は新たな耕地開発に成功し、数代に渡って安定的に経営を行った農民層の住居と推定される。

(山崎)



9 さくらがら 桜ヶ地遺跡 - 2次調査 -

所在地	三原町八木国分字桜ヶ地外
事業名	基盤整備促進事業
調査主体	三原町教育委員会
担当者	定松佳重・的崎薫
種別	本発掘調査
調査期間	平成12年12月11日～ 平成13年2月15日
調査面積	837.1㎡



調査の位置

1 調査内容

上記の事業に伴い遺跡範囲確認調査を実施した結果、平安・中世初頭の遺跡が埋蔵されていることがわかった。事業実施によって遺構に掘削が及ぶ排水路部分について記録保存を行った。以下地区ごとに述べる。

【A地区】

延長115m、幅0.9～1.7mを測る。小土坑と溝状遺構を確認した。小土坑は柱穴の可能性もあるが、調査幅が狭いため建物を構成するかは不明である。溝1は細砂が堆積し、遺物は出土しなかった。堅穴住居状の遺構35は埋土に炭化物や焼上が多く、何らかの火を受けている。

【B・C地区】

延長42.5m、幅1.1～2.2mを測る。南部で近世溝を確認した。流水はわずかで人為的に埋められている。この調査区では炭化物や焼上を多く確認している。また、堅穴住居状遺構（土坑6）や柱穴状土坑も確認したが、調査範囲の制限のため詳細は不明である。

C地区はB地区に隣接する道路に埋設するパイプラインのための調査区で、延長55m、幅1mを測る。ここでもB地区と同様に南部で近世溝を確認している。

【D地区】

延長47m、幅1mを測る。北端部で幅1mの溝1や12世紀初頭の瓦器碗を含む落ち状遺構を確認した。

【F地区】

延長81m、幅0.9～2.3mを測る。調査区の北側で浅い溝状遺構を断続的に検出した。この調査区は淡路国分寺の寺域南限に沿って設定されているため、検出当初は南限築地塀に付随する溝と考えていたが、15世紀



調査区設定図

代の羽釜が出土したことからE地区検出溝の底付近を検出したと思われる。この遺構内からは単弁十二弁蓮華文軒丸瓦（淡路国分寺軒丸瓦06型式）が出土した。この軒丸瓦は寺域内調査で塔跡所用の瓦とされており、これまでの調査でも寺城南限付近から出土している。

【G地区】

延長60.5m、幅5.5mを測る。L字に屈曲した調査区の東西トレンチでは近代の掘乱坑が多く、地山が良質の粘質土であるため、粘土採掘を行ったのであろう。

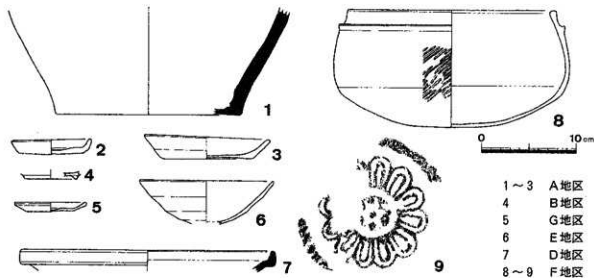
南北トレンチでは小規模の谷状落ちと溝・土坑を確認した。溝は流水が認められず、この溝の北は谷に落ちる急斜面となり、なんらかの区画を意図していると思われる。遺物は中世の範疇に入ると思われる土師質土器片が出土したのみである。

2 まとめ

本調査では平安時代末と室町時代後半の遺構・遺物を確認した。遺構は調査面積の関係から明確な掘立柱建物は復元できていないが、建物を構成するであろう柱穴や土坑を検出した。室町時代の遺構はE・F地区で確認した溝遺構のみで、本遺跡の主な活動時期は平安時代である。遺物は須恵器・土師器・瓦器（和泉型）・陶磁器、寺域に近いF地区からは瓦が多く出土した。ただし、創建瓦は確認しておらず、瓦当のわかるものもF地区出土の単弁十二弁蓮華文軒丸瓦のみである。

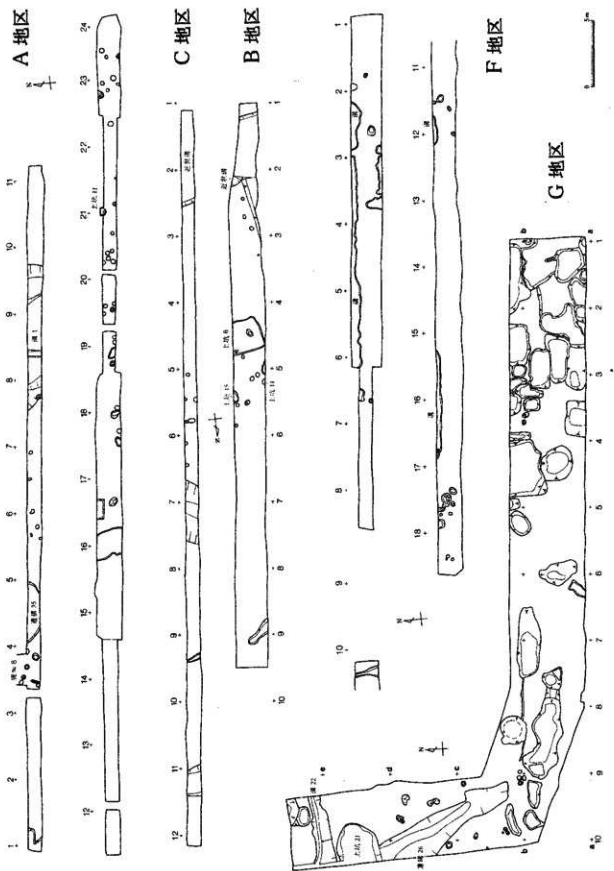
遺物包含層上面では多数の炭化物・焼土を確認した。また遺構からも確認している。南淡町護国寺所蔵の『護国寺文書』のうち室町期に書かれた文書には淡路国分寺の名はなく、国分寺所蔵木造飛天坐像（平安後期作）の背部には焼損痕があることから、平安時代後期以降の火災により本尊を焼失し、現在の本尊である釈迦如来坐像（1340年銘を有する）はそれを再興したものと考えられている。調査で確認した炭化物・焼土はそのときの火災によるものではないかと思われるが、2次焼成を受けた瓦を未確認であるため、再考する余地はある。

室町時代以前の国分寺最盛期には周辺に49の寺院があったといわれ（『味地草』）、確認調査によって淡路国分寺衰退期の周辺集落と考えられた本遺跡が周辺寺院の可能性があることがわかった。（定松）



- 1～3 A地区
- 4 B地区
- 5 G地区
- 6 E地区
- 7 D地区
- 8～9 F地区

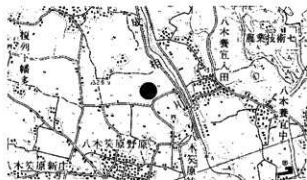
出土遺物



遺構平面図

10 生ヶ板遺跡 - 2・4次調査 -

所在地	三原町八木新庄字森外
事業名	基盤整備促進事業
調査主体	三原町教育委員会
担当者	山崎裕司
種別	本発掘調査
調査期間	平成12年12月18日～ 平成13年2月9日・7月16～31日
調査面積	495㎡（2次）・91㎡（4次）



調査の位置

1 調査内容

三原平野の北東部、成川中流左岸に位置し、北方向に舌状に張り出した微高地（段丘）上に立地する。遺跡南方500m内に『和名抄』に記される英原神社の東宮・西宮が鎮座する。遺跡北西方向には弥生時代の拠点集落である幡多遺跡が広がる。

本事業に伴い平成12年度に行われた確認調査では、土坑から瀬戸系の天目碗や瓦質羽釜等、15～16世紀頃の遺物が出土している。

2次調査では中世と弥生時代後期～終末期の遺構を検出した。中世の土坑1は、平面楕円形で、埋土層を中心に18点以上のほぼ同法量の土師器皿が出土した。完形に近いものが多いが、土坑埋納当初から割れていたと思われるものもある。正置したもの9点、倒置したもの7点を確認している。また底体部境辺に焼成前穿孔されているものが1点含まれていた。

南東から北西方向へ向かう浅い流路状の窪地に、弥生時代後～終末期の土器だまりが形成されていた。4次調査区は2次調査区の北西側の続きで、より良好な状態で遺物が出土している。南東側の土器だまりからは刀子状の鉄製品が出土している。



土器だまり出土状況（南から）

2 まとめ

上記確認調査区は土坑1の南100mに位置し、本発掘調査区の南側に古代～中世の集落遺跡が広がることが予想される。

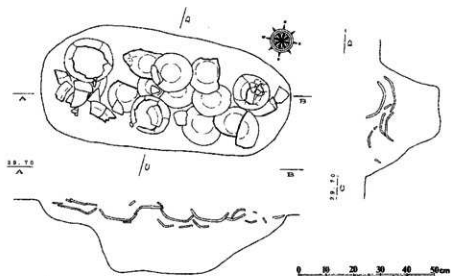


鉄製品出土状況（南から）

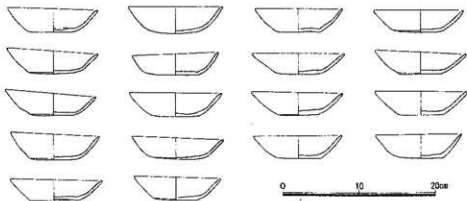
上坑1が祭祀的な性格の遺構であることは間違いない。地鎮に関係するようにも思えるが、この周囲に同時期の建物や他の遺構が見られないことから、必ずしも地鎮とは言い切れない。あるいは集落の境界付近に位置することが、遺構の性格と何らかの関わりをもつのかもしれない。出土土器器皿の法量の個体差は比較的少なく、平均は口径11.9cm・高さ3.0cm・底径6.0cmとなり、およそ14世紀頃のものと思われる。

生々坂遺跡は現在判明している成相川流域の弥生遺跡の中では最も高所に位置し、特に当調査区周辺は河川下流域に向けて舌状に張り出す微高地上に位置するため、幡多遺跡および河川下流域を俯瞰するには絶好の場所と言えるであろう。当遺跡が弥生時代の拠点集落である幡多遺跡と密接に関係することは間違いない。

(山崎)



土坑1 出土状況 平・断面図



土坑1 出土遺物

11 山口遺跡 - 2次調査 -

所在地 三原町榎列小榎列字山口
事業名 町道榎列111号線道路改良事業
調査主体 三原町教育委員会
担当者 的崎薫
種別 本発掘調査
調査期間 平成13年2月13日～3月5日
調査面積 235㎡



調査の位置

1 調査内容

調査地は三原平野中央に位置し、三原川中流域左岸に広がる田園地帯である。上記の事業に伴って遺跡範囲確認調査を行った結果、古代もしくは中世の遺構を確認したため、既存道路拡張部分について本発掘調査を実施した。

調査の結果、柱穴や土坑を確認したが、建物跡の復元には至らなかった。全体的に遺物は少なく、遺構からは上師質土器と須恵器の小片がわずかに見られるだけであるため、時代は明確ではないが平安～鎌倉時代頃の遺跡である可能性が高い。

また、今回の調査区北東部の土層からは一石五輪塔が出上している。調査地は榎列小榎列に位置するが、これより東側は榎列西川にあたり、境界石として使用されていたものと考えられる。

2 まとめ

本遺跡は平安～鎌倉時代の範疇にある遺跡であることがわかった。今回の調査は上記事業の最南部にあたり、これより北側で行われた調査では遺構を確認していないことから、遺跡は東西に広がっているものと推測される。

(的崎)



調査区全景(北より)

2) 2001 (平成13) 年度

12 国分遺跡 - 1次調査 -

所在地	三原町八木国分字平河内外
事業名	基盤整備促進事業
調査主体	三原町教育委員会
担当者	坂口弘貞
種別	確認調査
調査期間	平成13年6月18日～26日
調査面積	72㎡ (18ヶ所)



調査の位置

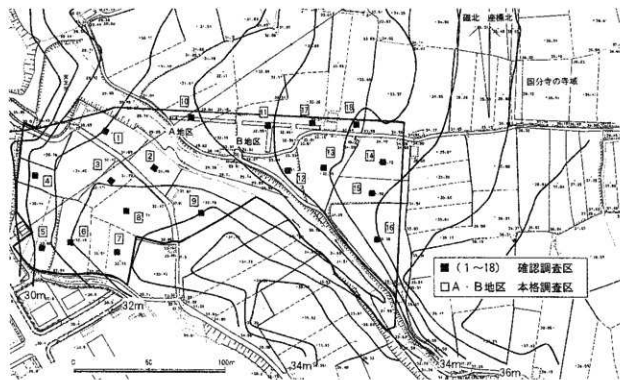
1 調査内容

本調査は、三原町八木国分地区で計画されている団体営圃場整備事業に伴う調査である。調査は事業計画予定地に2×2mの調査区を18ヶ所設定し、重機・人力併用で進めていった。

調査の結果、No.10調査区において、柱穴状の遺構を確認した。遺構からは11世紀後半～12世紀初頭と思われる黒色土器(甕)や土師器片が出土している。

2 まとめ

本調査により、調査地北半の一部において平安時代後半頃の集落跡が想定される。(坂口)



調査区設定図

13 辻ノ内遺跡 - 2次調査 -

所在地	西淡町志知字辻ノ内
事業名	ショッピングセンター建設事業
調査主体	西淡町教育委員会
担当者	定松佳重
種別	確認調査
調査期間	平成13年7月2日～4日
調査面積	68㎡ (8ヶ所)



調査の位置

1 調査内容

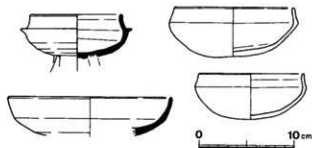
本調査地南には中世城跡である志知城が立地する。志知城は南北朝期には南朝に味方した武士の拠点となり、周辺を流れる河川は堀と水運の両役割を果たし、近世には水城的要素を持つ平城に改築された。16世紀代には淡路水軍の重要拠点として活躍したが、17世紀初頭に西淡町松帆古津路の三原川河口に叶堂城が築かれ志知城は廃された。現在外堀はほとんど埋められたり用水路に改修され旧態は見られない。

作付け中の農作物の関係から平成13年3月に1回目の確認調査を行い、須恵器・土師器・弥生土器・白磁瓦が出土している。遺構はNo.1・2で検出した。遺構面は2面確認し、第1遺構面は中世、第2遺構面は弥生時代中期～後期と考えられる。No.6の表土下85cmでは浅いくぼ地に堆積した遺物包含層である黒色系シルトより5世紀後半の須恵器(高坏)や土師器(碗)がほぼ完形で出土した。

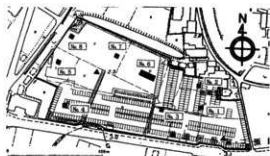
2 まとめ

本遺跡は弥生時代・古墳時代・中世の遺跡であることがわかった。調査対象地での遺構立地状況は東部(No.1～3)は馬乗捨川の微高地となり遺構が立地する。中央部(No.6)は馬乗捨川の後背湿地となり、西部(No.4・5・7・8)は西を流れる新川の影響を受け砂質土が堆積する。

遺構は字「辻ノ内」地内で確認しており、「辻」ということ、第1遺構面の時期が中世であることから、第1遺構面は志知城との関連が十分に考えられる。また、No.6出土の土師器碗は約1.4km北に位置する雨流遺跡から出土しているものと同形態であり、「須恵器模倣土師器」と言われているものである。近隣地域ではこの須恵器を模倣した土師器の出土はかなり限定され、北九州地方や関東・東北地方に多く見られる技法であることから、雨流遺跡ではそれら地域との密接な関連が考えられている。そして本遺跡から出土したことで、雨流遺跡と時期・交流関係などが同様の遺跡であることがわかった。(定松)



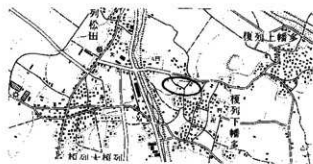
No.6 出土遺物



調査区設定図

14 おのころ島遺跡 - 4次調査 -

所在地	三原町榎列下幡多字北ノかち外
事業名	県営土地改良総合整備事業
調査主体	三原町教育委員会
担当者	定松佳重
種別	本発掘調査
調査期間	平成13年8月22日～10月12日
調査面積	447.6㎡



調査の位置

1 調査内容

本遺跡は三原川中流右岸に位置し、「幡多」という地名は古代朝鮮からの渡来系氏族・秦氏の居住地に由来するといわれている。北には国生み神話で有名なおのころ島神社が鎮座し、おのころ島神社の北側では縄文時代中期の土器が出土している。

事業実施に先立ち、遺跡範囲確認調査を行った結果、一部に遺跡が埋藏されていることがわかり、遺構に損壊を与える部分の記録保存をすることとなった。

【B地区】

延長44.6m、幅3mを測る。東部では遺構はなく、大規模な落ちを検出した。黒色シルトが堆積しており、遺構掘削時から常に湧水していた。遺跡周辺は三原平野の沖積地と扇状地の境にあたり、湧水地点（淡路では出湧と呼ぶ）が数多く存在し現在でも田畑を潤している。おそらくこの落ち状遺構も出湧と思われる。この落ち状遺構より西に遺構は展開し、地形的には現集落から続く張り出し状の高まり上に立地する。掘立柱建物を2棟検出した。調査幅が狭いため全体の規模は不明である。柱穴には径約15cmの石が入っており、1棟は庇を持つ。16世紀代の備前焼大甕片を多く含む土坑も確認した。

【C地区】

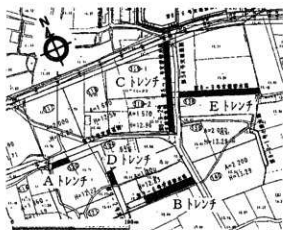
延長75m、幅2mを測る。調査区北部は礎ベースで浅い溝遺構を検出した。明確な遺構は南半分で見出した。遺構面は2面あり、第1遺構面の遺構より瓦器腐がまとまって出土した。高台が退化傾向にあり、13世紀代と思われる。

【D地区】

延長8.7m、幅2mを測る。自然流路を検出し、その左肩から弥生時代後期のほぼ完形に復元できる二重口縁甕が出土した。南から押されて倒れたように底部が南、口縁部が北にあり、その場所での廃棄もしくは破損であることがわかる。

【E地区】

延長56.8m、幅2mを測る。遺構面は2面確認し、第1遺構面東端部で土器器録に皿・甕が3枚重なって入った状態で出土した。古銭はなく、中世のものと思われる。



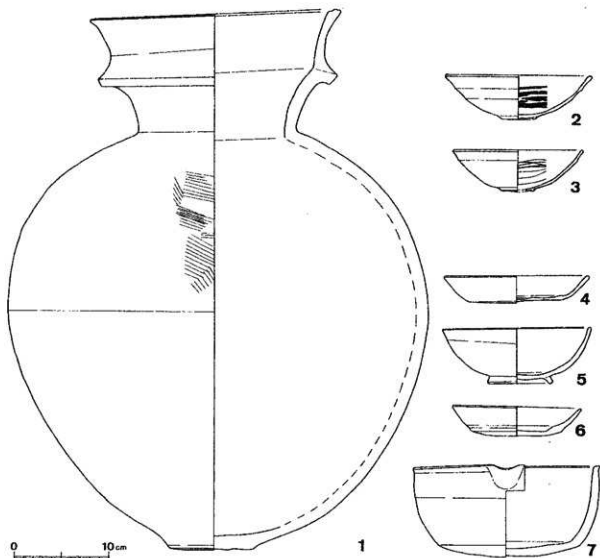
調査区設定図

2 まとめ

本遺跡は弥生時代・鎌倉時代・室町時代の遺跡であることがわかった。弥生時代は三重口縁壺の出上のみであるが、確認調査時にも弥生時代中期の土器を確認していることから、東に位置する幡多遺跡との関連が考えられる。B地区では出湧遺構を確認した。今まで出湧が農作業には利用されていたとしても生活水として利用されていたかは不明であったが、出湧のすぐそばで掘立柱建物を検出したことでかなり密接な関係にあったと推測できる。掘立柱建物からは瓦器が出土しておらず、15～16世紀と思われる。

本調査では13世紀の遺構はC地区でしか確認されていない。三原郡内の中世遺跡からは瓦器碗が量的には出土していなかったが、C地区からはまとめて出土しており、三原郡における瓦器碗を考える上で重要な遺跡となった。

(定松)



出土遺物

1 D地区 2・3 C地区 4～7 E地区（上から1枚目・2枚目・3枚目）

15 園分遺跡 - 2次調査 -

所在地 三原町八木園分字平河内外
 事業名 基盤整備促進事業
 調査主体 三原町教育委員会
 担当者 坂口弘賢
 種別 本発掘調査
 調査期間 平成13年8月2日～9月10日
 調査面積 250㎡



調査の位置

1 調査内容

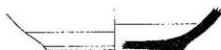
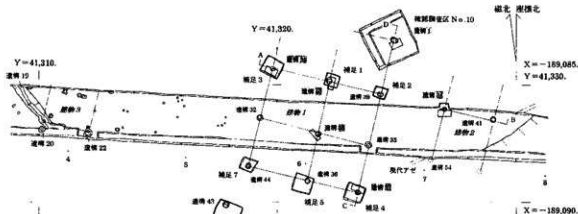
本調査は、先の確認調査成果を受けて実施した排水路部分の調査である。調査はT字型にA・Bの調査区を設定し、重機・人力併用で進めていった。(P32参考)

調査の結果、A地区西部において掘立柱建物を3棟確認(建物1～3)した。建物はいずれも座標北に対し13～14°東に傾きを持つことから、ほぼ同時期のものと考えられる。その内建物1は補足調査により、南北3間×東西2間以上の規模が想定され、根石を持つ柱穴が多い。出土遺物が非常に少なく年代決定の判断は難しいが、建物2の54(柱穴)より須恵器埴鉢(底部)の破片が出土しており、11世紀後半～12世紀初頭頃に位置付けできる。

2 まとめ

本調査により、平安時代後期の集落を確認した。

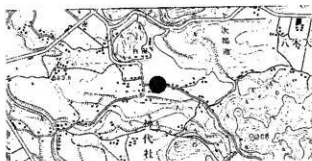
(坂口)



A地区平面図・54出土遺物実測図

16 唐草遺跡 - 3次調査 -

所在地 三原町神代社家字唐草外
 事業名 県営土地改良総合整備事業
 調査主体 三原町教育委員会
 担当者 的崎薫・山崎裕司・定松佳重
 種別 木発掘調査
 調査期間 平成13年9月3日～11月20日
 調査面積 820㎡



調査の位置

1 調査内容

調査地に隣接する覚住寺には「昔は周辺に大小の寺院が点在していた」とあり、本調査地には「南地(寺?)」や「西地(寺?)」「古門」「門口」といった寺院を示すような小字名が多く残っている。確認調査では広範囲にわたって中世の遺構を確認した。また江戸時代の郷土誌『味地草』の絵図に寺跡として描かれている場所では18世紀頃の陶磁器が多く出



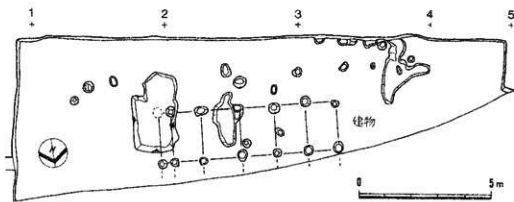
調査区設定図

土したことから、調査地には中世～近世の寺院関連遺跡が包蔵されている可能性があるものと考え、遺跡に影響が及ぶ水路や圃場部分のみ本発掘調査を行った。

A～K地区に大別して調査を行い、主な調査区のみ述べる。

【B地区】

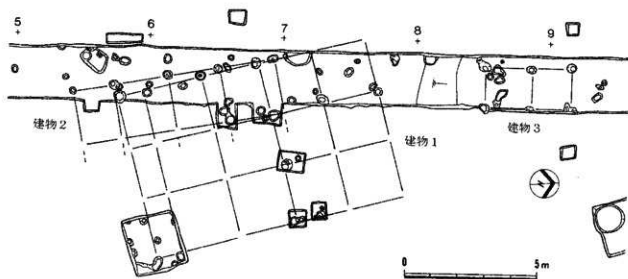
梁行1間以上×桁行5間の庇付き掘立柱建物を確認した。梁行の1間の柱間は1.8mで、桁行の柱間は1.1～1.4mである。出土遺物は少ないが、室町時代と考える。



B地区 遺構配置図

【F地区】

掘立柱建物を3棟確認した。建物1は梁行3間以上×桁行4間の庇付き総柱建物で、建物2は梁行1間以上×桁行4間で、建物3は梁行1間×桁行2間である。建物1と2は1間が2.0mと同じことから、建替えを行ったものと考えられるが、遺構の切り合いが見られないことと、遺物が少ないことから前後関係は不明である。建物2の柱穴からは16世紀末の輸入陶磁器である青花碗が出土している。また、建物3は遺構埋土や方角などから建物1・2に伴うものではなく、やや時代が古いと考える。



F地区 遺構配置図

【G地区】

寺跡として『味地草』に描かれている調査区である。1～5m程の不定形な土坑が5基と柱穴が数穴みられ、土坑からは陶磁器類・瓦・土師質土器・地烙などが出土し、18世紀頃と考えられる。瓦が多数出土していることから、寺院関連遺構と思われる。

【I地区】

遺構面が2面あり、両面とも中世の遺構を確認したが、調査区が狭いため建物跡の復元にまでは至っていない。包含層からは菱形の中心飾りをもつ唐草文軒平瓦が出土している。

【J地区】

遺構面が2面あり、下層の遺構からは漆片が出土している。両面とも室町時代頃と考えられ、下層の遺構面は15世紀代と考える。

【K地区】

遺跡の西限である。調査区は南側2mが排水路部分で、現町道に沿った残りの北側が町道拡幅部分であるため、麻草遺跡4次調査のC地区で詳しく述べる。

2 まとめ

麻草遺跡は東西約330m、南北約80mの微高地上に立地している遺跡である。室町時代以後の遺物しか出土していないことから、その頃からこの周辺で生活が営まれるようになり、瓦や輸入陶磁器などが出土していることから、中世以降の寺院関連遺跡として考えられる。

(的確)

17 唐草遺跡 - 4次調査 -

所在地 三原町神代社家字唐草外
 事業名 町道上田・ゆづるは線道路改良事業
 調査主体 三原町教育委員会
 担当者 的崎薫・山崎裕司
 種別 木発掘調査
 調査期間 平成13年11月6日～12月5日
 調査面積 146㎡



調査の位置

1 調査内容

調査地は県営土地改良総合整備事業に伴う確認・木発掘調査によって遺跡の範囲内であることが明白であったため、上記事業の実施に伴い木発掘調査を行った。

調査区をA～Cの3地区に分けて調査を行った。

【A地区】

遺構面を2面確認した。上層の遺構面では土坑を確認し、土師質土器皿や土鍋・備前焼・瓦質の火鉢・瓦・銅製品（碗か鉢の口縁部?）・草宋通寶（初铸1038年・北宋）などが出土している。15世紀代と思われる。下層の地山である硬凝黄褐色粘質土をベースとした遺構面では柱穴や土坑を確認したが、遺物がほとんど出土していないため時代は明確ではないが中世の範疇と考えられる。

【B地区】

後世の水田化による削平を遺構面まで受け、A地区に隣接する調査区でありながら1mも段差がある。遺構の密度は高いが調査範囲に限りがあるため、建物を構成していたと思われる柱列を1列だけ復元できた。この建物跡は1間が約1.8mで4間確認したが、北側の調査区外へ続く可能性が考えられる。遺構からは土師質土器皿や土鍋・瓦・輸入陶磁器などが出土しているが、全て小片であり年代を明確にするのは難しい。包含層からは菱形の中心飾りをもつ中世の唐草文軒平瓦が出土している。この瓦と同文の軒平瓦は以前にこの周辺で採集された瓦と圍場整備に伴う発掘調査（2次調査）で出土した瓦だけで、三原郡内ではおそらく同文の軒平瓦の報告はされていないであろう。



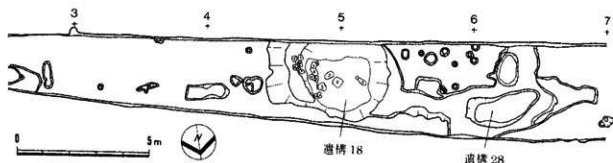
調査区設定図



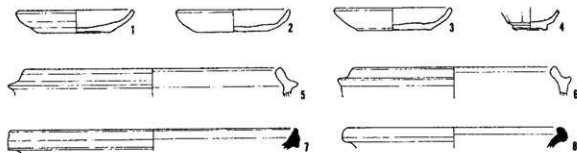
唐草文軒平瓦 (S=1/2)

【C地区】

調査区は南側2mが排水路部分で、現町道に沿った残りの北側が町道拡幅部分である。当初は田圃3筆分が調査予定であったが、一番西側の田圃ではベース面が不安定になり遺構も確認できなかったため、遺跡範囲外とした。このあたりが唐草遺跡の西限と思われる。遺構面は2面あるが、上層の遺構として確認したのは遺構28のみである。遺構28は長さ2.8m、幅1.2m程の細長い遺構であるが、遺構の側・底面に厚さ10cm以上の粘土を張り付けていた。埋土の状態から池とは考えにくく、一度に埋め戻したような感じに礫や土師質土器・輸入陶磁器・須恵器・瓦などが放り込まれていた。遺構18は東西に5mほどの幅を持ち、深さは0.6mを測る土坑である。上層ほど遺物が多く、完形の土師質土器皿や巴文軒丸瓦・束播系埴鉢・瓦質土器・輸入陶磁器・熙寧元寶（初鑄1068年・北宋）などが出土した。白磁碗などから15世紀代と考えられるが、上層遺構の遺構28もあまり時期差のないものと思われる。



C地区 遺構配置図



C地区 遺構 18 出土遺物 (S=1/2)

1～3・5・6 土師質土器 4 白磁 7・8 須恵器

2 まとめ

唐草遺跡では、今回の調査に先行して圃場整備事業に伴う本発掘調査を行い、大凡の遺跡範囲と時代をつかむことができています。範囲は東西約330m、南北約80mの微高地上に立地している。時代は採集品である石鏃以外は室町時代以後の遺物しか出土していないことから室町時代以後にこの周辺で生活が営まれたと考える。また石鏃に関しては、当遺跡より500m北西に弥生時代後期の遺構・遺物を確認している戎添遺跡が立地し、そこから現在でも猪や鹿が現れる当地を狩猟場として訪れていたと推測される。室町時代以後は、近隣にある覚住寺に“昔は周辺に大小の寺院が点在していた”と残されていることや、遺跡範囲内には寺院関連と考えられる小字名が多く残っていること、今回と圃場整備に伴う調査結果から寺院関連施設によって当地周辺が開けた可能性が高い。

(約崎)

18 国分遺跡 - 3次調査 -

所在地	三原町八木国分字平河内外
事業名	基盤整備促進事業
調査主体	三原町教育委員会
担当者	坂口弘賢
種別	確認調査
調査期間	平成13年12月18日～26日
調査面積	54㎡ (12ヶ所)



調査の位置

1 調査内容

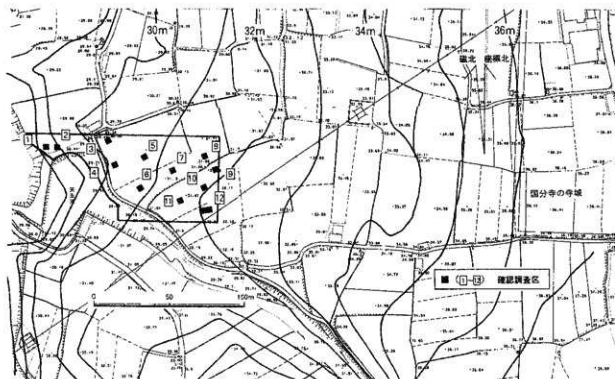
本調査は、三原町八木国分地区で計画中の団体営園場整備事業に伴う調査である。調査は2×2mの調査区11ヶ所と2×5mの調査区を1ヶ所設定し、重機・人力併用で進めていった。

調査の結果、調査範囲のほぼ全域で遺構・遺物を確認した。特に調査地南東部は遺構の密度が高く柱穴状の遺構が多い。その内No.12調査区においては、先の調査の掘立柱建物（建物1～3）の北に位置しており、一部の遺構は建物跡と同じ傾きを示すようにも見える。遺構からは土師器の皿・杯が出土しており、底部外面がへら切りと糸切り技法の両者が認められる。

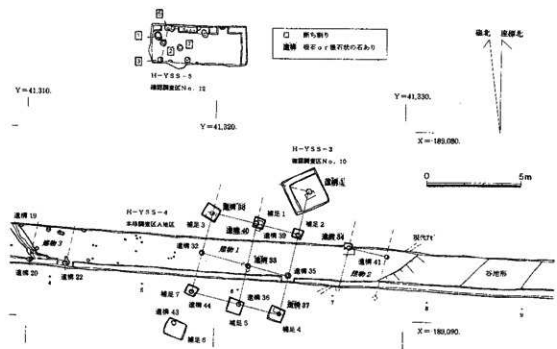
2 まとめ

本調査により、平安時代後期から中世にかけての遺構が分布することが確認できた。集落も広範囲に広がるものと想定される。

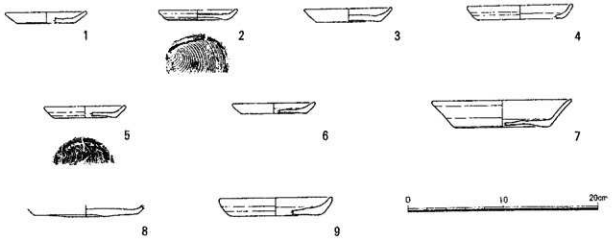
(坂口)



調査区設定図

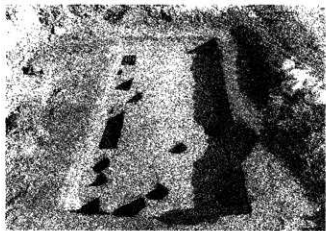


No.12 調査区周辺平面図



No.12 調査区 出土遺物実測図

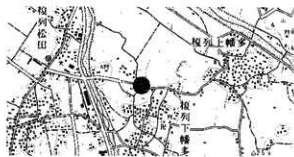
1 (1), 2・3・5・6・7 (2)
4 (3), 8 (5), 9 (7)



No.12 調査区 (西より)

19 おのころ島遺跡 - 5次調査 -

所在地	三原町榎列下幡多字北ノかち外
事業名	町道入田・おのころ線道路改良事業
調査主体	三原町教育委員会
担当者	山崎裕司
種別	本発掘調査
調査期間	平成14年1月7日～3月25日
調査面積	888㎡



1 調査内容

三原平野の北東部、三原川と成相川に挟まれ、両河川によって形成された扇状地と成相川周辺に広がる低平な三角洲の境界付近に位置する。東～北方向に弥生～中世の複合遺跡である幡多遺跡が広がる。

A地区では古墳時代と中世の遺構が検出された。

流路状の窪地（遺構5）には、6世紀前後の土師器・須恵器を含む土器だまりが形成されていた。

遺構77は遺構面直上で破片化した大小土師器皿と古銭9枚が積み重なって出土したものである。土師器皿は大きいものが口径11.0～11.9cm、小さいものが口径8.5～9.0cm、古銭のうち初編年の最も新しいものは永承通寶（1408年）である。遺構77はSB02内に位置し、SB02柱穴からは16世紀頃と思われる土師器皿が出土していることから、両者の時期差は少なく関連する遺構と考えられる。遺構77はSB02建築に先立って地鎮を行ったものではないだろうか。SB02は2×3間以上で、南北東に付属的な施設が付く総柱建物である。桁行はN45°Wを示す。SB01は2×4間の側柱建物で、梁行はN29°Eを示す。柱穴内から白磁や底部へら切りの土師器小皿など、12世紀の遺物が出土している。

A地区東端とB地区西端は20m程離れており、B地区では古代末～中世の遺構面を検出した。東側は柱穴が密集し、特に側柱建物の復元は困難である。総柱建物については主要な梁行柱間が2.0～2.4mを示す建物群（A群）と1.2～1.4mを示す建物群（B群）に分かれ、A群9棟とB群5棟が復元できた。特にA群について、建物規模がやや大きいのに加え、建物内の柱通りが良く、9棟中6棟は柱筋がほぼ正確にN27°Eを示し、建物間でも柱筋を描えるなど、極めて計画的に施行された建物群であり、一般集落の建物とは区別されるべきと考える。

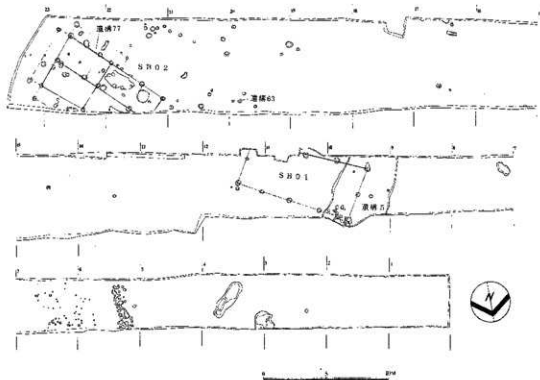
多くの遺構から土師器皿（坏）・小皿を中心に完形に近いものが出土しており、盛んに祭祀を行ったようである。他に土師器碗、瓦器碗・小皿、東播系須恵器の甕・片口鉢、白磁碗・皿等が出土しており、時期幅は12世紀初頭から13世紀前半と思われる。また土師器供膳具の多さに比べて、土師器煮沸具がほとんど出土していないことも、B地区が一般集落と区別されることの傍証となるであろう。

2 まとめ

B地区の豊富な一括遺物は三原平野周辺における中世前半の土器の変遷をたどっていく上で、今後極めて重要な資料となるであろう。三原平野周辺は中世を通じ、一貫して回転台成形により土師器皿（坏）・小皿がつくられていく地域である。A地区遺構77のように大小の皿のセットは中世末まで残る。当遺跡

では回転土師器甕も出土しているが、13世紀中葉以降は出土しない。甕は土師器以外に瓦器甕が存在し、瓦器甕は土師器甕消滅後も一定期間残っていくようである。瓦器甕は和泉型の特徴を示し、B地区出土のものは尾上編年のⅡ-3～Ⅲ-3に収まると思われる。

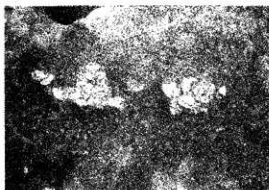
土師器供膳具の底部切り離し技法から、ヘラ切りのみ、ヘラ切りと糸切りの混在、糸切りをみの3段階に分けられるようで、仮に古・中・新段階としておく。遺構210は総柱建物柱穴で、古段階と思われる。



A地区 遺構平面図



A地区 遺構5 土器だまり (南東から)



A地区 遺構77 (東から)



A地区 遺構77 出土遺物

底部へラ切りの十師器皿（坏）・小皿と碗に加え、須恵器甕は香川県かがやきの十瓶山とびろ高産のものではないかと思われる。遺構101は新段階と思われる。供伴する瓦器碗は尾上編年Ⅲ-1～2と思われ、12世紀末までには底部へラ切りは消滅していくと推定される。

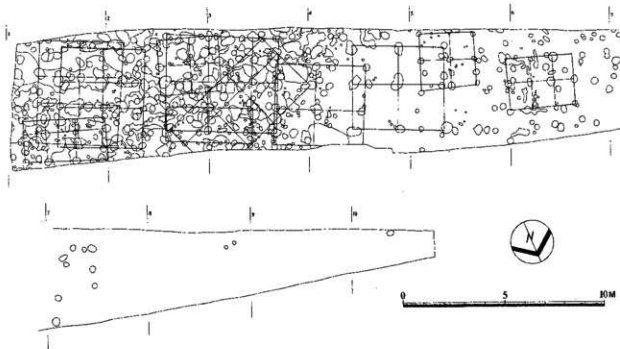
12世紀代は中世的な土師器供膳具の成立に続いて、それらの底部切り離し技法が糸切りとなる、土師器碗に加えて瓦器碗が登場するなど、技法や器種の変遷が激しく、島外との流通、あるいは土器の製作技法の伝播が非常に盛んであった時期と考えられる。今後、さらに整理・分類作業を進めていく中で、より多くのことがわかっていくに違いない。

B地区の建物群について、一般集落とは違った建物群であることは間違いないと思われるが、発掘成果のみでその性格等を述べることは難しい。「淡路国大田文」（1223年）によると当地周辺は「笑原保」に属しており、古代末に衰退した郷を保に再編し、国衙領の再開発を進めていったと考えられる。B地区の北側には、低平で水利が良い三角州地帯が広がっており、扇状地が大半を占める「笑原保」において最も再開発の行い易かった場所と推定される。また三角州地帯の条里地割は約N30°Eを示すが、A地区S B01やB地区A群のN27°Eを示す6棟はこの方位にあわせて建てられたと考えられる。したがって検出された建物群については、条里地割の再開発と密接に関わって建てられたと推定され、特にA群の建物については保の中核となるような建物の可能性も考えられる。

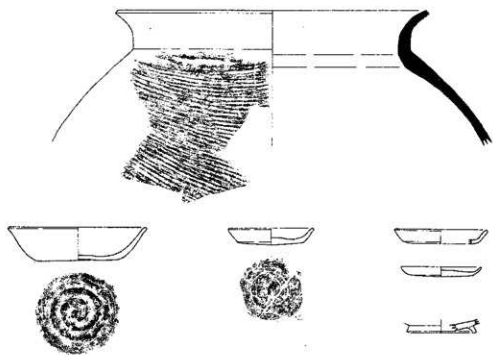
13世紀後半以降、幡多遺跡若宮地区3次調査の成果（『三原郡埋蔵文化財発掘調査年報Ⅰ』2001）などから、開発の中心は次第に扇状地へ移っていくものと考えられる。13世紀前半に当遺跡が終焉を迎えるのは開発地の移動が直接の原因と思われる。

古墳時代の遺構については遺構5の土器だまりのみで住居跡等の検出は無かった。ただしこの北側の確認調査時にも古墳時代の包含層が確認されており、上器だまりの北側に古墳時代の遺跡が広がっている可能性が高い。

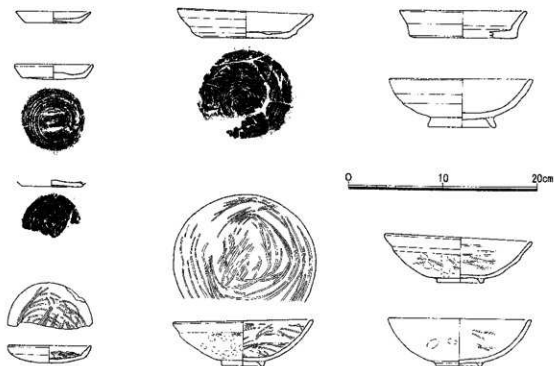
（山崎）



B地区 遺構平面図



B地区 遺構 210 出土遺物



B地区 遺構 101 出土遺物

3) 2002 (平成14) 年度

20 国分遺跡 - 4次調査 -

所在地	三原町八木国分字平河内外
事業名	基盤整備促進事業
調査主体	三原町教育委員会
担当者	坂口弘真
種別	本発掘調査
調査期間	平成14年3月15日～4月10日
調査面積	296㎡



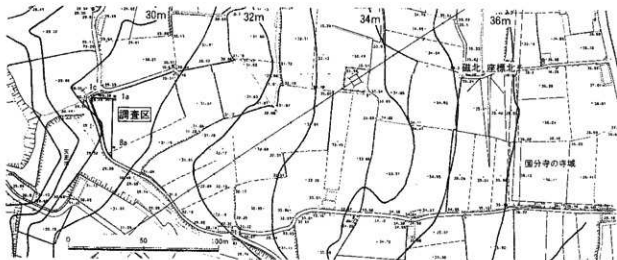
調査の位置

1 調査内容

本調査は、八木国分地区で計画されている団体営園場整備事業に伴う調査である。調査地は、国分寺約250m西の標高30.77mの河岸段丘上に位置する。調査は天上池の成形が行われる部分に三角形の調査区を設定し、重機・人力併用で調査を進めていった。

調査の結果、掘立柱建物を2棟確認した。建物1は桁行2間×梁行7間以上の座標北に対して11.5°東に傾きをもつ建物である。梁行の柱間が1.5～1.6mであるのに対して、桁行の柱間が1m前後と短い。さらに7(柱穴)の2.3m南にも柱穴状の遺構2-1が認められることから独立機持柱になる可能性もある。埋土はこげ茶色系となり、建物2の埋土とは異なることが肉眼でも観察できた。出土遺物が非常に少なく20(柱穴)の掘方から弥生土器の体部と思われる破片が出土している。

調査区中央で掘立柱建物2を確認した。桁行2間以上×梁行2間の規模で座標北に対して78°東に傾きを持つ。梁行の柱間が1.9～2.0m、桁行の柱間が2.3～2.75mとなり桁行の柱間が長くなる傾向がある。また建物の南・西には規模の小さな遺構が配置されることから、柵等で区画されていたものと思われる。遺構埋土が淡灰色となる。遺構からは土師器や瓦器・青磁が出土しており、13世紀前半頃と考えられる。

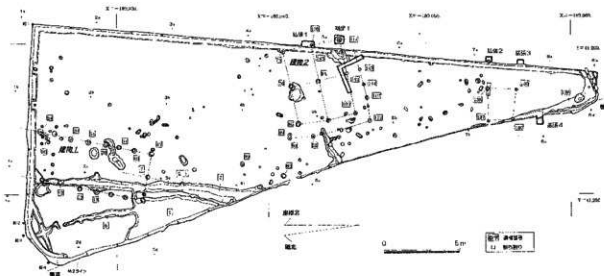


調査区設定図

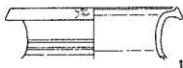
調査区の南端137・138・139・140の各遺構がほぼ方形に配置される。その内137・139・140からは弥生時代中期（IV様式）の甕や壺が出土している。埋土は建物1と同じ色調である。

2 まとめ

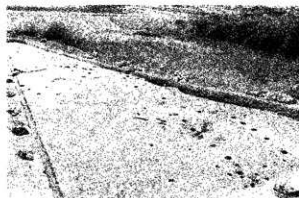
本調査により、弥生時代中期と13世紀前半頃の建物跡を確認した。特に建物1は独立棟持柱建物になる可能性もあり注意される。 (坂口)



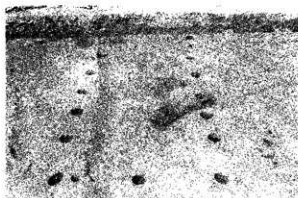
調査区平面図



出土遺物実測図 1 (139)、2 (140)



調査区全景 (北東より)



遺物1 (南より)

21 国分遺跡 - 5次調査 - ・淡路国分寺 - 13次調査 -

所在地 三原町八木国分字居内外
 事業名 基盤整備促進事業
 調査主体 三原町教育委員会
 担当者 坂口弘資
 種別 確認調査
 調査期間 平成14年6月17日～7月22日
 調査面積 206.5㎡ (52ヶ所)

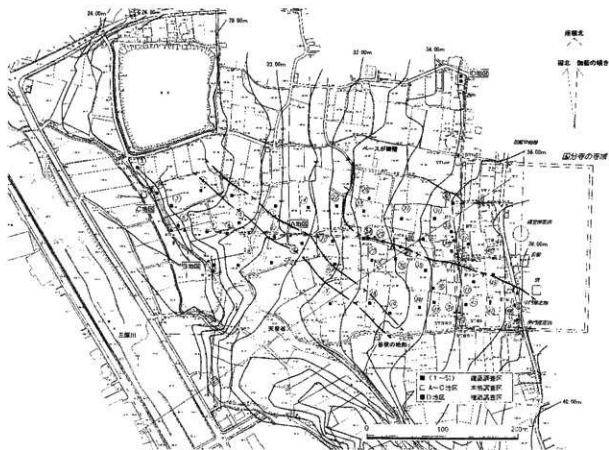


調査の位置

1 調査内容

本調査は、八木国分地区で計画されている団体営圃場整備事業に伴う確認調査である。調査地は国分寺の寺域を一部含む両側の水田である。調査は2×2m規模の調査区を中心に52ヶ所設定し、重機・人力併用で進めていった。

調査の結果、事業対象地内に弥生・奈良・平安時代・中世の遺構を確認した。国分寺周辺については、No.39・40・50などにおいて幾つか溝状の遺構を確認しており、No.50の遺構については、寺域西限(外側溝)の可能性が高いものの、その他については断定するには至らなかった。

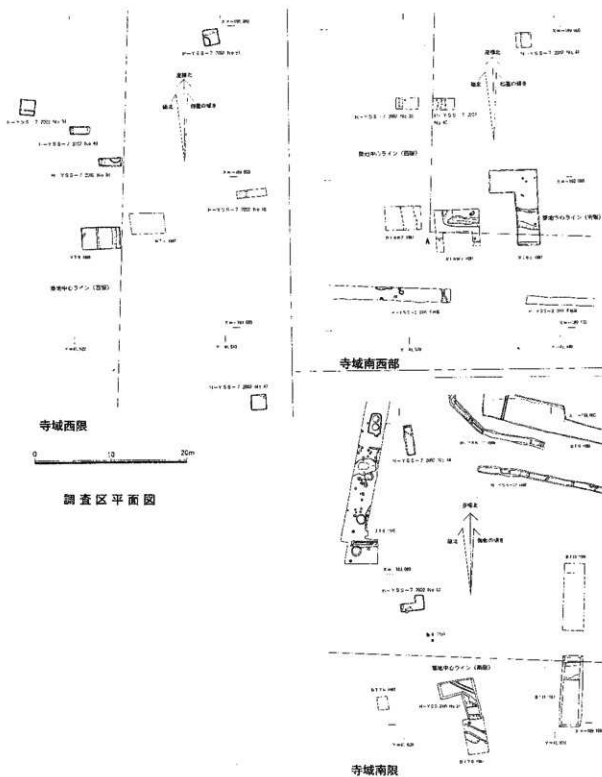


調査区設定図

2 まとめ

本調査により、ほぼ全域に中世、南西部には弥生時代、国分寺周辺には奈良・平安時代の遺構・遺物を確認することができた。また国分寺の西、調査地中央には南東から北西方向に向かって谷状の地形がのびており、国分寺はこの谷状の地形を避けて造営されたと思われる。その後中世段階には、谷状の地形の埋没が進み、柱穴状の遺構分布が認められるようになり、国分寺西側周辺に広範囲に集落が形成されたものと思われる。

(坂口)



22 国分遺跡 - 6次調査 -

所在地	三原町八木国分字カラシカキ外
事業名	基盤整備促進事業
調査主体	三原町教育委員会
担当者	坂口弘貴
種別	本発掘・確認調査
調査期間	平成14年8月9日～ 平成15年1月21日
調査面積	1,253㎡



調査の位置

1 調査内容

本調査は上記の、八木国分地区で計画されている団体営圃場整備事業に伴う調査である。調査地は標高27.25～35.80mを測る水田からなり、地下の遺跡に影響がおよぶ排水路部分を中心にA～D地区の調査を行った。(P49参考)

調査の結果、国分寺西限築地から約70m西の地点で国分寺創建に伴う半地下式有林平窯1基や弥生・奈良・平安時代・中世の遺構・遺物の確認ができた。瓦窯の報告は別項に譲るとして、以下主要調査区の概要を記す。

【A地区】

国分寺西限築地から西方向にのびる調査区で、総延長約320mを測る。調査区のほぼ全域で遺構を確認したが、国分寺に近い東端は遺構の密度が低く、逆に西半には平安時代末から中世にかけての遺構が多く分布する。特に70～73区にかけては、無数の柱穴や土坑などを確認した。364からは土師器の皿・坏類が出土している。これらの土師器の底部外面の技法はへら切りと糸切りの両者が認められる。408からは、高台が付く土師器碗や皿、白磁碗が出土している。

また69区周辺には弥生土器(中期後半)が含まれる遺構が幾つか確認できた。

【B地区】

圃場面の削平が行われる調査区である。調査範囲が狭く建物として把握はできていないが、柱穴状の遺構や土坑・溝等を確認した。7からは弥生土器(中期後半)が出土している。

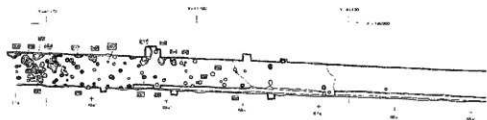
52からは体部に凸帯状の膨らみを持つ両黒と思われる黒色土師器碗や黒色土師鉢などが出土している。共伴している土師器皿・坏の底部外面はすべてへら切りである。

2 まとめ

本調査により、弥生・奈良・平安時代・中世の遺構・遺物を確認することができた。特に国分寺に隣接する形で創建期の瓦窯を確認したことは、非常に大きな成果となろう。また、これまでの国分寺周辺での調査成果もあわせると、平安時代後期から中世にかけて集落が拡大したものと思われる。さらに個々の遺構からは、底部外面の技法がへら切りから回転糸切りへの変化がおえる土師器皿・坏類の資料が含まれるなど、興味深い遺跡であることがわかった。

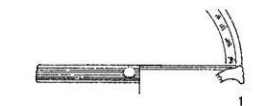
(坂口)

1

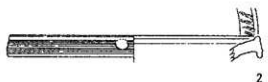


0 10m

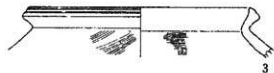
A地区平面图



1



2



3



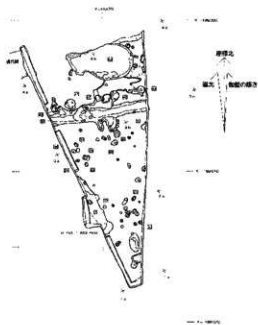
4



5

6

0 10 20cm

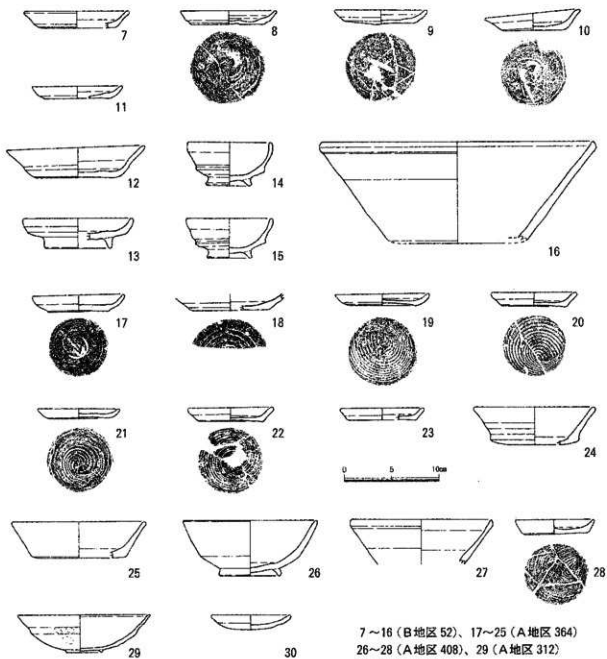


B地区平面图

出土物实测图 1

1·2·5·6 (B地区7)

3 (A地区262)、4 (A地区237)

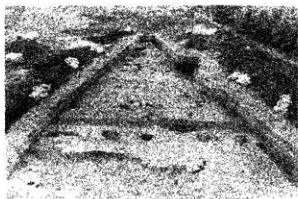


7~16 (B地区 52)、17~25 (A地区 364)
 26~28 (A地区 408)、29 (A地区 312)
 30 (A地区 336b)

出土遺物実測図 2



A地区全景 (71~74区・南西より)



B地区全景 (北より)

23 栗原遺跡 - 2次調査 -

所在地	三原町神代浦字栗原外
事業名	県営土地改良総合整備事業
調査主体	三原町教育委員会
担当者	定松住重・山崎裕司
種別	本発掘調査
調査期間	平成14年8月19日～9月20日
調査面積	563.4㎡



調査の位置

1 調査内容

栗原遺跡は三原川上流右岸の論鶴羽山の裾に位置する。調査区の谷を挟んだ北側には、有力国人として淡路十人衆の一人に数えられている島田氏の居館といわれる栗原城跡（鎌倉～戦国時代）が立地する。南東約300mの山頂には山城である中の子城跡が立地する。

栗原城は周知の遺跡として登録されていたが、本事業に伴う遺構範囲確認調査では関連する遺構・遺物は確認できなかった。しかし、一部遺跡の包蔵が確認されたため、遺構面に掘削の及ぶ箇所を記録保存することとなった。

【A地区】

標高120.9mを測る。耕作土直下が地山となり、谷状に落ち込んだところから時期判定困難な土師質土器片が数点出土した。

【B地区】

標高126.3～127.3mを測る。確認調査では溝状遺構を確認し、13世紀前半の瓦器碗が出土している。調査区内東半分で土坑群とそれに付随する溝を確認した。溝は流水の痕跡が認められず、土坑も一氣に埋没している。確認調査では瓦器片も出土したが、陶磁器より近世後半から近代までと思われる。性格は不明である。

出土遺物は非常に少なく、土師質土器小片ばかりである。唯一調査区北西部の落ち伏遺構より瓦器碗・土師質土器が出土している。

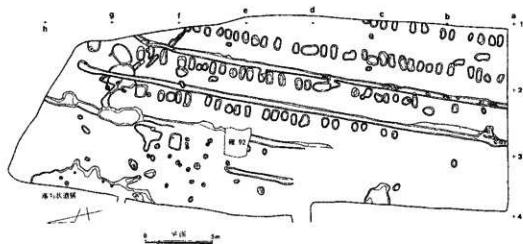
2 まとめ

確認調査時に周知の栗原城跡からは歴史的遺物は未確認であり、本調査地から瓦器碗が出土したことから栗原城跡と考えていたが、明確な遺構は確認できなかった。しかし、瓦器碗など栗原城と時期が一致する遺物が出土し、調査区東部には緩斜面が続くことから、遺跡本体は東部の緩斜面に立地し、本遺跡は栗原城跡関連遺跡であると考えられる。

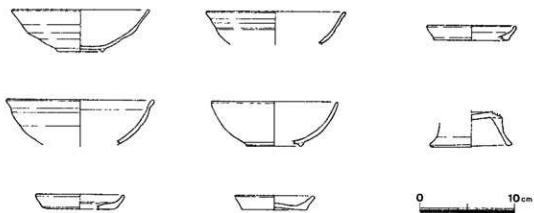
(定松)



調查區地形圖



B地区 遺構平面圖



B地区 出土遺物 (上段 包含層 中・下段 落ち伏遺構)

24 ^{かいどうじ}海棠子遺跡 - 2次調査 -

所在地	三原町神代社家字海棠子外
事業名	県営土地改良総合整備事業
調査主体	三原町教育委員会
担当者	定松佳重
種別	本発掘調査
調査期間	平成14年9月18日～ 平成15年2月6日
調査面積	1,486.2㎡



調査の位置

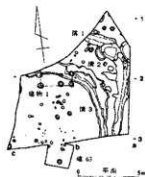
1 調査内容

海棠子遺跡は論鶴羽川によってできた河岸段丘上に位置し、標高82.5～91.8mを測る田園地帯である。西にはわずかに土塁が残存する土田上居城跡(室町)や、北には弥生・中世の戎添遺跡、東には寺院関連遺跡の唐草遺跡が立地する。

事業実施に先立ち遺構範囲確認調査を行った結果遺跡の包蔵が確認され、遺構面に掘削の及ぶ箇所を記録保存することとなった。

【C地区】

北流する溝3条を確認した。溝はすべて調査区北部で大きく西に湾曲する。溝1より室町期と思われる館前焼片が出土した。溝2と3は切りあっており、溝2が先行する。溝3の埋没後、1×2間の掘立柱建物が建てられる。柱穴より瓦器庵小片が出土しており、溝1より先行すると思われる。



C地区 遺構平面図



調査区設定図

【D地区】

弥生時代の遺構は竪穴住居2棟を検出した。竪穴住居1は直径3.7m、2本柱である。焼失しており、木材の炭化が認められる。炭化材は南から西にかけて顕著であり、それらは中央に向いている。炭化物の上に粘土様の痕跡は認められなかった。出土遺物は少なく、2次焼成を受けているようにみられる。30cm四方の台石が柱穴のそばに置かれていた。竪穴住居2は直径5.7m、5本柱である。住居からは時期判定可能な器台や高坏などの土器がまわって出土した。この住居にも55×45cmの台石が置かれており、台石から中央土坑にかけてサヌカイトの剥片が多く散布していた。住居埋没後、一部中世の遺構が掘り込まれている。

中世の遺構は柵列3列と掘立柱建物1棟を検出した。柵列と掘立柱建物2は方向が一致するため、併存が考えられる。弥生時代の包含層を掘削中に、直径8cmの土師器小皿5枚が4枚の古銭を挟んで出土した。遺構は明確に検出できておらず、地鎮遺構と考えられる。銭種は天璽元寶（1023年初鑄）・元豊通寶（1078年初鑄）・元祐通寶（1086年初鑄）・紹聖元寶（1094年初鑄）である。

【E地区】

D地区と接するところで竪穴住居を確認した。直径8.5m、推定10本柱である。礎ベースであるためかわずかに床面を整地した痕跡が認められた。土坑61からは完形の土師器小皿が出土した。

【F地区】

性格不明の落ちと溝状遺構を確認した。北端部の落ち状遺構からは弥生土器が出土したが、不成形であるため竪穴住居の可能性は低い。土坑からは瓦器碗も出土した。

【G地区】

弥生時代と中世の遺構を確認した。中世遺構の埋土と遺構面の土壌が似ているため、弥生の遺構面を検出した。しかし、弥生遺構の埋土も遺構面と似ていたため、1層下の地山で最終検出を行った。

弥生時代の遺構は方形周溝墓を構成すると思われる溝4条、中世遺構は掘立柱建物1棟である。方形周溝墓の溝からは底部が穿孔された小型甕や復元高約40cmの広口壺が出土した。溝数・方向より3基の方形周溝墓が推測できる。主体部は確認できていない。

【H地区】

舌状に張り出した尾根の下方にあたり、確認調査で包含層から弥生土器が出土したが、調査区がHの尾根側であるため田造成時にかなり削平されており、遺構・遺物とも未確認である。

【I地区】

弥生を中心とした土器片が出土した。小土坑を検出したが性格は不明である。

【J・K地区】

弥生と中世の遺構を確認した。下層には弥生土器を含む黒色シルト質土が堆積し、上層には須恵器を含む。竪穴住居は直径約5mと思われる。中世の溝は北流し、滞水していたと思われる。

【L地区】

中世遺構を確認した。建物4は柵列4より先行する。溝には人頭大の砂岩が人為的に多く入っており、わずかな滞水が認められる。上坑からは土師器皿2枚や、須恵器片口が出土した。柱穴と思われる土坑も多く検出したが、建物の構成は不明瞭である。

【M地区】

弥生時代の竪穴住居5は直径5m、推定6本柱である。この住居跡でも30cm四方の台石を確認した。

方形周溝墓の溝と思われる溝11・12はG地区の方形周溝墓のように隅の切れたものではなく、つながっている。土坑14から直径8cmの土師器小皿が完形で出土した。

【N地区】

竪穴住居1棟と中世の溝を確認した。竪穴住居6は直径6.5mを測る。60×35cmと20cm四方の台石が出土したが、2石とも平坦面が大きく傾いており、他の住居出土の台石とは異なって本来の位置から動いているようである。この住居は規模・位置を全く変えずに建て替えを行ったようであり、下層にも生活面を確認した。中央土坑には何層かに分かれて炭化物層が堆積している。周辺には焼土も見られた。

2 まとめ

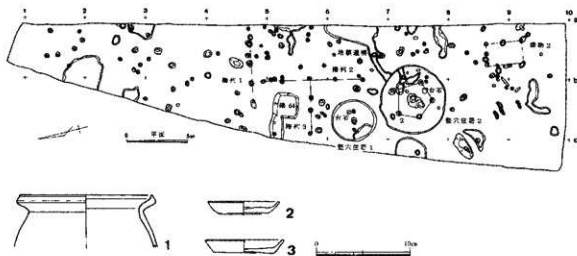
確認調査では弥生土器を確認していたが、谷筋に設定した調査区からの出土であったため、調査開始当初は中世のみの遺跡と考えていた。しかし、最終6棟の竪穴住居や方形周溝墓を検出し、それがほぼ全域に広がっていた。

竪穴住居の時期は中期末～後期初頭と思われる。しかし、個々に竪穴住居の出土物を見ていくと、わずかながら時期差が見られる。D地区竪穴住居1・2は中期末～後期初頭であるが、隣接しているため併存は困難であり、住居1が先行すると考えられる。6棟の内、4棟で台石が出土した。出土しなかった2棟も調査範囲内では出土しなかっただけで、未調査部分にある可能性は高い。

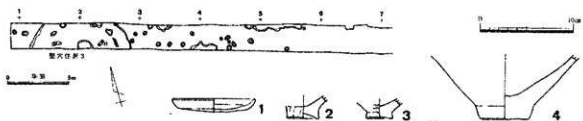
三原郡において方形周溝墓は三原町幡多遺跡野水地区で8基確認されたのが初例であり、今回が2例目となる。幡多遺跡の周溝墓は弥生中期後半であり海棠子遺跡は中期末と少し時期差があるものの、溝の隅はつなげずに切られているのが共通し、三原平野での方形周溝墓のあり方を示す例になるであろう。また、これまで弥生遺跡は平野内で確認されており、海棠子遺跡は高位河岸段丘上にも弥生遺跡が立地することを示し、弥生遺跡の立地に新たな事例となった。

中世遺構はほとんどが13世紀前半に位置付けられるが、C地区溝1のみ時代が新しくなり、土田上居城跡との関連が考えられる。また、北に隣接する戎添遺跡と時期が一致し、両遺跡は同一集落であったことがわかった。

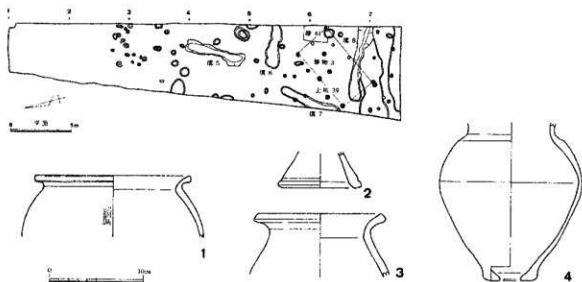
(定松)



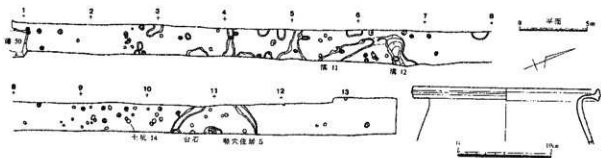
D地区 遺構平面図・竪穴住居2(1)・地鎮遺構(2-3)出土遺物



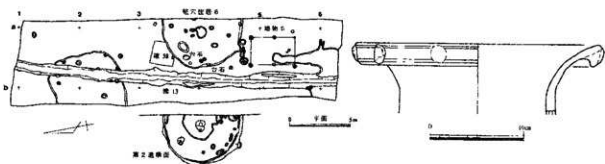
E地区 遺構平面図・竪穴住居3(2~4)・遺構61(1)出土遺物



G地区 遺構平面図・溝5(1)・6(2・3)・7(4)出土遺物



M地区 遺構平面図・竪穴住居5出土遺物



N地区 遺構平面図・竪穴住居6出土遺物

25 嫁ヶ測遺跡 - 2次調査 -

所在地	南淡町賀集立川瀬字嫁ヶ測
事業名	特定環境保全公共下水道事業
調査主体	南淡町教育委員会
担当者	的崎薫・定松佳重・谷口梢
種別	本発掘調査
調査期間	平成14年8月26日～ 平成15年5月29日
調査面積	4,380㎡



調査の位置

1 調査内容

調査地は三原平野西部の標高10m前後の田園地帯に位置し、約100m西側を大日川が北流する。この周辺は古代の土地区画制度である条田型地割の残る地域でもあり、古代の行政区においては三原郡賀集郷にあたる。また、1km東には推定南海道が南北に走る。

上記事業に伴って確認調査を行ったところ、古代の遺構・遺物と近世の遺物を確認したため、本発掘調査を行うこととなった。遺跡に影響の及ぶ建物や道路部分であるA～C地区は記録保存を行い、この結果から、D・E地区は遺跡の地下保存を前提とした遺構配置の確認記録調査を行った。

調査の結果、この遺跡は後世に弥生時代の遺構面にまで及ぶ大規模な整地が行われているため、包含層には縄文時代～近世の遺物が混在していたが、遺構は弥生時代の集落と古代の官衙・集落であることを確認した。

各時代ごとにまとめる。

【縄文時代】

遺構は未確認である。遺物は縄文土器と確認できたのはわずかに3点であり、包含層や古代の遺構などから出土し、縄文後期頃の可能性がある。石器類は石鏃・石錐・スクレイパー・石匙・磨石・楔形石器などが出土している。

【弥生時代】

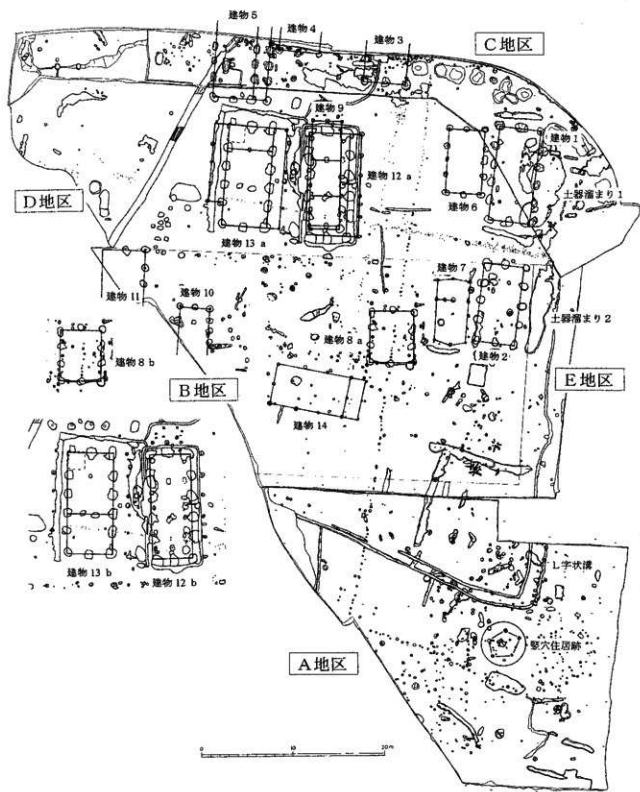
遺構は主にA地区において密集し、竪穴住居が1棟と建物の構成が不明な柱穴・溝・土坑などを検出した。後世の削平が竪穴住居の周溝まで及んでいるため、その規模を明確にはできないが、中央土坑と5本の柱で構成される直径5m前後の円形の住居と推測される。これらの遺構は、遺物から弥生時代中期前葉頃と考えられる。その他の遺構からはチョコレート色の胎土をした中河内産の土器や結晶片岩を多く含んだ紀伊産の土器も含まれ、他地域との交流がうかがい知れる。

遺物は弥生時代前期の要素を持つ土器も含まれているが、中期前葉のものが多く、石器類は石鏃以外に石包丁・大型蛤刃石斧・石錐・楔形石器などが出土している。

【古墳時代】

遺構は未確認である。

遺物は5～6世紀頃の韓式系土器や7世紀頃の須恵器が出土している。古墳時代の遺物は比較的摩滅しているものが多く、大日川の氾濫によって上流からもたらされたか、周辺から流れ込んできたもので

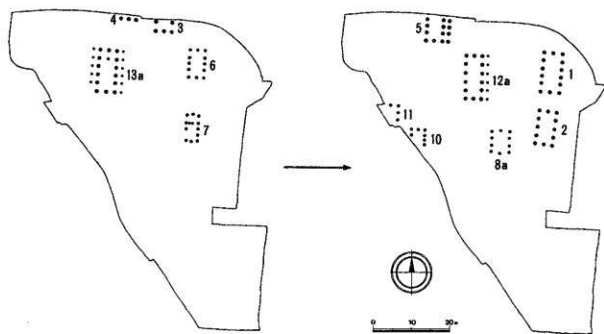


遺構配置図

あろう。

【奈良時代】

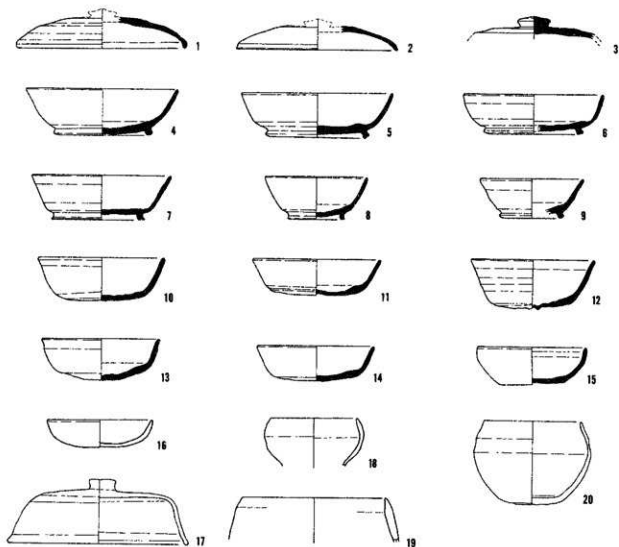
奈良時代の遺構はA地区北半を南限としてB～E地区全域に広がる官衙である。大型獨立柱建物を15棟確認しているが、すべてが同時期に連立していたものではなく、大きく2時期に分けられ、その中でもさらに建替えなどで2時期に細分できる。出現期に関しては明確ではないが、奈良時代以前の7世紀末頃と見られ、官衙機能が失われるのは遅くとも8世紀第2四半期である。時期区分については、建物はほぼ北を向くがその傾きに微妙な異なりがあるため、建物の中軸線だけでなく建物の規模・建物間の距離・出土遺物なども考慮している。建物12a・12b・13a・13bは庇もしくは軒支柱を付けたり、溝を巡らしたりしていることからこの遺跡の中心的建物と思われ、これらを中心として周辺の建物が展開すると見られる。1時期目には建物13a・13bを中心とした比較的規模の小さな建物群（建物3・4・6・7）であり、2時期目には建物12a・12bを中心とした規模の大きな建物群（建物1・2・5・8a・8b・10・11）である。また、建物13から建物12のように西から東側への建替えが1時期目から2時期目に移行する段階で見られ、建物6から建物1、建物7から建物2もこれにあたる。



奈良時代の建物変遷図

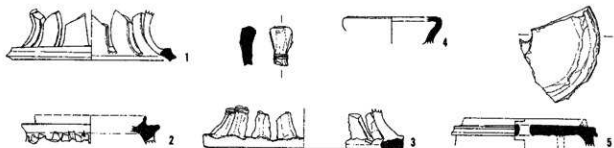
遺物は須恵器・土師器・製塩土器の他に硯や土馬・瓦といった官衙的要素の強いものや、用途不明な石製品が出土している。須恵器の比率が高く、中でも供膳川の環類が大半であるが、他に長頸壺や鉢・甕・短頸壺・横瓶などがある。土師器に関しては、杯・皿・甕・鍋・高坏・托などが出土しているが量的には少ない。製塩土器は須恵器同様に大量に出土しており、当遺跡を特徴づける遺物といえる。形式は淡路島の製塩土器編年という丸底Ⅱ・Ⅲ式が出土しているが形態的にはⅣ式に近いものがある。一般的にⅣ式は型作りで厚みがあるとされているが、当遺跡のものは、薄手で尖底に近いことからⅢ式からⅣ式への過渡期である可能性があり、型作りされる前段階と考えられる。硯は脚底面硯（P63図1・2）・蹄脚面硯（3）・異形面硯（4）・有孔面硯（5）が出土している。蹄脚面硯は推定12木

の脚を持ち、碗部と脚台部を別々に作って結合する蹄脚円面硯A類である。この他に环蓋の転用硯も出上している。土馬は脚部と尾部が何点か出土し、須恵質の陶馬も含まれる。陶馬の脚部はワニのような蟹殻状で太短い。瓦は軒丸瓦片が2個体分B地区包含層から出土しているが、これらの瓦は摩滅していることもあり、官衙の建物に葺かれていたというよりは流れ込んできた可能性が考えられる。



土器溜まり1 出土遺物 (S=1/4)

1~15 須恵器 16・17 土師器 18~20 製塩土器



出土硯 (S=1/4)

【平安時代】

遺構は掘立柱建物 9・14の 2 棟を確認した。官衙としての機能を終え、それらの建物が荒廃した後に建てられた一般住居と思われる。2 棟は同時期の建物ではなく、建物 9 は奈良時代末頃まで遡る可能性がある。

遺物は建物の柱穴や包含層から黒色土器 A 類や土師器・平瓦などが出土している。

【中世】

遺構は未確認である。

遺物は包含層から土師質土器（皿・三足鍋）・束播系須恵器（埴鉢）・瓦器（甃）・輸入陶磁器（青磁）が出土している。

【近世】

C 地区で粘土採掘坑を 8 基確認し、陶磁器などが出土した。

建 物	梁行×桁行(間)	備 考
建物 1	2×5	溝(南・北)
建物 2	2×4	
建物 3	2×2以上	
建物 4	2×1以上	
建物 5	2×4以上	1面庇(東)
建物 6	2×4	
建物 7	2×4	溝(南・東)、間仕切、近接棟持柱
建物 8 a	2×3	縦板壁
建物 8 b	2×3	
建物 10	2×3以上	
建物 11	2?×3以上	
建物 12 a	2×5	1面庇(東)
建物 12 b	2×5	溝(完周)
建物 13 a	2×5	2面庇(東・西)、間仕切
建物 13 b	2×6	溝(東・北・西)、間仕切
建物 9	2×6	間仕切、奈良末～平安初
建物 14	2×3	1面庇(東)、平安前半

建物一覧表

2 まとめ

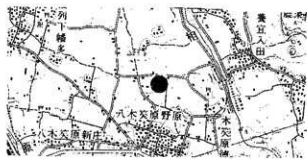
塚ヶ洲遺跡が機能していた 7 世紀末～8 世紀前半頃の淡路国には、まだ国府は成立していない段階であったが、国の役人である国司は存在し、郡衙などに滞在して行政実務を分掌していたようである。塚ヶ洲遺跡は現段階では三原郡衙関連遺跡であるとし、淡路国府が成立する以前に国府の機能の一端を担っていたものと考えられ、国司級の役人が滞在していたことが跡細川面麗の出十からうかがい知れる。この官衙は 7 世紀末頃に出現し、国府の機能が整備されだすと衰退化し、8 世紀の第 2 四半紀には終焉を迎えたと思われる。中心施設とした建物では 13a→13b→12a→12b と短期間に 4 回の建替えがみられ、国司の赴任による改築・新築のあらわれともいえる。官衙としてのその機能は、遺跡の西側を流れる大川川を利用した物資の集散をつかさどる河川交通の港(河津)であった可能性が高い。特に内陸部にありながら製塩土器が大量に出土していることは、塩の貢納国であった淡路国三原郡の海岸部で作った塩を一旦この地に集積し、詰め替えを行って搬出していたことが推測される。調・庸は国司が管理し、租は郡司が管理していたといわれていることから、ここで国司が調塩の管理を行い、執務を行っていた可能性が高いと思われる。時代は少し下がるが、平城京出土木簡(761年)には三原郡阿麻郷から調塩三斗が貢納されたことが記されている。阿麻郷は淡路島の中でも最南部にあり、一旦陸路で運んでから河川などを利用し、現在淡路国の津の可能性が考えられている西淡町の淡から搬出したと思われる。

今回の調査では、木簡や墨書土器など文字資料が残念ながら出土していないため以上のことは推測の部分もあるが、この遺跡は北側に広がっていることは事実であり、このような文字を伴った遺物が一括廃棄されている可能性があるため、今後の周辺の調査によってこの遺跡の機能が解明されることを期待したい。淡路島では官衙的要素を持つ遺跡の調査はわずかであり、塚ヶ洲遺跡のような明確な官衙遺跡の大規模発掘は、淡路の古代史を考える上で重要な遺跡の一つとなったといえる。

(的確)

26 生ヶ坂遺跡 - 7次調査 -

所在地	三原町八木新庄字出口外
事業名	基盤整備促進事業
調査主体	三原町教育委員会
担当者	山崎裕司
種別	本発掘・確認調査
調査期間	平成14年9月18日～10月22日
調査面積	830㎡(本発掘)・24㎡(確認6ヶ所)

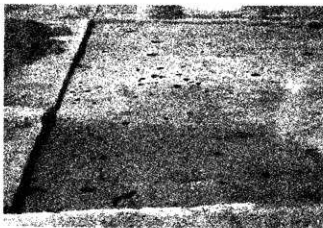


調査位置

1 調査内容

三原平野の北東部、成相川中流左岸に位置する。『和名抄』に記される^{みづつ}実原神社の西宮がA地区の東南約200m、東宮が東約300mに鎮座する。南400mには南海道推定ルートが東西に走り、南800mには国分寺が鎮座する。遺跡南側周辺には古代三原郡の中心的な集落の一つが存在したと推定される。また遺跡北側には弥生時代中期以降の拠点集落である幡多遺跡、西側には古まどう遺跡がある。

A地区では奈良時代と室町時代の遺構面を検出した。室町時代の遺構面については、調査区ほぼ中央に南北方向の溝、遺構35が検出され、これを境に西側には耕作痕と思われる浅い遺構、東側には2×3間の掘立柱建物の柱穴等が検出された。遺構35南側からは同法量の土師器皿数点や古銭(元符通寶)が出上しており、祭祀的な行為を行ったと思われる。土師器皿は口径12cm前後・器高2cm前後と法量が極小化しており、16世紀代と思われる。遺構37は遺構35より古い遺構であるが、15世紀代の土製煮沸具が出上していることから、年代差は少ない。建物柱穴や耕作痕からの良好な出土遺物はないが、遺構35と同じような方位を示すことから同時期と考えて良いと思われる。



A地区 古代遺構面(東から)

奈良時代の遺構面では、柱穴状の遺構44から、土師器の甕・皿が出土している。

B地区は40㎡の小さい調査区であるが、弥生時代後期～終末期の土器だまりとなっている落ち状の遺構を検出している。



A地区 遺構44 遺物出土状況(北から)

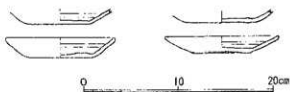
2 まとめ

上述のように遺跡南側には古代集落が広がっていたと推定される。中世においても「淡路国

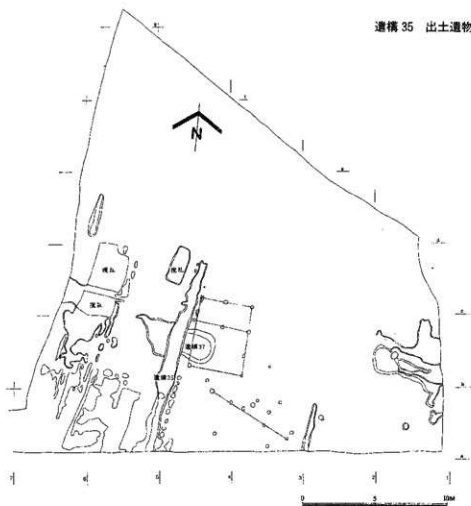
大田文(1223年)「美原保」の項に「美原宮」の記載があり、「美原宮」は中世に入っても集落の中心的な宗教施設として機能していた。現在も大字「美原」小字「野原」という古代地名を残すその集落は、古代から中世を経て、位置をそれ程かえることなく、現在へ至っていると考えられる。A調査区北半より北側では古代～中世の遺構は検出されておらず、A地区は「美原」集落の北限に位置するものと推定される。

また中世については遺構35を区画溝として東側に屋敷地、西側に耕地が広がっていたと考えられ、おそらく当時の農家のあり方の一例を示すものであろう。ただし建物は18.2㎡と極めて小規模であり、建て替えも行われていないことから、流動的あるいは不安定で零細な経営を行っていたと思われる。

B地区では弥生時代後期～終末期の遺構を検出した。上述した幡多遺跡は後期の検出遺構・出土遺物は比較的少なく、幡多遺跡の弥生集落の動向と深く関係している可能性が高い。(山崎)



遺構 35 出土遺物



A地区 中世遺構面 平面図

27 汁谷窯跡・喜来遺跡 - 2次調査 -

所在地	三原町神代黒道字シルクニ外
事業名	県営土地改良総合整備事業
調査主体	三原町教育委員会
担当者	山崎裕司
種別	本発掘調査
調査期間	平成14年12月10日～ 平成15年3月13日
調査面積	235㎡

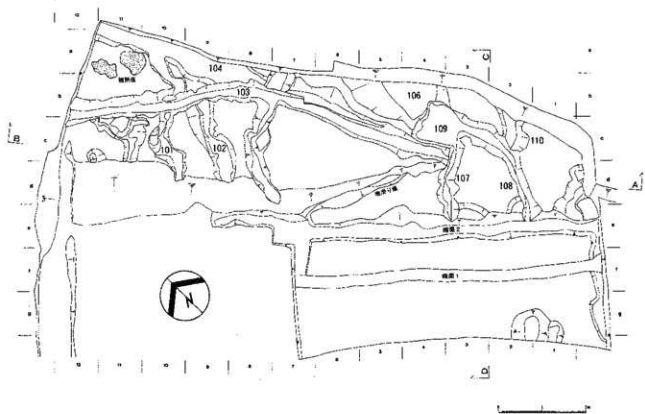


調査の位置

1 調査内容

汁谷窯跡は周知の遺跡で、淡路最古の須恵器窯跡とされている。三原平野の南端、南西方向に傾斜する山裾で、大日川支流の馬乗捨川上流域に位置する。

調査の結果、灰原および窯跡に関係すると考えられる遺構が検出された。灰原は末端部にあたり、当調査後に行われた兵庫県教育委員会による発掘調査の成果（『汁谷窯跡群・汁谷遺跡』2006）により、1号窯の灰原と推定され、さらに灰原下で検出された遺構102・103・104からは坏Bが出土しているため、これを覆う灰原は基本的には1号窯（7世紀第4四半期～8世紀初め）に属するものと考えられる。遺構103周辺には平坦部が造成されており、平坦部造成後に遺構103が掘削されたようである。平坦部



遺構平面図

北側には被熱痕も検出されており、窯跡と関係する何らかの作業をここで行っていたと考えられる。遺構106は全体を検出していないが長門形の土坑状をなすと思われる。上半部が陥没した甕が集中しており、廃棄あるいはここに意図的に置かれたと考えられる。遺物4は当て只履から1号A窯に対応するため、遺構106あるいはこれと一連の遺構と考えられる遺構109・107・108も1号A窯の時期に掘削された可能性が高い。遺構107が平埴部の南東端となっていることから、遺構109・106は1号A窯に至る通路の役割もはたしていたと思われる。

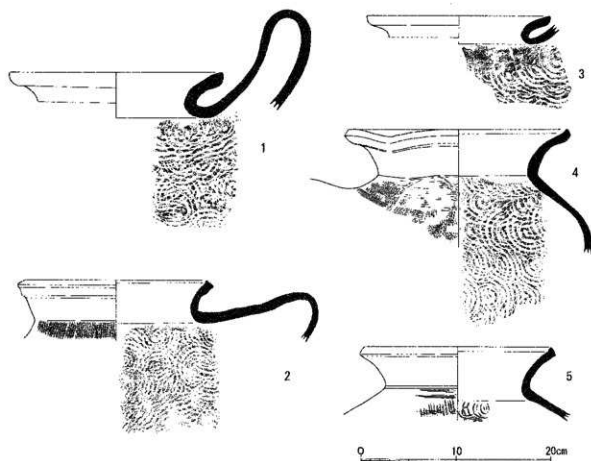
喜米遺跡は汁谷窯跡の北から西側にかけて広がる弥生時代中期後半の遺跡で、今回の事業に伴う確認調査で初めてその存在が明らかになった。小上坑等の遺構が検出されたが、排水路に伴う幅2m強の調査区であるため、遺構の性格等はわからなかった。

2 まとめ

これまで採集遺物で訪られてきた汁谷窯跡において発掘調査が行われ、その一端が明らかになったのは大きな成果である。また兵庫県教育委員会の発掘調査成果により、検出された平埴部や遺構群について時期やその性格を論じることができるようになったことも大きな進歩と言える。

また馬乗捨川最上流域において初めて弥生時代中期後半の遺跡が発見された。今後の課題として、遺跡の広がりや性格等を明らかにすることが重要であろう。

(山崎)



遺構 106 出土遺物

4) 2003 (平成15) 年度

28 あわじこくみん 淡路国分寺 -14次調査-

所在地 三原町八木園分字上ノ十井
 事業名 久代氏共同住宅新築事業
 調査主体 三原町教育委員会
 担当者 坂口弘賢・谷口梢
 種別 確認・木発掘調査
 調査期間 平成15年4月7日～15日
 調査面積 42.8㎡



調査の位置

1 調査内容

本調査は、三原町八木地区所在国分寺の寺域内で計画されている民間開発事業に伴う調査である。調査は、幅1mの調査区を十字型に設定し、重機・人力併用で進めていった。

調査の結果、土坑・溝状の遺構を確認した。遺構の性格等は不明であるが、時期的には、現代に近い

分類	長さ	幅	厚さ	平面形態	数量	備考
a類	(20.0)	(18.0)	6.0~6.5	正方形?	14	瓦質/須恵質/ 土師質
b類	(14.7)	7.0	4.5	長方形	2	瓦質
c類	(11.5)	(9.6)	2.7	?	1	土師質

時期の遺構が大半を占めるものと思われる。出土遺物についても、近世以降に位置付けされるものの割合が高い。ここでは、包含層から出土した磚を紹介する。磚は幅7.0cm、厚さ4.5cm、

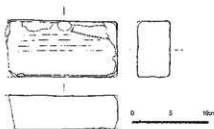
磚の分類

残存長14.7cmを測る瓦質の資料である。磚には、これまでの調査成果から3種類(表参考)があり、本資料は平面形態が長方形をなすb類に該当する。

2 まとめ

本調査により、近世以降の遺構が確認できた。また包含層から磚が1点出土した。出土した磚は、これまでの調査では、出土数が少ない資料で国分寺創建期のものか不明であり、今後の調査課題としたい。

(坂口)



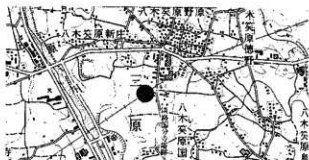
磚実測図



調査区設定図

29 国分遺跡 - 7・9次調査 -

所在地	三原町八木国分字カラシカキ外
事業名	国分遺跡(淡路国分寺瓦窯)発掘調査 (国庫補助)事業・基盤整備促進事業
調査主体	三原町教育委員会
担当者	坂口弘貴・山崎裕司・谷口梢
種別	確認・本発掘調査
調査期間	平成15年4月16日～9月11日
調査面積	453.74㎡



調査の位置

1 調査内容

本調査は、先の調査で確認した瓦窯の構造と周辺の状況を確認する目的で前年度の未消化部分(A地区)と周辺の調査区(No.1～12)の調査を重機・人力併用で進めていった。なお調査では工事計画の見直しもあり、全ての遺構の掘削は行わず、部分的な掘削に留めた。

調査の結果、有林平窯2基や灰原、土坑、掘立柱建物4棟(建物1～4)等を確認した。瓦窯の規模は表の通りである。

掘削を行った2号瓦窯は、分焰柱が4本、焼成室は床面を3面確認した。各床面は前の床面を破壊する様な形で補修されており、構造は把握しにくいものの、最も焼きしまった床面2段階では、遺存状況から分焰柱が6条、分焰道が7条に復元できる。

その他には1号・2号瓦窯焚口南の前庭部には楕円形の170・586(土坑)がそれぞれ配置される。さらに2基の瓦窯南西には583(落ちこ)がある。南北が5m以上、東西9.5m以上、深さ0.8mの大型の遺構で多量の瓦や土器が含まれる。

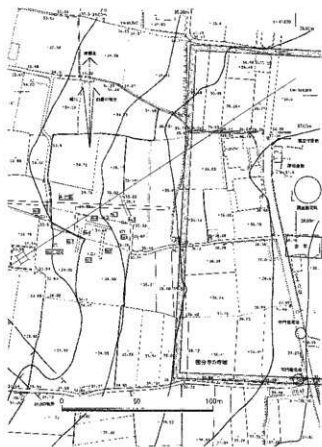
出土遺物には、瓦(軒丸瓦:6種類、軒平瓦:7種類)・須恵器・土師器・製塩土器・石帯等があった。ここでは報告書作成後に判明したことを記す。

<石帯について>

包含層から、丸轆・逓方・鈍尾が各1点ずつ出土している。いずれも表面が研磨され、色調は略灰～黒色をなし、一つの腰帯を構成するものと思われる。これら資料を長岡・平安京出土資料と比較すると平安京出土資料に近いことがわかる。

<軒丸瓦06型式について>

軒丸瓦06型式は、国分寺創建瓦の一群に位置



調査区設定図

	全体規模	焼成室	燃焼室	分縮柱数	分縮床数	備考
1号瓦窯	(3.5)×2.1	(1.0)×(2.0)×△	1.65×2.1×△	4	4<	未完掘
2号瓦窯	3.6×2.1	1.2×2.1×0.08	1.65×2.1×0.37	4	6	完掘

瓦窯の規模（規模の単位はmで長さ×幅×高さ、（）は推定、△は不明）

付けられ、軒丸瓦の中では最も出土点数が多い資料であり、これまでa類のみが知られていたが、范傷が180°回転するb類との識別が可能になった。いずれの資料も土師質であるが、a類は軟質で丸瓦との接合部が盛り上がるのに対して、b類は硬質で接合部が直線的な作りとなる。瓦窯からはa類のみでb類の出土はない。

<軒平瓦01型式について>

軒平瓦01型式は、紀伊国分寺と同范資料で淡路国分寺創建瓦に位置付けられる。01型式はこれまで、土師質で側面に稜を持つa類から須恵質で側面が丸く向かって右上に范傷を持つb類への変化が想定される。今回の調査により瓦窯周辺から土師質で左上に范傷を持つc類と国分寺資料の中にさらに須恵質で范傷が進行したd類があることがわかった。側面の調整や焼成から2つの資料はa類とb類の間に位置付けできよう。

2 まとめ

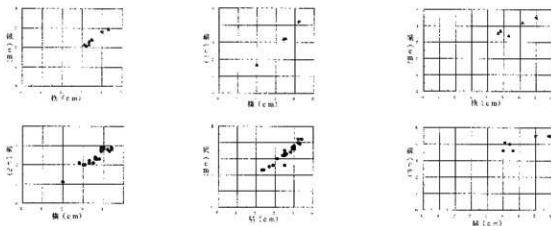
本調査により、淡路国分寺・尼寺創建に伴う瓦窯を2基確認することができた。2基の瓦窯は何回かの補修が認められるものの、いずれも基本的に半地下式有床平窯に位置付けできる。また周辺には灰原や粘土採取跡（583）等瓦窯に付随する遺構（施設）を幾つか確認しており、建物4を含めて北側に工房等の建物が展開するものと思われる。2基の瓦窯において、紀伊国分寺と同范である淡路国分寺創建軒瓦（SBM01・SBH01型式）を焼成したと考えられ、瓦窯の存続時期は周辺から出土した土器より、奈良時代後半（8世紀第3四半期）～平安時代初頭頃が想定される。（坂口）

参考文献

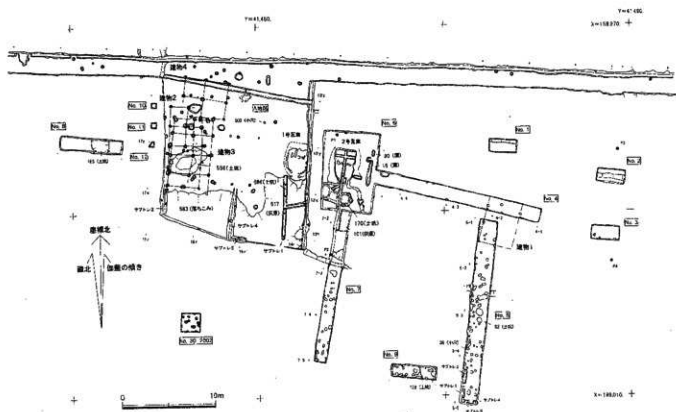
『淡路国分寺』三原町教育委員会 1993

『鈴帯をめぐる諸問題』奈良文化財研究所 2001

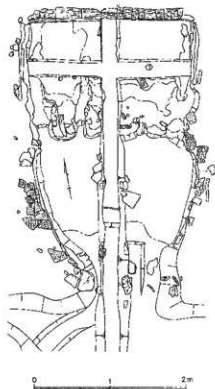
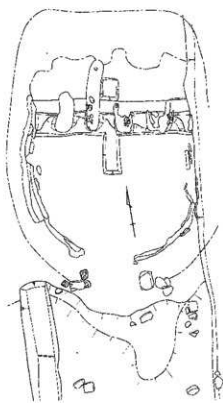
『国分遺跡発掘調査報告書』三原町教育委員会・三原郡広域事務組合 2004



長岡京と平安京の石帯 (■: 国分遺跡 ▲: 長岡京 ●: 平安京)



調査区平面図



1号瓦窯(左)・2号瓦窯(右)実測図

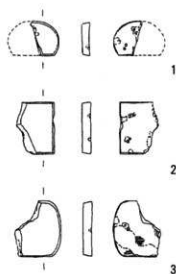


图1~3は $S = 1/3$



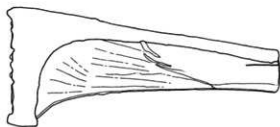
4 SBM01 型式



6 軒丸瓦06型式 (a類)



5 SBH01 型式



7 軒丸瓦06型式 (b類)



8 軒平瓦01型式 (a類)



9 01型式 (c類)



10 01型式 (d類)



11 01型式 (b類)

遺物実測図

30 淡路国分尼寺 - 2次調査 -

所在地	三原町八木新庄字尼寺外
事業名	特定環境保全公共下水道事業
調査主体	三原町教育委員会
担当者	山崎裕司
種別	本発掘調査
調査期間	平成15年4月21日～5月23日
調査面積	約340㎡



調査の位置

1 調査内容

平成11年度新庄地区公会堂新築事業に伴う発掘調査における版築状の整地層の検出や出土瓦により、当地に淡路国分尼寺が存在することが明らかになった。『三原郡埋蔵文化財発掘調査年報Ⅰ』三原郡広域事務組合 2001) 寺域については全くわかっていなかったが、上記調査区の北約30mを東西方向に下水道事業が行われることになり、寺域内を巡ることが予想された為、当調査が行われる運びとなった。

調査の結果、寺域東限・西限と思われるそれぞれ2条の溝が検出され、寺域東西が1町であることがわかった。また淡路国分寺と方位をあわせて、国分尼寺東限と国分寺西限の距離が丁度5町となるように寺域が設定されているといったこともわかってきた。『国分遺跡発掘調査報告書』(三原町教育委員会 2005年)で報告を行っているので、詳しくはそちらを御参照願いたい。

2 まとめ

調査区の幅が1mで、調査区がほぼ車線分の公道内であるため、日毎に調査を終了し、埋め戻しを行うといった極めて制約の多い調査であり、必ずしも十分な調査が行えたとは言えない。

ただし今回、寺域東西が確認できたことは極めて大きな成果であったと言えるし、そこから派生して淡路国分寺や後期南海道との位置関係、平成11年度調査区との位置関係から伽藍中軸線が寺域中心より西にずれており、紀伊国分寺に準じた地割が行われたであろうといったことなど、予想外の成果も多かった。

多くの発掘調査が行われた淡路国分寺周辺に比べて、今後明らかにすべき課題は山積みと見えるが、まずは寺域南北を明らかにすることが必要であろう。

(山崎)



西限溝 遺物出土状況 (東より)



東限溝 発掘状況 (西より)

31 ^{こくぶ} 国分遺跡 - 8次調査 - ・ ^{あわじこくぶんじ} 淡路国分寺 - 15次調査 -

所在地 三原町八木国分字堂ノ後外
 事業名 基盤整備促進事業
 調査主体 三原町教育委員会
 担当者 坂口弘賢
 種別 確認調査
 調査期間 平成15年6月13日～30日
 調査面積 144㎡ (36ヶ所)

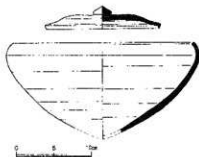


調査の位置

1 調査内容

本調査は、三原町八木国分で計画されている団体営園場整備事業に伴う確認調査である。調査は2×2mの調査区を36ヶ所設定し重機・人力併用で調査を進めた。

調査の結果、ほぼ全域において遺物包含層や遺構を確認した。また国分寺域内の調査区 (No.35・36) からは、奈良時代後半から平安時代初頭頃の土器や瓦がまとめて出土した。さらに遺物の中に転用硯や金属器を模倣した仏具的須臾器が認められる。



No.35 調査区出土遺物実測図

2 まとめ

本調査により、国分遺跡の範囲が広がることを確認すると同時に、No.35・36周辺に僧房等の施設が想定される。(坂口)



調査区設定図

32 古まどう遺跡 - 2次調査 -

所在地	三原町八木笑原新庄字古まどう外
事業名	基盤整備促進事業
調査主体	三原町教育委員会
担当者	山崎裕司
種別	木発掘調査
調査期間	平成15年8月11日～11月6日
調査面積	1,310㎡



調査の位置

1 調査内容

三原平野北東部、東に成相川、西に三原川が流れ、南東から北西にかけて傾斜する扇状地上に位置する。南に淡路国分寺と南海道推定ルート、西に淡路国分尼寺、北西～北に幡多遺跡など、律令期の三原郡を代表するような遺跡が周囲を取り囲む。

A地区では室町時代の遺構面を検出した。調査区東側で多くの柱穴を検出したが、調査区幅が2mで建物の復元はできなかった。東播系須恵器の片口鉢や土師器の皿・煮沸具等が主な出土遺物で、14～15世紀頃の一般集落遺跡と考えられる。

B地区はA地区の西側に位置し、同一面で平安時代と鎌倉時代の遺構を検出した。遺構3・4からは3個体以上の大型の須恵器甕や黒色土器碗が多数出土している。遺構3は円形の土坑、遺構4は浅い方形の窪みの中に柱穴状の遺構が掘られている。それぞれの遺構から出土した破片で接合できたものがあり、同一時期と考えられる。黒色土器はほとんどがA類であるが、畿内系IV類と思われるB類も出土している。ともに口縁端部内側に沈線が見られる。また「て」の字状口縁の土師器皿が出土しており、遺構の年代は10世紀後半と考えられる。

C地区はB地区の北西に位置し、平安時代～中世の遺構面を検出した。

D地区では幅約1.5m・深さ約1.2mの規模の大きな溝を検出した。出土遺物は少なかったが、室町時代と思われる須恵器・土師器皿片が出土している。

2 まとめ

遺跡名となった「古まどう」はD地区周辺に分布する字名で、「護摩堂」があったことに由来すると伝えられる。B・C・D地区からそれぞれ律令期の瓦片数点が出土していることから、寺院関係の建物が存在した可能性も皆無ではない。調査区のほとんどが幅2m程度で、柱穴の並びや遺構の性格等、わからない部分が多かった。

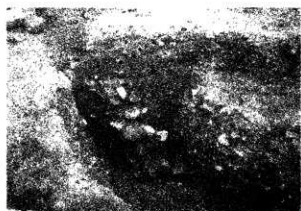
特筆すべき事としては、B地区の遺構3・4出土土器は一括性が高く、10世紀後半の土器様相を示す好資料と言えるだろう。(山崎)



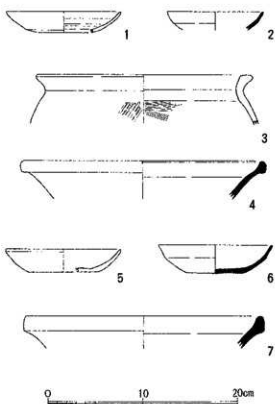
A地区 完掘状況(南より)



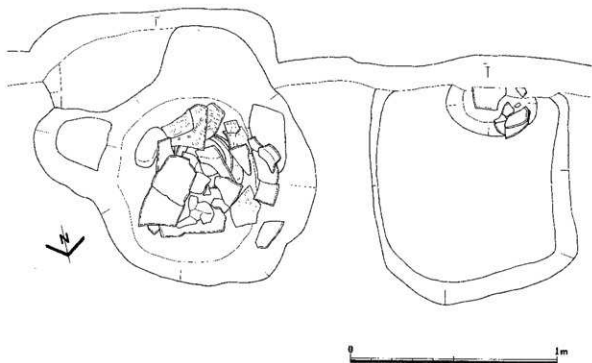
C地区 完掘状況(東より)



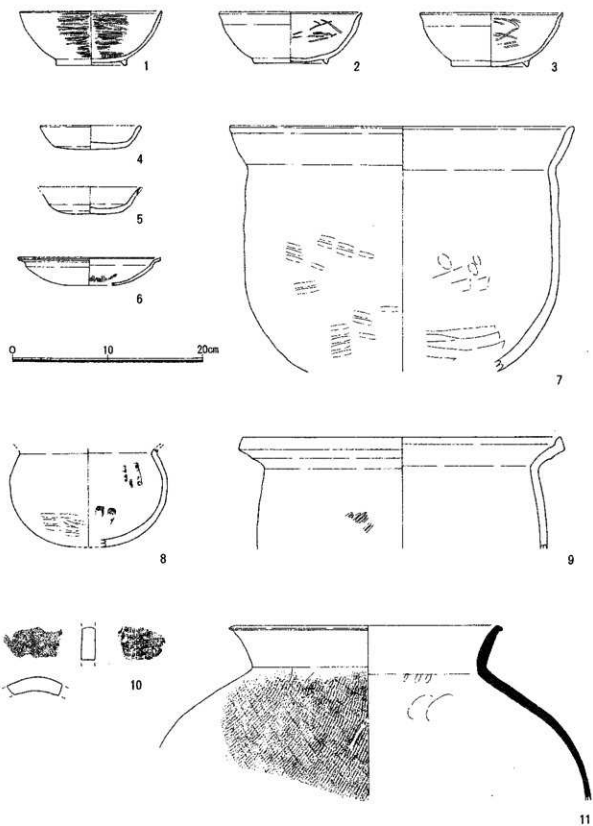
D地区 溝断面



A地区 出土遺物
(1~4 遺構9、5・7 遺構31、6 遺構57)



B地区 遺構3・4 遺物出土状況平面図



日地区 遺構3(3~11)・4(1・3) 出土遺物

33 喜来遺跡 - 4次調査 -

所在地	三原町神代喜来字山崎外
事業名	経営体育成基盤整備促進事業
調査主体	三原町教育委員会
担当者	定松住重
種別	本発掘調査
調査期間	平成15年8月18日～12月10日
調査面積	2,024.5㎡



調査の位置

1 調査内容

遺跡範囲確認調査を行った結果、弥生土器や柱状片刃石斧（結晶片岩製）・石器類・土師質土器など弥生時代と中世の遺構・遺物を確認した。工事実施により損壊を受ける箇所について記録保存を行うこととなった。

【A地区】

規模の大きい谷筋を堰き止める形で造成された越良池の下方にあるため、砂質の強い土壌堆積であり、湧水が著しい。

調査区東側で確認した落ちの肩部より数点弥生土器が出土したのみである。

【B地区】

南北トレンチで弥生時代中期の竪穴住居を1棟検出した。直径5.8m、6本柱で中央土坑の両側にも小土坑を持つ。住居の外側が60～100cmの幅で汚れており、壁面観察から周溝の上にもう1段幅の狭いフラットな面があり周溝と同規模な溝が巡っていたことがわかり、ベット状遺構の可能性がある。

東西トレンチでは土坑や溝を確認した。しかし、遺物はほとんど出土しておらず、時期や性格は不明である。

【C地区】

調査区の東半分は昭和初期に田面拡張のために盛土がなされている。南西部で遺構を検出した。東西方向に走る溝1からは土師質土器片がわずかに出土した。土坑からは土師器碗2枚と瓦器碗1枚が出土した。瓦器碗の高台はほとんど退化しており、13世紀中頃と思われる。石鏝も4点出土し、うち1点はかなり小型で作りが丁寧なことから縄文時代の可能性がある。

【D地区】

C地区に接する調査区である。C地区で確認した溝の続き（溝16）を検出した。出土遺物は中世の範



調査区設定図

時に入る土師質土器である。この西部にある土坑16-1より12世紀末～13世紀初頭の羽釜が出土しているが、前後関係は不明である。

5区では弥生時代中期の竪穴住居を検出した。直径4.9m、6本柱である。住居の南東部の周溝が切れており、中央土坑からその方向の床面が汚れていることから、住人の動線が想定できる。弥生土器・石鏃・石錐・丸く加工された結晶片岩が出土した。中央土坑の東側にサヌカイトの割片がわずかに散布していた。

7区では小土坑を検出した。線的なつながりはあるが、建物は構成しないようである。

9区から西部は河川11が乱行する。溝13は須恵器を含む河川11に切られているが、溝13からは遺物はまったく出しておらず、河川11出土の須恵器も小片で律令期としか判断できないため時間差は不明である。この河川はかなりの水量によって埋没していることから、かつての馬乗捨川と思われる。

【E地区】

南北方向（溝2・3）とそれに切られた東西方向に走る溝1を確認した。溝2・3は時期判定不可能な土師質土器の小片が出土しているが、溝1からは中世須恵器と思われる小片が出土しており、溝2・3も中世以降と思われる。溝2が先行する。

【F地区】

越良池の前面の谷中央に設定した調査区である。1～9区は湧水が著しく、砂質の強い土壌堆積である。そのため、遺構も明確なものではなく、谷中央に向けた溝状遺構が多い。遺物は包含層から平安時代と思われる須恵器片が数点出た。15区の溝1は流水が認められ、掘削時も湧水が激しかった。須恵器小片が出土しているが、時期は不明である。

柱列1は北東→南西方向で3間の柱列である。柱列2は北西→南東方向で2間である。柱列1の上坑より弥生中期の高坏脚部が出土しているが、他からの出土遺物がなく、この遺物のみで時期を決定するのは危険である。柱列の性格は不明である。

2 まとめ

本遺跡は馬乗捨川の影響を強く受けた弥生時代中期・律令期（平安?）・中世（13世紀代）の遺跡であることがわかった。

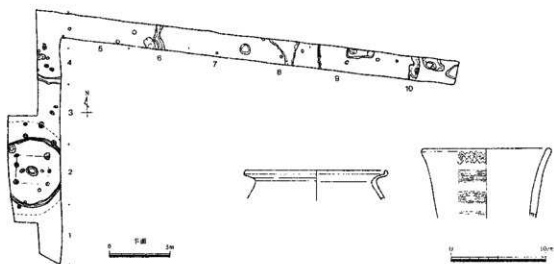
弥生時代は川岸やF地区でも生活できる安定した土壌ではないため、南にある丘陵付近を生活域としていたようである。本事業対象地の西側でも遺構範囲確認調査を行っているが、遺構は確認されていないことから、小規模な集落であったと思われる。

弥生土器の出土量に比べると、石鏃18点、石錐1点と石器類の出土が多い。また、縄文時代の可能性のある石器（石鏃1点・楔型石器のようなもの）も出土している。

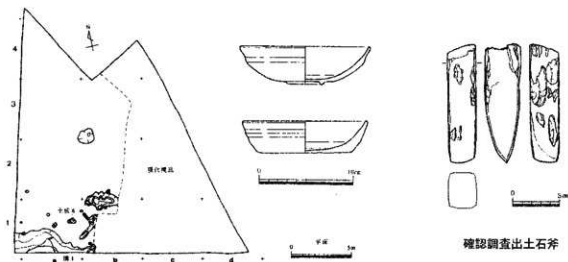
本調査地の東に辻谷荒跡が立地することから窯との関連に注意したが、同時期の須恵器片が包含層より出土しただけであった。おそらく窯跡から流れてきた遺物であろう。

中世は遺構・遺物ともに確認しているが、性格不明な遺構であり、集落は現在の集落とほぼ重複すると思われる。

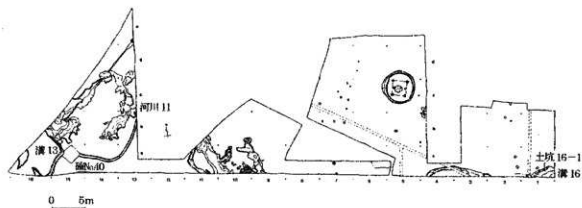
（定松）



B地区 遺構平面図・出土遺物



C地区 遺構平面図・出土土器



D地区 遺構平面図

34 西ノ開地遺跡 - 2次調査 -

所在地	南淡町筒井字西ノ開地外
事業名	県営土地改良総合整備事業
調査主体	南淡町教育委員会
担当者	谷口梢
種別	本発掘調査
調査期間	平成15年8月25日～10月30日
調査面積	810㎡



調査の位置

1 調査内容

上記の県営圃場整備事業に伴い、埋蔵文化財確認調査を行った結果、古代の遺物と中世の遺構・遺物を確認したため、事業施行によって遺跡に影響の及ぶ排水路を中心に本発掘調査を行うこととなった。本遺跡を特徴づける遺構を検出した調査区を述べることにする。

【B地区】

遺構面が2面あることが確認できた。第2遺構面の石組遺構SK01では、骨片・中世の土師器皿片の出上から中世墓の可能性が高いものと考えられる。柱列が1列のみ検出できた。柱穴からは中世の上師器小片や柱材が出土している。

【E地区】

耕作土直下に遺構面を確認した。包含層からは古墳時代後期の製埴土器や韓式系土器・14世紀初頭頃の龍泉窯系の青磁碗などが出土している。遺構では2×4間の掘立柱建物1棟と多くの土坑を検出した。出土遺物としては中世でも前半の土師器・須恵器・瓦器碗・常滑焼などが出土している。



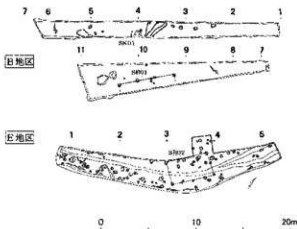
第2工区調査区配置図



第3工区調査区配置図

2 まとめ

本調査において、本遺跡が中世の集落跡であることを確認することができた。調査区の制約から詳細なことは不明であるが、周辺にこの時代の集落域が広がっていたものと考えられ、今後の調査によって明らかになっていくことを期待したい。(谷口)



遺構平面図

35 国分遺跡 —10次調査—

所在地	三原町八木新庄宇福ヶ内外
事業名	基盤整備促進事業
調査主体	三原町教育委員会
担当者	坂口弘貴・的崎薫
種別	本発掘調査
調査期間	平成15年9月1日～ 平成16年1月20日
調査面積	1,242.35㎡



調査の位置

1 調査内容

本調査は、三原町八木国分地区で計画されている団体営圃場整備事業に伴う本発掘調査である。調査は、排水路部分を中心にA～D地区の調査区を設けて調査を進めていった。(P75参考)

調査の結果、事業対象地内において平安時代前半から近世の遺構を確認した。調査区幅が2m前後であるため詳細は把握しがたいが、C11～14区において土坑墓と思われる遺構を6基確認した。土坑墓は平面形が楕円形をなし、規模は長辺が1.5～2m、短辺が0.6～1.1m、深さが検出面より0.25～0.36mを有する。6基の土坑墓の内5基は13～14区に集中するが切り合いはなく、傾き等に規則性は認められない。各遺構から出土した遺物は表の通りで土師器(皿)と古銭・金属製品は共通するようである。古銭

遺構番号	出土遺物
12(墓1)	なし
13(墓2)	磁器・土師器・金属製品・古銭・数珠
14(墓3)	土師器・金属製品・古銭
15(墓4)	磁器・土師器・金属製品・古銭
16(墓5)	なし
17(墓6)	古銭

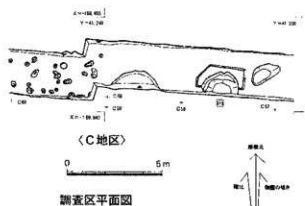
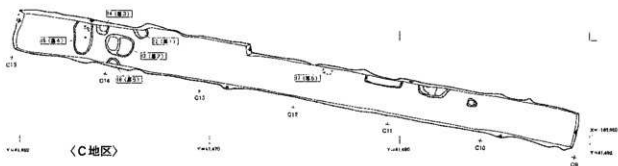
土坑墓出土遺物

は文字が判読できるものは寛永通寶(古寛永と新寛永通寶・寛永通寶(鉄銭)?)が混在)のみで構成される。これらの古銭を六道銭と理解すれば、13(墓2)からは6枚以上の銭貨が出土しており、複数埋葬の可能性が高い。土師器(皿)には釉薬はかからない。これらの出土遺物の年代は、牧野・町西遺跡(多可郡山町所在)や叶堂遺跡(西淡町 松帆所在)の出土遺物を参考にすれば、18世紀後半頃に位置付けできよう。

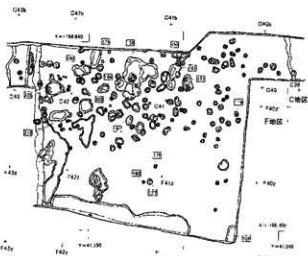
その他、F地区は柱穴状の遺構が主体をなすが、現段階では建物として把握できていない。遺構からは瓦器や土師器等の遺物が出土しており、中世前半が中心となる時期と考えられる。さらには、C57区では東西2mの円形の大型の土坑(318)を確認した。遺構から土師器(皿・鉢)や瓦器が出土しており、12世紀末～13世紀前半頃に位置付けできる。

2 まとめ

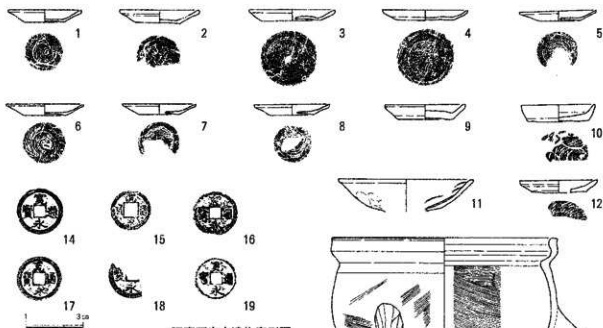
本調査により、平安時代～近世の遺構を確認した。遺構分布や出土遺物から、東に隣接する国分寺が衰退し、周辺域に集落が序々に形成されはじめ、中世前半には比較的まとまって集落が形成され、さらには江戸時代後期には大半が生産域、一部が墓域に利用されたとことが推測される。(坂門)



調査区平面図



〈C・F地区〉

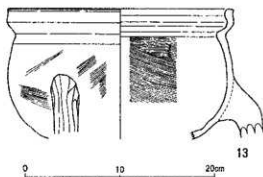


調査区出土遺物実測図

1~4・14~16 (13:墓2)、17 (14:墓3)

5~8・18 (15:墓4)、19 (17:墓6)

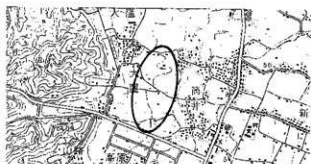
9~13 (318)



13

36 西ノ開地遺跡 - 4次調査 -

所在地	南淡町筒井字芋尻外
事業名	経営体育成基盤整備事業
調査主体	南淡町教育委員会
調査担当	谷口梢
種別	本発掘調査
調査期間	平成16年1月6日～2月9日
調査面積	360.25㎡



調査の位置

1 調査内容

上記の県営球場整備事業に伴う発掘調査である。埋蔵文化財確認調査を行った結果、事業施行によって影響の及ぶ排水路と圃場面の本発掘調査をすることとなった。調査区をA～C地区に分けて調査を行い、A地区では遺構を確認できず、C地区では中世以降の溝1条を確認した。

【B地区】

掘立柱建物1棟・溝3条・土坑敷基を検出した。幅約30cm、深さ約15cmのSD02からは長さ3.8cm、最大幅5cmのサヌカイトの刺片が出土した。SK01・02とSD03は、非常によく締まった黒褐色粘質土の埋土であった。SD03からはサヌカイト製の小型の石織が出土した。風化が激しく詳しい時代については不明である。これらの遺構から他に出土遺物は無く、黒褐色粘質土は自然堆積した谷部分か落ち込みであったのではないかと推測される。

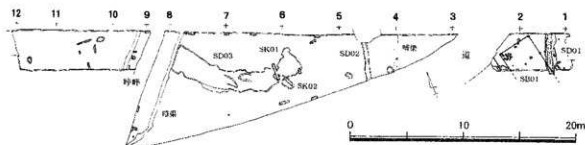


調査区配置図

2 まとめ

今回の調査において明確な時代を示すことは困難であり、包含層の出土遺物から全体的な時代を推測すると、中世後半～近世にかけてのものと考えられる。今後の調査によって遺跡の時代などを明確にしていきたい。

(谷口)



遺構平面図

37 上久保遺跡 - 2次調査 -

所在地	南淡町賀集野田字上久保外
事業名	町道野田牛内線道路改良事業
調査主体	南淡町教育委員会
担当者	山崎裕司
種別	本発掘調査
調査期間	平成16年2月2日～3月16日
調査面積	890㎡



調査の位置

1 調査内容

調査地は三原平野南側、牛内川の左岸約100mに位置し、段丘直下の低平な地形である。調査地の南約500mには横穴式石室を有する野田山古墳、南約200mには奈良時代の遺物散布地の野田遺跡がある。

A地区では中世と古代の2面の遺構面を検出した。古代の遺構面では自然の谷状地形を検出し、埋土からは黒色土器、底部ヘラ切りの須恵器坏などが出土し、おおよそ平安時代頃を中心とした遺物の流れ込みが見られた。中世の遺構面では2棟の掘立柱建物を検出した。遺構232からは13世紀後半～14世紀前半頃と思われる土師器皿が出土している。S B01柱穴と遺構232は埋土上からほぼ同時期と考えているが、S B02柱穴埋土とは違いがあり、中世でも時期差があると考えられる。

B地区はA地区の南東約50mに位置する。B地区では中世の遺構面を検出し、4棟の掘立柱建物を復元することができた。S B03・04はともに2×3間を基本とする建物で、周囲を1間分の庇が取り囲む構造と考えられ、S B03については西側にさらにもう1間分の庇が付く。S B04柱穴の遺構43からは15～16世紀代と考えられる土師器皿が出土している。S B03・04は建物の規模・構造が似ていることから、前後して建てられた主屋の可能性が高いと考えられる。S B03・04・07とA地区のS B02は比較的方向も似ており、同じような時期に建てられたのではないかと考えられる。

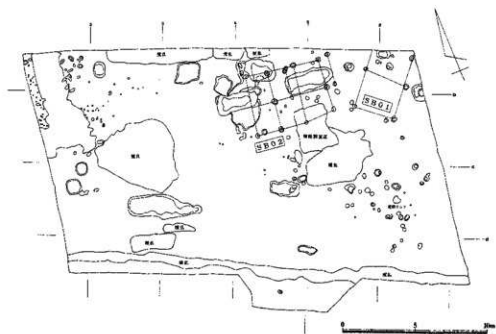
これらの掘立柱建物の周囲では土師器皿等が重なりあって出土し、何らかの祭祀を行ったと思われる遺構44・80・164を検出している。遺構44出土土師器皿は後山遺跡SK5や安国寺跡出土(『三原郡埋蔵文化財発掘調査年報1』2001)と似たような法量・形態であり、15～16世紀代と考えられる。

2 まとめ

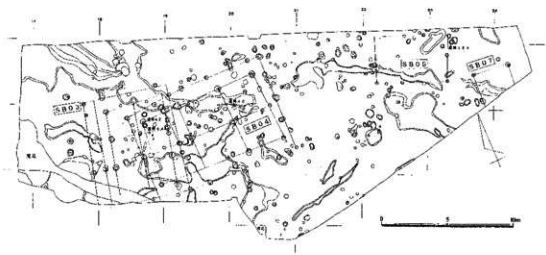
A地区のS B01や遺構232等が13世紀後半～14世紀前半頃、A地区S B02、B地区のS B03・04・07、遺構44・80・164等が15～16世紀頃と大きく2時期に分かれる。特筆すべき事としては、B地区S B04は50.9㎡と規模が大きく、梁行・桁行ともに後山遺跡S B04とほぼ同規格である。ただし後山遺跡と違い出土遺物は一般集落的で、どのような階層の住居なのか判断の難しいところである。今後、A～B地区間で本発掘調査が行われるので、資料の増加を待って再度報告を行うこととしたい。

また中世以外にも、A地区では平安時代の遺物、B地区では弥生時代後～終末期の遺物が何点か出土しており、周辺でこれまで発見されていない時代の遺物が出土している。賀集野田地区周辺の歴史的環境が次第に明らかになりつつあると言えよう。

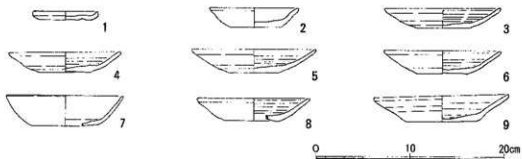
(山崎)



A地区 遺構平面図



B地区 遺構平面図



出土遺物 (1・2 B地区 遺構43、3~6 B地区 遺構44、7 A地区 遺構232、8・9 B地区 遺構164)

5) 2004 (平成16) 年度

38 嫁ヶ測遺跡 - 4次調査 -

所在地	南淡町賀集立川瀬字嫁ヶ測
事業名	特定環境保全公共下水道 (遊水池設置) 事業
調査主体	南淡町教育委員会
担当者	定松佳重・谷口梢・坂口弘賢・ 山崎裕司・的崎薫
種別	本発掘調査
調査期間	平成16年5月17日～10月3日
調査面積	1,170.3㎡



1 調査内容

本調査地は淡路島最大の平野である三原平野西部に位置する標高10m前後の田圃地帯であり、100m西側を大日川が北流する。この周辺は古代の上地区画制度である冬里型地割の残る地域である。周知の遺跡としては大日川を挟んだ約500m西に石ヶ坪遺跡(古代)が確認されているが、この他は埋蔵文化財調査があまり実施されていない地域であるため不明である。

本調査地の北接地で特定環境保全公共下水道(賀集処理区終末処理場建設)事業に伴い平成14～15年度に本発掘調査を行い、嫁ヶ測遺跡が弥生時代前～中期・奈良時代前期・平安時代前期の遺跡であることがわかった。特に奈良時代の遺構は大きく2時期に分けられる掘立建物遺構を15棟確認し、その規模・規格・配置・方向と出土した跡脚円面硯などから、これらの遺構が官衙(役所)遺構であることがわかった。また、国府が機能する以前でありながらも国司が使用する跡脚円面硯が出土したことから、三原郡衙の一部であると同時に国府の機能をも果たしていたことがわかった。

今回その南で遊水池設置事業が行われることになり、確認調査を行った結果、中世の水田跡と時期不明の小溝を確認した。事業実施により遺構が破壊されるため、関係機関と協議を行い記録保存することとなった。

排出土置き場の関係で6区中央付近より東西に分けて調査を行ったが、区別せず記述する。

耕作上下約40cmで中世の水田跡を検出した。調査区内全域に水田跡は広がっており、その上部に洪水砂(黒褐色細砂)が堆積する。この洪水砂によって、田面を歩いた牛や人の足跡が明瞭に検出できた。足跡は部分的に全域には広がっておらず、東西もしくは南北方向にむいて何度も行き来していた。おそらく田の区画内での作業の方向によるのであろう。旧耕作土からは13世紀後半と思われる須恵器・土師質土器・青磁碗片などが出土した。調査区東南隅部分では、耕作土直下より地山まで洪水によって削れており、洪水砂より京宗通寶(1038年初鑄)や中・近世遺物が出土した。近年まで周辺地区は大日川の氾濫に悩まされていたらしく、この洪水砂も近世の氾濫によるものであろう。

中世水田跡の下層より、調査区中央を東西に走る幅5m弱を測る溝1を検出した。溝1は南側では黄

色系粘土で、北側では黒褐色微砂質シルトで検出した。深さは0.9～1.2mを測り、西流する。遺物は東部では最下層の礫層より須恵器片が数点出土していただけたが、西部では11世紀代の和泉型瓦器碗や底部回転ヘラ切りの土師器灯皿などが多く出土した。また、3区最下層付近からは幅3cm長さ21.8cm厚さ0.6cmの板状木製品が出土し、半分に割れて墨痕がほとんど残っていないため内容は不明であるが赤外線によって木筒と確認された。おそらく呪符と思われる。溝1からは樹木の根や貝殻などの自然遺物も出土した。

溝3はわずかながらに溝1を切っていることから溝1が先行するが、すべて埋没してしまう前に一時期併存していたと思われる。

溝1北側の黒褐色微砂質シルトの下層より西流する弥生時代前～中期初頭の幅5m弱を測る溝5を検出した。この溝は溝1よりもかなり蛇行しており、7～9区では溜まり状になり多量の木が出土した。最下層の礫層より多量の弥生時代Ⅰ様式末～Ⅱ様式初頭の上器と木製農耕具や加工痕のある木製品が出土した。弥生土器は甕が多く、体部下半ヘラ削りや結晶片岩片を含んだ胎土である紀伊もしくは阿波座と見られる土器も出土している。また、口縁が外反するいわゆる如意形口縁の甕は少なく、体部上端外側に粘土紐を張り付け積み出した逆L字状口縁のものが非常に多い。沈線は全く施されていないものもあるが、10条前後の多条沈線となり、ヘラ描というよりはくし状工具による沈線となっている。サヌカイト製の石鐮や扁平片刃石斧・刃先に使用痕が認められる太型給片石斧・叩き石なども出土した。

溝6は溝5に流れ込む溝である。溝9は溝7につながり、溝5に流れ込む溝である。幅と比較してもかなり深く70～80cmを測る。サヌカイト製の石鐮が多く出土した。底が浅くなったところに杭が2本打ち込まれており、水を堰き止めていたようである。溝10は溝1に切られるが、これも溝5に流れ込む。

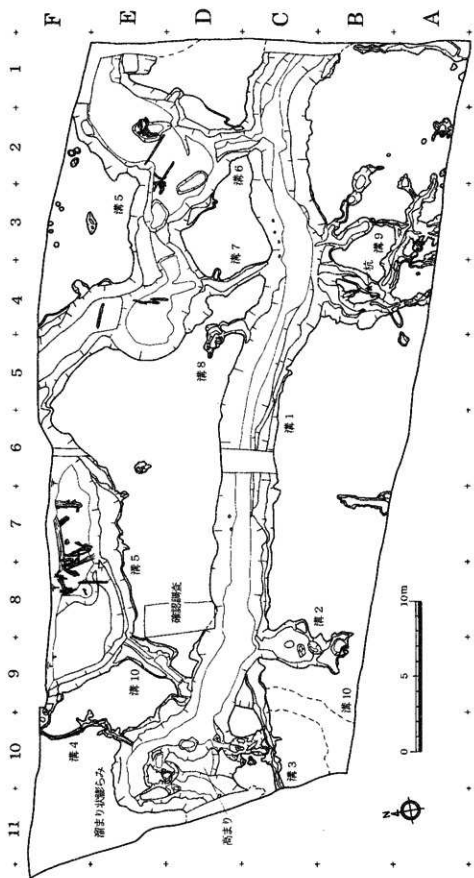
2 まとめ

本調査では、弥生時代Ⅰ～Ⅱ様式と古代・中世の遺構を確認した。

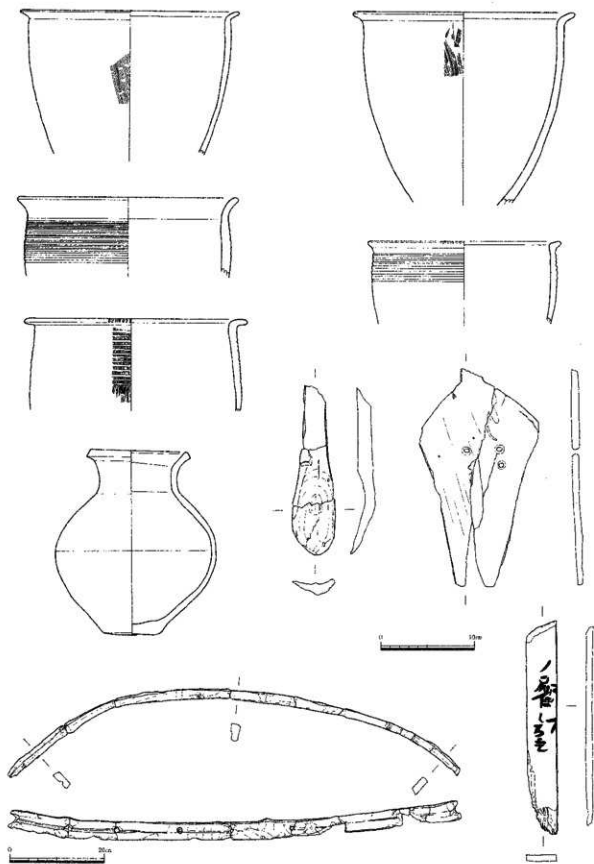
中世水田跡では畔や水路など農地遺構は確認できなかったが、当地が古くから農耕地帯であることがわかった。

弥生時代の溝5は土器や自然遺物が多く自然流路と考えられる。古代の溝1は直線的な流れであり流木などの通行の妨げになるようなものはほとんどない上、一度掘り直されており、管理されていた人工流路といった印象を受ける。また、溝1の10区溜まり状の膨らみの南側で溝床面が40cmほど上がる。この高まりのために水流は一部北に流れざるを得ず、このような状況は他には見られず、溜まり状の膨らみはなんらかの機能を果たしていたと考えられる。

溝5からは紀伊もしくは阿波座の土器や播磨の様相を持つ逆L字状口縁甕などが出土し、海を越えての流通が広く行われていたことがわかる。また、少量であるがⅢ期の土器片（流水文）も出土しており、周辺に弥生前期末～中期初頭の集落や水田跡が埋蔵されていることは確実である。（定松）



遺構平面図



溝1 (木簡)・6 出土遺物

39 国分遺跡 -12次調査-

所在地 三原町八木国分子平河内外
 事業名 公共下水道事業
 調査主体 三原町教育委員会
 担当者 山崎裕司
 種別 本発掘調査
 調査期間 平成16年5月19日～27日
 調査面積 約200㎡



調査の位置

1 調査内容

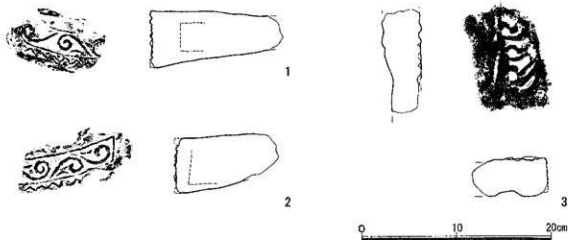
淡路国分寺の西側に立地する国分遺跡では、圃場整備事業に伴う一連の調査により、国分寺瓦窯跡を発見するなど目覚ましい調査成果をあげてきた。この瓦窯跡の西約50mを南北に貫く下水道事業が実施されることになり、延長約180mの調査を行うことになった。

平安時代と思われる柱穴や溝等の遺構がいくつか検出された。また耕地開発時の盛土層と考えられる層からの出土ではあるが、下図1・2の軒平瓦SBH02型式（『国分遺跡発掘調査報告書』三原町教育委員会 2005年）や下図3の鬼瓦片が出土している。

2 まとめ

調査区の幅が1mということもあり、遺構の性格等良くわからない部分が多かったが、柱穴等の規模は一般集落的で、寺院や官衙的と言えるような遺構はなかった。古代包含層からの出土ではないが、国分遺跡について上記のような資料を付け加えることができた。

(山崎)



出土遺物

40 流遺跡

所在地	南淡町筒井字流外
事業名	経営体育成基盤整備事業
調査主体	南淡町教育委員会
担当者	坂口弘賢
種別	確認調査
調査期間	平成16年6月21日～7月13日
調査面積	244㎡ (61ヶ所)



調査の位置

1 調査内容

本調査は、筒井地区で実施計画中の県営園場整備事業に伴う調査である。調査は、2×2m規模の調査区を61ヶ所設定し、重機・人力併用で行った。

調査の結果、No.19・52において遺構を確認した。No.19では調査区南西部で深さ約10cmの浅い土坑状の遺構を確認し、底に炭が堆積する。遺構より上師質土器片と鉄片が出土している。No.52では調査区中央と南西部に直径20cm前後の柱穴状の遺構を確認した。遺構より瓦器破片が出土している。両調査区の遺構は、出土遺物より中世前半期の時期が想定される。

また、No.8において、現代の掘乱層中から、淡陶株式会社のタイルや階段状仕切り道具が出土している。その内出土しているタイルの一つは一辺が10.9cmの正方形で白色をなし、内面中央に「MADE IN OCCUPIED JAPAN」の浮き彫りがある。最近調査された珉平焼窯跡の調査成果によれば、この浮き彫りが施された資料は昭和22～27年に生産された資料に位置付けされる。

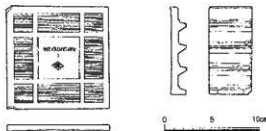
2 まとめ

本調査に中世頃の遺構・遺物を確認した。出土遺物が非常に少ないことから、小規模な集落が想定される。(坂口)

参考文献 「珉平焼窯跡」兵庫県教育委員会 2005



調査区設定図



No. 8 調査区出土遺物実測図

41 衾つノ木遺跡 - 2次調査 -

所在地	南淡町賀集生子字衾つノ木
事業名	基盤整備促進事業
調査土体	南淡町教育委員会
担当者	谷口 梢・坂口 弘貴
種別	本発掘調査
調査期間	平成16年 8月12日～12月24日
調査面積	約755㎡

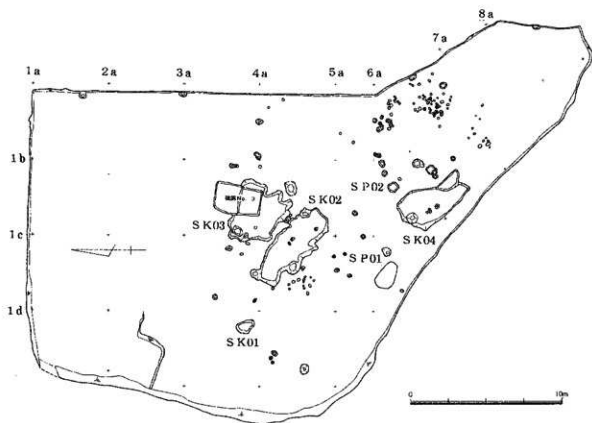


調査の位置

1 調査内容

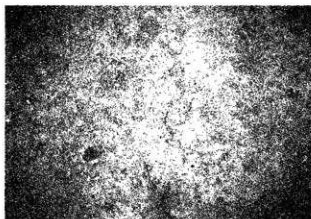
調査地は、大田川の最上流右岸域に立地し、生子地区を流れる幾つかの小規模な河川が作り出した明瞭な河岸段丘上に位置し、標高77.8mを測る。

遺構は南側半分で比較的まとまって検出した。遺構面は表十から約15cm下げた黄色系粘細砂質土をベースにし、遺構はそこから掘り込まれている。長さ約1.2m、幅約0.7mの楕円形落ち込み状の上坑（SK01）からは、弥生時代終末期のものと考えられる高環・鉢・甕など（1・4・6・7）が出土している。



遺構平面図

長さ約6.0m、幅約2.5mの大型土坑を調査区中央において2基（SK02・03）、調査区南端において1基（SK04）検出した。その埋土は黒・褐灰色系粘砂質土であり、3基とも同じような土壌堆積をしている。深さは約20cmを測り、炭化物を多く含むが焼土は確認できなかった。出土遺物はかなり小片な土器が数点出土している。これらの土器は、SK01から出土した弥生土器とほぼ同じような形態をしており、時期も同じものと考えられる。



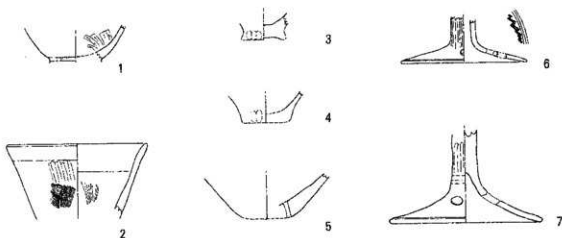
SK01 遺物出土状況（南より）

2 まとめ

今回の調査で本遺跡を特徴付けるものは、SK01から少ないながらも出土した弥生土器である。これらは弥生時代終末期のものと考えられ、この時期の鉢や甕にみられる外面調整技法のタタキが出土したものにはあまり見られず、胎土も砂粒がほとんど含まれていないことなど、この地域独特のものと考えられる。出土した弥生土器の器種は煮沸や貯蔵に使用された甕・壺に比べ、供膳や祭祀に用いられた高坏・鉢の出土が比較的多かったが、それほど出土数は多くなく、祭祀に使用されていたとまでは断定できない。調査範囲の制約から住居等の確認はできなかったが、集落の中でも特異な場所であったのではないかと考えられる。しかも、土器様式の検討から弥生時代終末期の短期間しか存続していなかったものと想定できる。

このように、この遺跡周辺には弥生時代終末期の集落が存在していたものと考えられ、今まで歴史的文化財の発見が少なかった生野地区において、弥生時代から人々が生活していたことがわかるなど、三原郡内における弥生時代の集落動態を垣間見ることができたのではないかとと思われる。

（谷口）



出土土器実測図（S=1/4）

42 経所遺跡 — 2次調査 —

所在地	三原町神代地頭方字経所外
事業名	経営体育成基盤整備事業
調査主体	三原町教育委員会
担当者	山崎裕司
種別	本発掘調査
調査期間	平成16年8月31日～10月18日
調査面積	655㎡



調査の位置

1 調査内容

三原平野南部に位置し、西方向へ緩やかに傾斜する地形である。調査地南側を馬乗捨川が流れる。

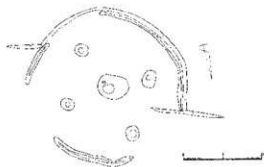
江戸時代の地誌『味地草』「経所」の項に「福良官道並松の南上手に長十六間幅十二間寺家の廃跡あり西に塔堂と云歟号に塔の礎石方四間許及阿弥陀堂の遺凸等存せり」とあり、現在でも調査地北東の墓地内に基壇状の凸地及び礎石が残っている。

直径約4mの円形竪穴住居1棟が検出され、周溝・主柱穴4基・中央土坑を備える。IV様式の壺片(1)や紡錘車(2・3)が出土した。

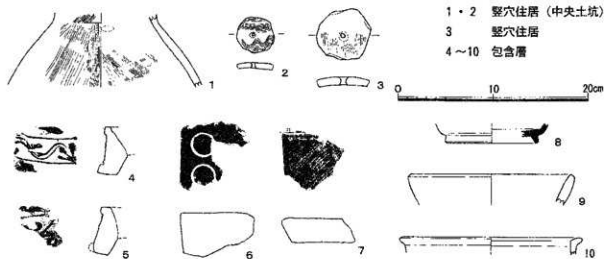
2 まとめ

馬乗捨川上流域の喜来遺跡でも同時期の竪穴住居が検出されており、弥生時代中期に馬乗捨川沿いに集落が開示していったと考えられる。

包含層からの出土遺物には、中世の軒平瓦(4・5)鬼瓦(6)片等が含まれ、上記『味地草』に記される寺院跡と関わりをもつと考えられる。(山崎)



竪穴住居 平面図



- 1・2 竪穴住居(中央土坑)
- 3 竪穴住居
- 4～10 包含層

出土遺物

43 加治館跡 - 1次調査 -

所在地	緑町倭文庄田字道ノ下外
事業名	町道庄田中道線道路改良事業
調査主体	緑町教育委員会
担当者	的崎薫
種別	確認調査
調査期間	平成16年11月10日
調査面積	8㎡(2ヶ所)



調査の位置

1 調査内容

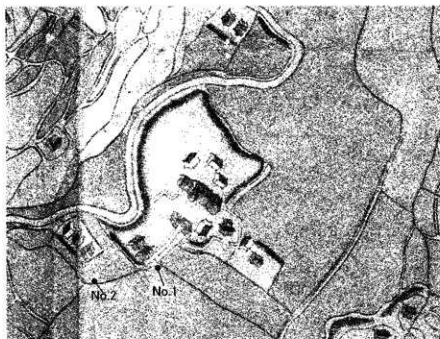
調査地は安住寺川の左岸にあたり、周知の遺跡である加治館近辺に位置する。周辺には船越館跡(庄田城跡)など多くの遺跡が点在している。加治氏は中世に倭文庄の地頭であった船越氏の家臣であり、南北朝頃に来淡したと考えられている。1507年に船越定氏の没後、遺族が阿波の家領へ退くのに際して、庄田城の城代家老となって城を管理していた。その間に倭文八幡宮の改築をし、平等寺に木造薬師如来像(県重要文化財)や康和殿般若経を寄進したといわれている。

上記事業に伴って分布調査を行った結果、多くの遺物を採集した。調査は、既存道路拡幅工事であるため調査区の設定に限りがあり、2ヶ所となった。天保5(1834)年に描かれた『庄田分間絵図』において、その当時館跡は斥屋となっているが、現在までその地形にほとんど変化が見られないことから、調査区は館跡の南端(No.1)と道部分(No.2)にあると推測される。

No.1は、表土直下から粗砂と粘質砂などが厚く堆積していることから、安住寺川の氾濫原であったと思われる。No.2も川の影響は受けているが、やや安定した層から弥生時代後期の土器片が数点出土した。しかし遺構は確認できなかった。

2 まとめ

今回の確認調査で中世の加治館、もしくは江戸時代の庄屋に関連する遺構・遺物は確認されなかった。調査地は安住寺川の氾濫原であり、おそらく調査地の北東に加治館跡が広がっていると思われる。また、No.2では弥生後期の単純包含層を確認したことから周辺に弥生時代の遺跡が存在する可能性がある。(的崎)



『庄田分間絵図』

44 みのこし遺跡 - 2次調査 -

所在地 南淡町阿万東町字みのこし外
 事業名 阿万111号線道路改良事業
 調査主体 南あわじ市教育委員会
 担当者 山崎裕司
 種別 本発掘調査
 調査期間 平成17年1月20日～2月18日
 調査面積 270㎡



調査の位置

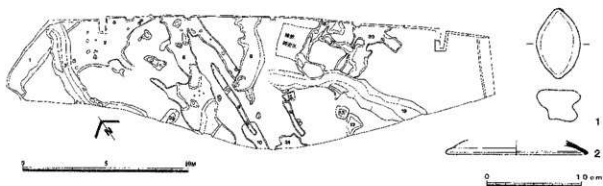
1 調査内容

阿万平野部の南東端、北西に向かって緩やかに傾斜する微高地上に立地する。

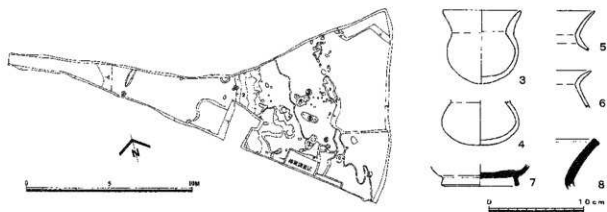
A・B地区共に谷筋に位置し、溝や自然流路が多く検出された。A地区遺構18からは有溝土錘(1)が、遺構5からは坏B蓋片(2)が出土している。B地区西側の包含層から小型丸底土器(3)、確認調査区周辺からは4～8が出土している。およそ古墳～奈良時代の遺物が少量出土している。

2 まとめ

出土遺物は流れ込みの小片がほとんどで、古墳～奈良時代の遺跡周縁部と考えられる。 (山崎)



A地区 遺構平面図 出土遺物



B地区 遺構平面図 出土遺物

45 才門遺跡・石田遺跡・神子曾遺跡

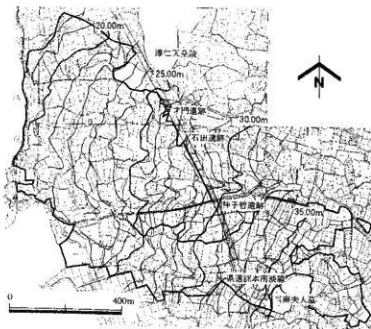
所在地	南淡町賀集鍛冶屋字才門外
事業名	経営体育成基盤整備事業
調査主体	南淡町教育委員会・ 南あわじ市教育委員会
担当者	定松佳重・谷口梢
種別	分布調査
調査期間	平成16年3月19日～31日 平成17年1月24日～2月3日
調査面積	約50ha



調査の位置

1 調査内容

調査地は淡路島最大の三原平野南西部に位置し、論鶴羽山系から派生する扇状地の末端部に広がる田圃地帯である。上記の県営圃場整備事業に伴い分布調査を行った。調査は玉葱やレタスの作付け中である田圃の畝を一筋毎に踏査した。調査の結果、少量ではあるがほぼ全域で遺物を採集した。サヌカイト製の石鏃・土師器・須恵器・中世以降の陶磁器などである。



遺跡位置及び周辺の地形

2 まとめ

本調査において、サヌカイト製石鏃を22個も採集しており、そのほとんどが縄文時代のものであった。その他の遺物は、弥生時代・古代（律令期）～中世にかけてのものと考えられる。平成16年度に兵庫県教育委員会が県道洲本南淡線道路改良事業に伴う発掘調査を行い、弥生時代中期の周溝墓が18基と縄文時代や平安時代の遺構が多く確認されており、これらに続く遺跡が圃場整備予定地に広がっているのは確実である。

(谷口)



出土遺物実測図 (S=1/2)

第3章 資料紹介

1) 神代浦壁出土勾玉 (個人蔵)

本資料は昭和20年末に神代浦壁字三味原で山林を開墾してみかんを植樹した後、雨にさらされた表土より採集されたものである。

採集地点は三原平野を形成した三原川上流である諭鶴羽川の顯著に発達した河岸段丘縁辺にあたり、標高89.8mを測る。ここからは三原平野を越えて播磨灘が一望できる。

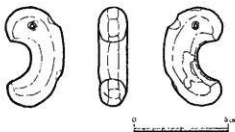
勾玉は長さ5.2cm、頭部幅2.1cmを測る。表面に数ヶ所の欠損があるが、完形である。暗緑灰色で蛇紋岩裂と思われる。丁寧な作りがなされており、表面は滑らかである。

2003年度にこの地区で圃場整備が実施されることになり、埋蔵文化財確認調査を行った。三原川の河岸段丘縁辺にあたるため急斜面に客土をして造成されており、この勾玉に伴う遺構・遺物は確認できなかった。

本資料は古墳時代の遺物と推測されるが、採集地点付近では古墳は確認されておらず集落も未確認である。
(定松)



採集地点位置図



参考文献 『みはらの文化』1992 三原町教育委員会

2) 戸川池窯跡

所在地	南淡町賀集牛内
調査主体	三原郡広域事務組合教育委員会
担当者	的崎薫・定松佳重・坂口弘貴
種別	表面採集調査
調査期間	平成16年2月13日・ 平成17年3月1日



調査の位置

南淡町賀集牛内にある戸川池東岸では以前から須恵器が採集され、奈良時代前半頃の窯跡として周知されている。今回、嫁ヶ淵遺跡や淡路園分寺などの奈良時代の遺跡から多くの須恵器が出土し、これらの遺跡の須恵器と戸川池窯の須恵器が時代的に併行関係にあるのかを再度考えるため、2度にわたって新たに表面採集を行った。

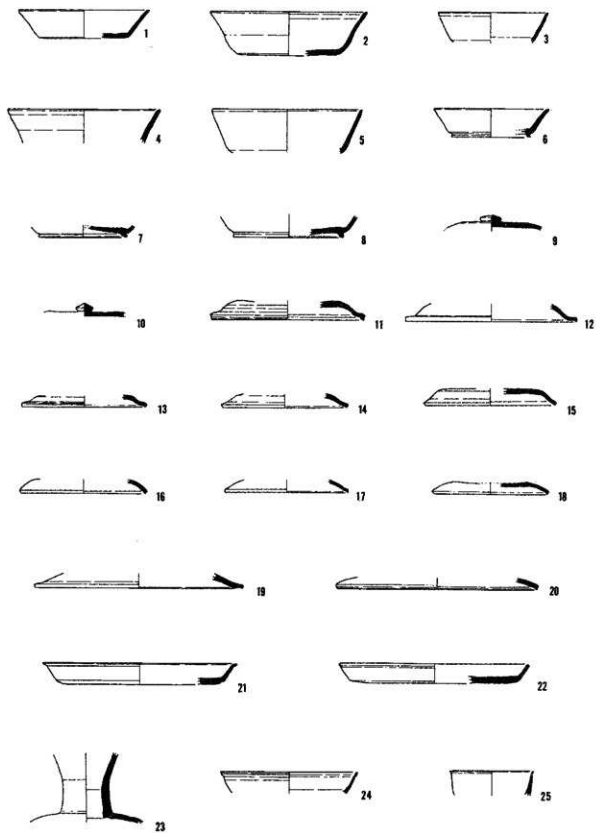
採集した器種は坏A・坏B・皿・碗・長頸壺・甕である。坏Aは1・2、3～5は坏Aか坏B、坏B身は6～8、坏B蓋は9～18、19・20は皿蓋、21・22は皿・23は長頸壺、24・25は碗?である。

坏A・坏B身は平らな底部に直線的な体部で、小型品と大型品に大別できる。坏B蓋はボタン状のつまみがつき、笠状の天井部から屈曲して垂下するものと、天井部中位から丸みをもったまま端部に至るものがある。皿蓋は2点とも直径20cmを越える大型品で、皿2点も直径約20cmを測る大型品である。

採集した須恵器から、戸川池窯跡は奈良時代末から平安時代初頭の窯跡であることがわかった。よって、奈良時代前半の官衙である嫁ヶ淵遺跡や奈良時代後半が創建期である淡路園分寺への供給には至らないことが明らかとなった。島内には23の窯跡が周知され、その内古代の窯跡は大きく洲本市大野地区と津名郡五色町塚地区と三原郡論鶴羽山西北麓地区に分けられる。三原郡内で現在周知されている窯跡は戸川池窯跡の他に、7世紀中頃～末までの汁谷窯跡(3基)、8世紀後半の園分寺瓦窯跡(2基)、平安時代の佐礼尾陶瓦窯跡・佐保谷瓦窯跡、13世紀の成相寺窯跡、15世紀後半叶堂瓦窯跡(3基)、時代不明の土器山窯跡であり、三原郡内の奈良時代前半の須恵器窯跡は今回の調査によって無くなった。論鶴羽山西北麓周辺に新たな窯跡の発見を期待する。(的崎)



三原郡内の窯跡



採集遺物 (S=1/4)

2008年3月31日発行

南あわじ市埋蔵文化財発掘調査年報 I
2000～2004年度 埋蔵文化財発掘調査

発行 南あわじ市教育委員会

編集 南あわじ市埋蔵文化財調査事務所
〒656-0455 兵庫県南あわじ市神代国衛1100
TEL 0799-42-3849

印刷 浜田タイプ
〒656-0521 兵庫県南あわじ市潮美台2丁目6-5
TEL 0799-52-1080